

運命は先天的にお兄
ちゃん子 一歴代最少
の契約者たち 転生先
にて恩送り

yyuuss

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

主人公は転生先の異世界で精霊と契約させられてしまった……。しかし、その精霊との契約によって様々な恩恵が得ることができた主人公。中でも記憶の鮮明化は現代日本から転生した主人公にとっては特に効果的だった。この知識の鮮明化というもの、なんと忘れた記憶やパツと見ただけの記憶も映像が流れるように見ることが出来るものだったんです！魔法が非常に発達している分技術があまり発展していない異世界においてこの恩恵はこれ以上なく有能でした。

とある一人の精霊のエゴによって強制的に転生させられた主人公の深生。深生は兄

ちやん子で義妹かつ婚約者となったカノンと一緒に過ごしながらこの異世界を堪能する。

「兄ちゃん、私が頼りないとか思ってるの？　これは転生先で出会いを果たした兄ちゃんと私、カノンのストーリーなんだよ。つまり運命ってこと！　決して私は重くはないし、二人で力を合わせて物語を織りなしていくんだから、ね」

ただ、精霊といってもカノンは枕の精霊であって!？。

深生の落胆をよそに「何でもできるから」とカノンは自信満々に言うけれど、如何せん枕でしょ……、こいつに期待して俺の人生を預けてもいいのか…？

処女作なので一定のミスはお許し下さい。そして、何かミス等がある時は教えてもらえれば幸いです。

ある程度作品の進捗に余裕ができたらどこか他サイトにも投稿する予定です。

目次

第0章 プロローグ

プロローグ | 1

第1章 運命が決まった転生24時

夢として交差してゆく随想 | 11

空想に誘(いざな)われ、現実を見た

19

夢かうつつか | 31

始まるエピローヴ劇場—どこまでも、

これからも | 43

契約とは突然に—まだまだ転生初日は

終わらずに | 52

契約の儀式 ニオラント・ミダ

60

ライバル | 72

信頼を生む覚悟 | 82

打ち明けようとする秘密 | 94

詰めに詰められた転生初日 | 106

青く深く、枕の精霊は枕に戻る

115

憧れは二つ名 | 124

将来の夢 | 132

カノン編エピソード1 日本から来た

少年との関係 | 141

カノン編エピソード2 一緒に居るた

めの契約・機能 | 150

第2章 学校編

第2章1話目 マラ・モロツカの伝記

161

先人の知恵

170

大切な2人の天使

180

春の導き

189

眩しい程のポジティブ野郎

199

お調子者と真面目なコンビ

209

関係

218

第0章 プロローグ

プロローグ

今日の夢も昨日の夢もやけに具体的に覚えている。どこか日本とは似つかわない場所での近そうな仲間らしい人々と歩いていた……。青髪碧眼の少女もいたし、凜としたシルバーグレーの髪色の少女、あとはその子たちの監督的立場なのか大人も一人居たような……。夢だから所々曖昧だ。

昨日の夢では仲間たちとたくさん場所を回った。真つ白い街の街並みや穀物地帯で黄金色に揺れる収穫間近の作物、湖から昇ってくる太陽。夢の中だけど実に風光明媚で感動したものだ。あと炒飯も食べていた気もする。

今日の夢では昨日の夢とは一転して嵐の中と思うほどに暗い空の下を自分たちは励ましあいながら進んでいました。その中でも時々ポツン、ポツンと点在する村で何故かは分からないものの応援されたときには凄く心が温まったものだ。

しかし、急に目の前が真つ暗になったかと思うと走馬灯がよぎるかのように頭の中にたくさん景色が流れ込んできます。そうして気がついたらまたまたベッドの上。

こんな夢が連続して起こるとは何かのフラグが立ったのでしょうか……。

「あー、進展性のない生活だこと。面白いことでも何かないもんですかねー」

と呟いてみるも無論何も起こりもしなければ、今実際に問題が起こっている訳でもない。

「まあ、それもそのはずこの家には自分一人しかいないんだからな」

何とも寂しい限りであるのだが、その一人芝居をする彼は鏑木深生（かぶらぎ みお）という。現在彼は大都市にある私立高校に通う17歳になったばかりの高校2年生である。彼はルックスではまあイケてるのだが、それ以外は不器用さゆえになんとも残念である。こういう高校生はどこにもいるかもしれないが、彼もまたしがたい高校生に過ぎない。

そしてその学生生活も今は夏休みという天国状態。将来設計をしつかりしている世の高校生ならば夏休み期間ははじめに勉強をしてうつつを抜かすことはないだろう。しかし、いつもの癖である面倒ごとは後回しスタイルを貫く深生は勉強にお構いなくまったりと過ごす予定だ。小遣い稼ぎのために仕方なく始めた夏休み限定のバイトと寝ること以外の時間は有り余っているというすなわち暇人、ということと深生は夏休み

を満喫しているのである。

しかし、彼とて時間があるからって予定がないわけではない。今日は昼から友達である大学の同級生と会うことになっている。ただ、予定の時間まで暇なのだ。

家で特に何をするまでなく時間をつぶしたのち、自転車を漕いで二十数分、とある家のインターホンを鳴らすといつも通りの決まり文句が飛んでくる。

「よう、かぶらぎ。じゃなくて『かぶらぎ』だったか。ドアは開いてるから入っちゃって」「柴田、お前相変わらず名前間違っているじゃないか。まあ、上がらせてもらうぞ」

とインターホン越しに慣れた様子で柴田道士と話す。

柴田道士、少しだけ敬意を持って柴田君とでも呼ぼうか。その柴田君は深生と同じ高校の同級生である。去年学年初めの席順で隣であったことから仲良くなり、今年もなおクラスが一緒だったことから日常的によく話す機会が多い奴だ。

しかし、その柴田君というのもルックスがいい自分から見ても自分よりかっこいいはずなのだが、なにしろ「茨城」を「いばらぎ」と読むかの如く人の名前を言い間違えてくるのが問題どころだ。1年生の時になんともない名前の奴に対しても時々間違えているところを目撃して「こいつ単に名前を覚えてねえんだな」と驚きを通り越して呆れたこともある。実際に初めのうちは苗字だけでなく何故か名前も間違われていた分少

しイラつく部分もあったが、下の名前を正確に覚えてもらった今はそれよりはましだ。柴田君いわく決してわざと間違えているわけではないので、その付き合いも一年経てばその間違いが決まり文句としてもう慣れっこだし、むしろいつも通りで安心感がある。

「よお、深生。今日は俺より遅かったな、いえーい」

「おう岩槻。今日はたまたまな、今日は。遅刻しないと珍しいこともあるもんだ」

「おい楠木つ、俺もいるんだ。気づいているよな？ よなあ……、」

「心配するな。気づいているさ湯霧。お前さんがそう聞くてことはどちらかには気づいてもらえなかったんだな……」

柴田の家におじやまして彼の部屋に入ると、部屋の主である柴田の他に岩槻と湯霧の3人がえらく堂々とあぐらをかいてそこに居座っていた。岩槻と湯霧もまた深生や柴田と同じクラスであり、日頃からつるむことも多い。岩槻は運動系の部活に所属しており、根は本当にいい奴だが、なにしろ遅刻癖がひどい。見た目のゴツさから歩く体育系という二つ名を頂戴する奴だが、見た目と裏腹に気合や根性論とかは全く信じていないたちでありそのギャップから惚れる女子も多いとか聞く。

湯霧の方は比較的におとなしめで、頭が冴える。いかにもリーダー向きでは、と思うのだが、問題があり湯霧は影が薄く存在感がないらしいということだ。いまいちこの話

が確証を持ってないわけは普段から毎回深生には湯霧の存在が目に入り、一回も気づかなかつたことはないからである。なので、深生は湯霧にことあるたびにちやんと見えているか聞かれるが、その度に見つけてもらえないぐらい影が薄い奴つてこの世にいるんだな、と解釈することになっている。

その4人でわいわいがやがやと高校生ゆえのたわいのない話で盛り上がること数時間、岩槻も湯霧も予定があるとかないとかで帰つてしまい現在夕方前。深生と柴田の2人も解散しようというところ柴田に相談されるが、多分日程関係だろう。

「楠木。明後日の昼にでもまた俺の家に来ないか？お前さんはどうする、来るか」

「もちろん行くぜ。昼は柴田が作つてくれるんだろう？それなら、なおのこと行くっきゃないだろう」

「来るか来ないか聞くまでもなかつたか。じゃ準備もあることだ、11時ぐらいに来いよ。明日も教えてやる。」

彼、柴田はルックスがよいだけでなく、料理屋の一人息子であり料理の腕も確かだ。その上、将来の夢のために料理を作つてはただでふるまってくれる。その柴田の料理が食べられるのであれば断る理由など見当たらない。なんなら今日の昼もご馳走になリたかつたぐらいだ。

一方で、残念な深生は料理もまた不得意であつて、切る、焼く、茹でるといったなか

でも簡単な工程しか自信を持って出来ない。料理スキルは月とすっぽんほど差があり、柴田の料理の能力はつくづく羨ましいレベルであった。負い目はあったが相談したところ気兼ねなく応じてくれたどころか、深生が1人で家に遊びに行くときに彼が直々に教えてくれることになった。つまりはいい奴だ。

「しかしよ、こうお前とこんな関係になるとはな。大事なものを共有できる仲間っていいよな」

「おい、ほかの奴にでもこんな関係とか聞かれたときにはおめえ勘違いされる」

「俺らと違って確かにあいづらには転生ものの魅力は伝わらなかつたが、勘違いはされてないだろ。それにほかの奴には言わねえし」

「いやいや、勘違いって『こんな関係』とか『大事なものを共有』とかの言葉の方だ。高校生なんてまだガキなんだがら気を付けないと変な噂がすぐにでも立ってしまふぞ。まあ、オタクに代表されるような秘密事なんぞ誰の間にも一つや二つあるだろうが」

深生の言う二人の間にある秘密事とは他ならぬ転生ものへの情熱、いふなれば愛である。そう、深生は転生ものの話が大好きであり、柴田もまた転生ものが好きなのだ。この共通点が単にいくつかの講義が同じであるだけの深生と柴田の2人の絆を育むには十分である。

また、理由はそれだけではない。この話にあるように以前深生と柴田の2人が転生も

のこの話の面白さ、素晴らしさを同級生に語ったことがある。しかし、努力むなしく転生ものの魅力は伝わることはなかった。ただ「オタクだからキモい」みたいに拒絶されるような理由ではなく、これは実際のところ、何ともまあつまらない授業の直後でみんな正気じゃなかったからなのだが皮肉なことにこの事実を2人は知らない。とにかくこの一件以降二人は公衆の前で口には出せなくなってしまったが、代わりに今までよりもよく会う間柄に昇格したのは間違いない。

「昼飯がどんなにか気になるが、それよりもストーリーとやらはどんな感じなんだ？」
「それを言っちゃ面白味に欠けるだろう。一つ言うとすれば今回は精霊が出てきたり……とかな。本当のところ内容をよく知らんのよ」

柴田と二人きりで会うときは必ず映画やアニメや漫画を見るなり読むなりして楽しむことをモットーとして今日のような省略しがいのある無駄話はしないことにしている。ただ、ネタバレはつまらないとかで柴田は知っていてもどんな内容かは教えてくれない。ちなみに深生は話の内容を頭に入れて見たい派なのでネタバレ歓迎なのだが。こういう人もいるよね。

「ほおう、精霊とは一体どんなやつか楽しみだ。ねえ柴田さん、実際よくある話の展開みたいに転生とか本当に起こらないものですかね」

深生も当然転生というイベントが夢のまた夢であることは理解しているが、こういう

話をする時は憧れの気持ちも大きい分、ごく自然に転生したいと常日頃からよく口に出している。

いつも通りならばすぐに無理だよなとため息交じりに苦笑いを浮かべる柴田であったが、今日はどういうわけか考え込んでから意を決したのか、長いこと付き合っている相棒の如く自身の考えを返す。

「俺が言うのもなんだが……、いや親友として言わせてもらおう。深生、お前は少し夢を見すぎているようだな。確かに転生みたいなのが実際に体験できるのなら俺だって喜んで進み出るだろうけどよ……、現在進行形で時が巡って、俺もお前も……、……ほかの奴だっているこの世界の日本での生活も楽しいものじゃないか。深生もよ、こーう……、そうだな……やっぱそういうのは妄想上にあるから……想像できていいんじゃないかい。少し冷静になれよ」

柴田は決して人を馬鹿にするタイプでないのは付き合えば上知ってはいても、急になだめられて冷静になれとでも言われてしまうと一時的でもやはり傷つくものである。しかもまさか柴田にそう言われるとは。ただ、どうも先程の柴田の発言が申し訳なさそうな歯切れの悪そうな言い方であったのは気になる。

「夢を持つのは構わないし、やりたいことがないと人生はつまらなく進んでしまう……。だが、時には叶わぬ夢とは離別して現実的に考えて動くことも必要なんだ。分からね

くともないけどよ、転生への過度な憧れについてはちよつと家に戻って落ち着け。とりあえず夜のうちにでも寝とくかなりのんびりしておけば治るだろうよ、今日は帰りな」

「おい、そこまで怒ることもないだろう……。憧れは大きいけどよ——」

「深生。怒つてはないから帰つて寝ろ。明日またうちに来い」

追い打ちをかけられショックを受けた深生は外に出た。こちらの街で一番の知り合ともも言つていい柴田との言い争いは端から見れば不毛だと罵られるかもしれないが、当事人同士、特に深生にとつては相手も相手ゆえに不名誉ながら非常に重要な意味を持つのだ。

「はあ〜」

柴田の家からぼーつと自転車を漕いでいるうちにあつという間に自分の家に到着したと錯覚するほど深く悩みこみながら一つ溜息をつく。部屋の鍵を開けるなり手洗いの習慣をも忘れ、ベッドへ一直線に飛び込む。

「はあ。柴田も何しろそこまで言う必要ないんじゃないか。まあ、確かに『芸能人になる』とか『定年退職して残りの人生のうちに世界一周旅行する』とか『宝くじ一等当選』みたいな可能性は明らかに低いけどゼロではない夢とは違って、転生なんてもんは叶いつこない願いなんだよなあ。奴も真面目すぎるだろ」

帰ってきてそうそうにベッドに身を放り出してはまた溜息をつく。時間が経つにつれ冷静になる頭に現実を重くのしかかって余計にしよんぼりとうなだれる深生であったが、後悔しまくつても重く負担になるし、普通に後悔することさえも面倒とて切り捨てつつもそれでも転生できる見込みがないものかとあーでもない、こーでもない、とぐちぐち呟きながらお気楽モードの深生自身が考えるに行きついた結論。

「大概こういうのって普通に寝て、目が覚めて起きたら勝手に転生後の世界へ、みたいな……。あり得る。ああ、それを狙おう。まあ、ワンチャンあるつしよ」

なんとも浅はかなことだが、深生は昔からお気楽な性格である意味慎ましいようだ。そして、そんな期待をする深生が次にとる行動は考えるまでもなくおのずと決まってくるのであって、つまり深生は夕暮れ時に愚かにも寝ようとするのである。

夜寝れなくなりそうとか、内心駄目かも……とか頭によぎってきたが、ネガティブ思考とはおさらばだ、と振り払うことにし、転生への希望を胸に深生は眠りにつく。

無論、夜更かし確定コースに進む深生を誰も止めることは出来なかった。

第1章 運命が決まった転生24時

夢として交差してゆく随想

「兄ちゃん。兄ちゃん」

こう語りかけられたような気がして深生が目を覚ますと見慣れない部屋の中に彼はいた。そして呼ばれた方向へ目を向けるが誰もいない。きよろきよろ見渡してみても誰もいないし、呼ばれたはずなのに不思議なことに人の気配すら感じられない。

「まずここはどこなんだ？　そもそも一人っ子の自分に兄弟はいないし、女の子っぽい声が聞こえたけど誰もいないし。これが異世界っていうやつなのか、俺って幸運だな、ありがとう神様」

証拠もない短絡すぎる解釈を都合よく行った深生。幸い部屋に窓があったのでどんなものかと外を覗いてみる。そうして目に飛び込んできた景色は綺麗な街並みであり、テレビとかで見る機会の多い日本の高層ビル群やのどかな田園風景とは違って、どこか異国情緒をもたらしている。ところどころレンガ積みの家屋も確認できた。

「見ず知らずの土地にいるってことは異世界転生の第一条件はクリアってことだよな。見た感じ旅行雑誌で見たヨーロッパの保存地区にありそうな建物も多いけど、どうなん

だろ」

深生にはこの街とこの現実が夢なのか、はたまた異世界の空間なのかは分からなかったが、今度は窓越しからではなく実際に表に出てこの街の様子を確かめてみようという街を探索する。嬉しさを交じりの散歩が悲しみを生むとはつゆ知らずに。

「ここはオツセラとかいう都市らしい。まずは今いる場所を知らないことには動きようがないからな。異世界なんぞ理不尽の塊みたいな世界であつても全然おかしくないし」
自分のこの足で歩き回つて情報を集めること数時間。元をたどれば地元のことは地元が一番詳しいはずだと安直に現地の人々に聞くのが手っ取り早いと考えていたのだが、この異世界とやらはこの自分を受け付けたくないのか誰も話し掛けてくれないどころか、こちらが問いかけても返事すらしてくれない。いろんな商人の前を通つたにも関わらず見向きされないうちで、自分がそんなに無一文に見えるのだろうかと考えつつ路地を進む。

何がともあれ、自分で確認したり、返事もなかったもので仕方もなく人から盗み聞きをしたりして手に入れた情報によると、今いるこの場所はオツセラの街の中の西側の地区のように住民が多い地区らしい。そして、オツセラの街は北、西、南西、南からの4つの街道がこの地点で交わつており、交通の要衝として機能している。

また、オツセラは街道が交差する街だけではなく、街の東側に一目ではどのくらいか

は大きいか分からないほどの湖を有しており、市場には大量の肉や野菜果物、魚類までもが簡単に揃うまでに漁業も盛んである。このように地理的にも恵まれた立地であることから普段から非常に活気に満ちあふれていて、オッセラの街には商人はもちろんのこといわゆる冒険者の類いの人等も多く訪れる商業都市の様相を呈している。

「現地の人々の会話からは普通に日本語が聞こえてきたけど、これは言語に補正がかかっているっていうあるあるだな。出回っている通貨も円とかドルとかじゃなく金貨・銀貨だったし。他にも馴染みのない食べ物もあつたなあ。ただ一つだけこの世界で不可解な部分があるとしたら何故誰も自分に気づかない振りをするんだろう？ 見えてないわけない……し。ここの人達、なりふり構わずぶつかってこようとすると、この世界のシステムなどよく分からないがまあ、実際にぶつかるともなかつたし良かったけど」

この探索では色々と情報を収穫することができたが、街や世界の様子以外にも知れたこともある。まず、転生後にまた一から語学の勉強をしたくないと思っていた深生にとって今いるこの世界が日本語対応であつたことは僥倖なことであつた。その上、穀物や野菜の中には知っているものも多く、深生に深く安心感を与えることだった。

「街の様子はどんなもんかある程度分かつた。となると次は街の外がどうなっているか知りたいけど、人々の会話を聞くと危険な感じだという。さてどうしたものか」

しばらくどうしようかと迷いこんでいたが、まあ聞くつちやないでしょ、とばかりに通り過ぎる人々に声を掛けることにする。しかし、大概予想は裏切られることなく、やはり一向に返事が帰ってくることはなかった。ここまできるとどうやってコミュニケーションを取ればいいんだと、この不可解な現象に対して事の重大さを認識して心が折れてしまいそうになる。

それからというのも途方に暮れることとなり、街の一角にてこれからどうしたものかと無駄に動き回ることとで余計に心身ともに疲れ切ってしまうこと3時間ぐらい経って空も赤黒くなっていく。

そろそろ夜に入ろうかという時、深生に急激な悪寒が襲い始めるとともに何かよくなることが起こるといふ野生の勘が働く。一瞬この世界には危険予知も存在するのかあと感心しながらも、その迫りゆく危機から逃れなければならぬと深生は立ち上がるうとはした。しかし、ただでさえ長時間にわたって物思いにふけ座り込んでいて足がしびれて動くのがつらい。その上、ついさっきまで暗くなってきたというのに相変わらず自身の存在が認知されていないという状況に対して解決方法すら分からず、どうしようかと自暴自棄になり憔悴してしまつた深生はその場から動くことができない。それでも人間の本能に従い必死にもがくようにその場から離れようとして数メートル進んだが、影に飲み込まれる。

「お兄ちゃん、どうかしたの？ 確か深生という名前だったっけなあ？ ん……？」
「生きてる………？ えっ……。どうして……」

（野生の勘のおかげで敵の存在は分かっても対処のしようがなく化け物にやられたんじゃない……）

この時深生は既に混乱していた。誰かの声が聞こえるのは……、誰かの気配を感じるのは……、もしかして誰か近くにいるのかと考え抜いてやっとなり返ることで、初めて自分は死んでなんかいない、むしろまだ生きているんだと実感する。

「ねえ聞いてる？ お兄ちゃん、もしかして腰を抜かしている？ それに大分おびえているように見えるけど」

誰かの声にあるように実際に深生は腰を抜かしていたがそれも無理はない。なにしろ、この世界に来てからというものの何十回話しかけてみてもコミュニケーションが一向に取れず、あきらめ気味だった深生にとってこれが初めての会話だったのだから。この世界に来てからはじめのうちは人々と自分も会話できたらなど期待をしてはいたが、いきなり未知の生物に食べられたと思ひ込んでこれでもかと怯えていた直後に急に話し掛けられたのなら淡い期待も吹き飛ばすほどにびつくりしてフリーズしてしまう。

「ねえってば、おーい、話聞いてますか……？ こりやしばらく駄目だなあ。まず正気に戻ってよお、ねーえー」

（生き残ったのはよかったけど、これからどうしようか？　そもそもお兄ちゃんって自分のことを言っているのか？）

ずつと悩みこみつつも落ち着いてきた深生は体を前後に激しく揺れ動かされてはつきりと意識を取り戻した。そしてその意識を自分に話しかけて体を揺れ動かした人に向ける。見た感じ身長は自分と同じぐらいで、流れるような青髪のロングヘア、青い瞳に見慣れない青い衣装を着た女性のようなようである。非常にかわいらしい雰囲気醸し出しており容姿も良く、服から髪まで全体的に青色で強調されている。

しかし、お兄ちゃんとか言っていたし、初対面なのに自分の名前を知っているのはなんでなのだろうか？　当然にして深生は疑問を抱く。

「あの、本当に貴方はなんなのですか？　自分、ここに数時間居ましたが今まで話し掛けてきた人はいなかったの……、この街でコミュニケーションをとれたのは初めてなんです。貴方は一体……」

「やつと私を見て話してくれてことは嬉しいけど、とりあえず質問はストップ、ストップ。答えられる範囲内で答えるけどそれでいいね。まず、私についてだけど今は名前は明かせないの。そういう決まりがあるから。次に今まで街の人と交流できなかったことで、まあ当たり前って言っちゃ当たり前だね。まだこの世界での深生の存在は仮みいたいなもんだから。他には質問ある？　あついけない。探すのに手間取ってし

まっつて残り時間が無いみたいだから質問は一つ、二つぐらいが限度かも」

深生は自分の存在が仮となっていて理由や何故この女性とだけ会話ができるのかといった女性の返答によって新たに生まれた疑問や先程からずつと考えても解決できずにいた自分とこの女性との関係性について等色々と聞きたいことが山積みではあつたが、自分の存在を認識することができるこの女性ならこの世界の内部事情まで知っていると予想する。そして、深生は不安を織り交ぜつつも願いを胸に秘めつつ一か八か貴重な質問権を行使してまで聞いてみる。

「じゃあ、今いるこの世界はいつも通り夢なんですか？ それともひよつとして異世界とかだつたりしますか？ あといつになつたらこの世界の人々と会話できるようになるのですか？」

「うーん、質問が多いね。何が何だかつていう感じだし、まあ仕方ないか。残念だけど今のところは異世界ではなくて夢の中にいることには間違いない。まだ転生については兄ちゃんの希望的観測にすぎないね。夢だから時期が来たら会話だつてできるようになる。それらは私が保証をもつて断言する。なんなら深生があと数分で目が覚めるつていうことも断言できるよ」

深生の儂い希望はぬかよるこびとして終わる一方で、今いる世界が夢の中だということとは夢が覚め次第ではあるが深生が現実に戻られることを指し示していた。

(これから人を前にしながらもコミュニケーションが取れないみたいな地獄を味わいたくはないから良かった。この問題さえなければ転生はしてみたいよなあ)

深生自身としても転生先にてまるで透明人間や幽霊みたいな見えないもの扱いをされるのは、人間の尊厳において耐えられなさそうだったので今回が普通に夢だったことに一つ胸をなでおろす。この時深生の心の中に転生したい以外にも人間らしく生きていとの希望が芽生えた。

「夢でもまた会うことはできる?」

明らかにこの状況でいう言葉ではなかったはずだが、その女性はそんなことに気付くこともなく冷静に考えてから話す。

「……会えるよ。絶対に顔を見なきゃいけないぐらいに。いつかは分からないけど」

「今のところはね……。これは転生前の体験版みたいなものだし……」

最後あの女性が何か呟いていたのだが、この一連の出来事が異世界物語ではなく、単なる夢だと断言されても夢の中なのにまた会えるか、とか言ってしまうほど理解が追いつかない上に一人で勝手にひどく落胆した深生の耳にはもちろん届かない。

(ああ、転生できたもんだとばかり思っていたのに……)

空想に誘（いざな）われ、現実を見た

「くっそ、寝付けねえ。こんな時間だつていうのに」

少しだけなら大丈夫だと思つていたのに夕刻のあんな中途半端な時間について長いこと寝てしまったがために深生は今絶賛夜更かしコース中である。寝たせいでおなかも減らず晚ご飯も米とメインのおかずしか食べきれなかった。惜しいことをした気もする。

ただいまの時間はとつくてつペンをまたいで深夜2時。寝よう寝ようと努めてはいるが全然寝付けない深生はベッドに転がりながらスマホ画面をスクロールする。

（……うおつ。いつの間にか寝落ちしかけたな。寝落ちするにもスマホだけは充電しておかないと）

夜更かしすることどのぐらい時間が経つたのだろうか、一瞬眠つてしまつて意識が飛びかけてしまった。いい時間だしそろそろ眠る頃合いだがその前に予定を確認する。寝坊をして小学校の時に楽しみにしていた学校行事に遅刻して参加できなかった日以降、深生にとって予定確認はほぼ日課みたいになっている。あとになって考えると小学校のくせに明らかに厳しくないかとも思つたりもする。

(明日は柴田の家に遊びに行く、そして今日の態度について謝る。冷静になれば人間素直になれるものだよな)

寝落ち寸前で耐えていた深生であつたが、寝る前にトイレに行こうとして深生は遂に意識を失い眠りについた。

「うう、眩しつ。つてまたここかよ。はああく、どうもこの夢に好かれてるようだ。あんな思いなんぞ何度も体験したくないしよ、早く夢から目が覚めないかな」

明るい光に目をつつかれるようにして目を覚ましてみると眼下にはある街と湖が見えた。草木で一部が見えないが、街の形状、湖の大きさ、主要な街道とその位置を精査するにどうやら夕方に見た夢での世界と同一らしい。おそらくオツセラ郊外にある見渡せるぐらい高い山か丘にいるのだろう。ここには万能アイテムのスマホはなく、面倒ごとに巻き込まれる前に夢から抜け出す手がかりを得なければならぬ。街に向かうとして不意にこの丘がどのくらい高いのだろうかと今にも崩れそうな崖に近づくと近づいたことにより草や岩など視界を遮るものがなくなると絵画のような光景が目の前に現れる。

「綺麗だ」

変な夢にさいなまれたとしても圧倒的に美しい景色の前にしてつい自然に言葉がこぼれる。忙しい毎日に追われてこんなに綺麗な朝日は最近全く見ていなかった。大都市に住んでいると見ることもないだろう。はるかなる湖も太陽の光が湖面を鮮やかに染めている。

ひとまず朝日に心を癒された深生はこれからの目標を夕方の夢で唯一会話ができたあの女性に会うことにする。自分一人の力には限度があるし、夕方の夢のように歩き回るのは面倒くさい。なんなら純粹にこの夢を楽しむ間にでも会えたら理想的だ。

写真として残しておきたいほどの見惚れる光景とはおさらばして深生は街へと下る。どう見てもオッセラは重要な都市なはずなのだが何故か狭そうな簡易的な詰所がポツンとあり、その中から老いた兵士が死にかけの魚のようにだらつと通行人を見ているだけで検問すら行われないうのは前回に知っていたので、堂々と街の中に入る。詰所をチラツと見たら朝だということに見張り役の兵士はまだ寝ている。

オッセラの街中は市民の大半が寝ている時間である夜が明けてしばらくは商品の仕入れや店の開店準備をする地元の露店や商店の人々がちらほらと外で働いている。朝を迎えて日が昇るにつれて少しずつ市民の姿が目立ち始め、日が完全に昇ったころにはいつも通りの賑わいを見せるのだ。

人ごみの中をうんざりしながらも深生は進む。涼しいという理由で朝から観光しよ

うとしたが、通りにいる人の数に後悔することになった。オツセラではどうも朝ご飯を家で食べる人と外で買って食べる人に分かれているらしく、その割合は五分五分。となれば、たくさん市民が朝ごはんを求めて屋台や露店、料理屋に集まっている。中でも人気の屋台となるとたくさんの人が並んでいるが目にも止まらない速さで一糸乱れることなく行列をさばっている。ここら辺じや見慣れない顔だとうちの屋台にいらつしやいと誘い込まれそうになる。実に商魂たくましく人のことをよく見ているようだ。(どういふ根回しなんだ？　今回は姿が見えているらしい、実に不思議な)

オツセラの中でも露店がひしめき合っている通りを深生は進む。ただ先程から夕方
の夢とはまるで違つて歩いているだけで「買わないかい、かっこいいしマケてあげるよ」
とか「そののにいちちゃん、一つどうだい」のように声を掛けられる。前回は散々無視し
たくせに、と卑屈気味になりながら深生はそんなの知つたことかと構わずに探索を続け
る。

教会のようにステンドグラスがあしらわれたどこか懐かしい古びた建物、オツセラの
中心部にあるやけにこだわられた大きな噴水、オツセラの街全体が360度見渡せる高
いだけの塔。夕方の夢と合わせて有名どころを一通り見て回つた。前回の時点でオツ
セラの地図を把握していたので道に迷うことなく観光もすぐ終わつてしまう。昼まで
には現実に戻るヒントを持っていそうなあの女性とどこかで会えるかと予想していた

のだが、まったくそれらしい姿は見つけられなかった。

（うう、夢の中でも腹は減るのか……。おかしい、夕方の夢では何時間歩いても空腹感なんぞなかったはずだが。妙にリアルなのは目覚めた時に落ち込み具合が大きくなるから嫌なんだよ）

どうも普通に暮らしている時のようにお昼頃に差し掛かるとお腹が空いてくる。この夢の中で目覚めた以降、朝から何にも食べていないどころか飲み物すら取っていないかつたなど深生は思い返す。

近くの店で済まそうと周りを見渡すと所々に飲食店を見つけたことができた。その中で一番大きそうな店に行くことにする。店先にあつた看板を見るにこの店はヤンセン食堂というらしい。深生は食べられればどこでも良かったので迷うことなく店内に入る。この街ではどの飲食店でも朝方の方が混んでいるようで、このお店も昼時では7、8割ほどは埋まっていたが朝に見かけた光景とは違い、決して満席ではなかった。「いらつしやいませ。ご注文はお決まりでしょうか」

席に着いて間もなく店員さんが注文を取りに来たので時間をかけることもなく適当に日替わりランチを頼む。たくさんのメニュー札の中で日替わりランチセットは赤く大きめの文字で書かれているしこの店のオススメなのだろう。嫌いな食べ物もそうないし大丈夫だろう。

料理が来るまで手持無沙汰なので店の中の観察でもしてみる。店内は白を基調にしていても清潔感がある。しかも、料理屋つてことは油汚れや煙などによって白い壁が黄ばんだりして汚れるはずなのにこの店の壁はペンキを塗った直後から時間が止まったかのように白く輝いている。

今度は店員の方を見るとどうやらホールは2人で回しているようだ。果たして人数は足りているのか、と思わざるを得ないほどに広い店舗で2人とはよほどホールの店員が凄腕なのだろう。そうでなければ朝よりはお客さんは少ない昼時でもこう上手くはいかないだろう。

「どうぞ、日替わりランチですね」

（おっ、米じゃないか。米だい、米だ。この夢の中においても米が食べれるとか幸せじゃないか。夢だから俺の思い通りに米が出てきたのかもしれないが、そうであつても白米は最高だよな〜）

この夢の世界ではお米が主食であるようで、ライスを目の前にして深生は喜びを抑えきれずにいた。そのまま頂いても美味く、かつどのおかずを持つてきても何にでも合うお米は深生の好物の一つであり、日本人ならお米嫌いの奴はいないよな、とは深生の持論である。

大分おなかが空いていたようであつという間に平らげてしまった。食欲が満たされ

たので次にこれから如何にして前の夢で会ったあの青の女性を探し出すか考えてみたものも、スマホのような連絡手段もないのにその中で見つけるのは至難の業、もはや運に頼るしかなさそう。第一にその女性がこの街にいるかどうかも未だに不透明なのだ。

何か探し出さない案がないものかと目線だけで周りを見回すと、店の一角でお客さんが金のコインでお会計している場面を目にした。

（……嘘だろ。この世界は俺の夢の中での架空の世界のはずなのにお金という概念があるって。自分の夢にもお金の概念とか取り入れるとか俺はどれだけ律儀なんだよ。しかし、お金なんて持つていないんだよなあ……。いや待てよ、自分の夢なら俺の意向も反映されるからズボンのポケットにでも入っていたりして——、なんでコインの1枚もないんだよ、おかしい。自他とも認めるめんどくさがり屋なのに複雑なシステムになっているような夢が本当に俺の夢なのか？）

人々がお金を使って買い物しているところを一回も見なかったため、深生はお金が存在していないものだと思いついてしまったのだ。慌てて現状打破の方法を見つけ出そうとしたが、この問題は簡単に解決しそうにない。

あわよくばとお金がポケットに入っていることを期待するも、ポケットには何も入ってはいなかった。このままお金がない状況では日替わりランチのお代が払えない。と

いってお金にかわるものも何も持ち合わせてもない。服やズボンなら着ている分があるが、脱いだら裸になってしまいう論外だ。どういうわけか自分自身が見ている夢であるにも関わらず自分に不利な条件しか揃ってくれないようだ。

(どうにもならないよなあ。謝り倒した上でランチの代金分ここで働かせてもらって見逃してもらうしか……。しかし、今回も後味の悪い夢だな)

客とお店間の信頼を壊すことになる無銭飲食は恐らくこの夢の中でも犯罪に当たるだろう。深生は前払いの食券制ならこんな単純なミスなど起こらなかつたのにも思いつつ、覚悟を決めようとした時、視界に探していたあの青髪、青い眼、青い服の女性が目に入る。

「やつと見つけたよお。兄ちゃん一体どこを歩きふらついていたの。探しても全然見つからないし、勘も当たらないし大変だったんだよ」

「自分がずっと探していた青が映えまくっているこの前のお姉さんじゃないですか。グッドタイミング。ちよつとお願ひ事があるのですが聞いてくれますか？」

自分のことを兄ちゃん呼びしたのは今までの人生において、夕方の夢で初めて会ったあの青の女性しかない。ならばこの女性が夕方の夢で会った張本人であることには間違いない。もう少し彼女の登場が遅ければ、腹をくくって自分がお金を持っていないことをお店側に告白していたところだった。

「そりゃ私の信念的に駆けつけないかね。で兄ちゃん、お願いって何？」

「手持ちの金がないんだ。一時的にですが貸してくれたらいいですかね？」

もしも、この青の女性にここで断れられたとしたら、やっぱりお店側に正直に話すしかない。そうなれば夢から目覚めた後も立ち直れる自信がどうにもない。どうか神様よ、後味が悪い展開にならないように賜ってくれえ。

「いいよ。じゃあ代わりに払ってくるから外で待ってて。私も兄ちゃんに話があるから」

深生にとつて願つてもみなかつた申し出ではあつたが、いくらなんでもこの青の女性には自分のこと信頼しすぎしている気もしてならない。どうやったら一回しか会つていない人に対してそこまで気前よく行動できるのか教えて欲しいくらいだ。そこまでするのは夢以外に現実世界でも会つたことがあつたのかなあ、と深生は思い出そうとする。そんな記憶はない。となると青の女性が自分に優しくしてくれる理由は単にお人好し以外考えられない。

「おごつてくれたのは有難いですが、自分をどこに連れていくつもりなんですかね。話ならここで聞きますよ。それよりもこの夢の覚まし方を教えてほしい。自分にはこの夢の中にいる理由がないんだよ。ホントに」

自分の代わりにお支払いを済ませてもらった挙句、私のおごりでいいよと言われご馳

走になった深生だったが、現実世界に帰りたくてもなかなか帰ることができないことに對する苛立ちや不安からつい声を荒らげてしまう。

今回は夕方の夢の時とは違って、彼の存在がこの世界にとつて仮なものではなく現実になりつつあるのだが、そんなことを知らない深生はいつ現地の人々から無視されるかと内心を揉んでおり、帰れるものなら速攻帰りたいたいと思っている。彼の言葉通りが示すように深生が夢の世界にいる理由は特にはないはずだ。

「夢世界での体験はもういいの？ それなら実行しようかな。じゃあ目的地変更するからこつちね」

「おいおいマジでどこに連れてくんだ!？」

深生の言葉を受けてその女性は方向変換をすると深生の手を引つ張りながら走り出す。2人とも子供なのならば、活発に遊んでいるかのように微笑ましく見えるものだろうが、実際は大人間近の2人である。街の人に奇妙な目で見られるが、その中を走り抜けていく。

「ここで何をするんだよ？ おい、勝手に他人の家に入るとか不法侵入だぞ」

「いいからいいから。兄ちゃんあと少しだけ付いてきて」

こうして色々ありつつも青の女性に連れ回されて、目的地と思わしき場所に着いた

が、そこはこの世界では一般的な変哲もない普通の家だった。青の女性はカギを使わずに扉を開けると深生を招き入れる。不信心もあつたが、ためらいもなく堂々と家の中を進んでいくので深生はあとを追つておじやますると隅の一角に案内された。

「立つてないで座りなよ。兄ちゃんも連れてきたし、これで準備は終わったあ。よし始めていくよ。眩しいだろうから目をつぶつておいた方がいいよ」

青の女性はそう言うのと部屋の机の上にあつた道具を手にして座っている深生の正面に同じく座つて、二人の間におもむろに置いていく。

「だからさ、自分これからの詳細も何をやるのかも全く聞いていないですけど。何をやられるおつもりで……」

このようなパターンにおいて、これから起こらうとすることにろくなことがないのは考えるまでもない。現に今感じているこの嫌な予感が深生の脳に危険信号を送る。そもそも夕方の夢の時もそうだったが、青の女性は今回も絶対に詳細を含め重要なことを隠しているに決まっている。

「詳細は後でいくらでも教えるから3, 2, 1で始めるよ。さあ、心の準備はいいよね。ちやんと目をつぶつて、じゃあ3, 2, 1——」

急に心の準備はいいよねと言われて心の準備ができる人なんているわけがないのに、深生に有無も言わせる時間を与えずに青の女性が何かを始めると、白い光が急激に視界

を覆う。深生は青の女性が何をするのかこの目で見てみようとも一瞬考えていたのだが、前触れもなく現れたその光に深生は思わず目をつぶってしまった。

そして、再び目を開けると深生は相変わらず屋内にいた。さつきまでいた部屋によく似ているが家具の配置も微妙に異なっているようだ。だが、一番明白に違う点はあの青の女性がいない代わりに小さい女の子が隣にいるということだ。

「ようこそここにの世界へ。兄ちゃん、ぐすう、会いたかったよお〜」

ふとその女の子と目が合ったかと思うと、間もなく彼女は第一声としてこう語りかけてきたのだった。

夢かうつつか

「ようこそこちらの世界へ。兄ちゃん、ぐすう、会いたかったよお」

自分のことを見るや否や速攻で目の前の少女はわーんと盛大に泣き始め、深生の体にしがみついてくる。急に泣きじやくる少女を前にして深生はどうすることもできなかつた。もし下手に動いて警察にでも通報でもされたら面倒くさいことこの上ないし、むしろ面倒を通り越して迷惑である。ただ、黒髪に青い瞳を含めたその容姿にときめいてしまったことは秘密だ。

「お嬢ちゃん、その泣いている青い瞳の嬢ちゃん。うん、そうそう。とりあえず離れてくれない？ あとこの状況の説明を頼むわ」

これ以上ないぐらいに脳をフル回転させこの状況を打破する手立てを打ちたいのだが、なかなかうまくいこと案が出てこない。時間をかけすぎてもバツが悪いので自分の手を汚さないように保身に走る。素っ気なく突き放す感じで言ったのでお前なことなんぞ眼中にないんだってことが少女にも伝わるだろう。

「なんでなの？ 説明するのはいいけど兄ちゃんと離れるのはイヤ。離れる理由もないでしょ。私一緒にいるもん」

泣き止んでほっとしたら今度はぐずり始めてくる。確かにルックスにはそれなりに自信があるけど少女、どちらといえば幼女みたいのに好かれる顔なのだろうか。まあ所詮自分の容姿とやらが好みのタイプに似ているのだろう。しかし、少女が身体中にまとわりつくようにくつつかれてるので暑いし内心苦しい。知り合いのお兄さんでもない人に迷いなく抱き着くとは少女のこれからが心配になる。

離れる、離れないと押し問答をしている間でさえも少女はずっと両手で抱きしめて離さないのですすがにそろそろ呼吸が苦しくなる。手は出したくはなかったがやむを得ない。無理にでも少女を引きはがそうとするが力がうまく入らない。それでも腕の中から逃れようともがく中でふと自分の目線の高さが少女の目の位置と一緒だと気づく。

少女は見た感じ100cm前後ぐらいのはずだ。ならば、普通の高校生と少女が並んでみたところで同じほどの身長である訳ない。どういうこったとこの部屋にある立て鏡で自分の姿を確認する。

「……嘘だろ、おい。どうして？ ついさつきまで高校生の体だったのに、小っちゃくなってるよこれ、おい……」

肉体の変化にはただただ絶句するしかない。自分の体をこれでもかというほど隅から隅まで触ったところでやっぱりひ弱な少年の体つきにあることには変わらない。縮んだんか、縮んでしまったんかと自分の体について問いかけてしまった。

「兄ちゃん。転生したんだから小さくなっているって当然だよ。転生先はこちらの世界の幼い少年だから。これから宜しくね！」

好きなものを目の前にしてはしゃいでいるかのようになりノリノリな少女を前にして深生は誰よりもあれほど強く憧れていた転生を果たしたのにも関わらず起こった現実には茫然とするしかない。

それに加えて、訪れた現実に驚愕しているうちに自分から離れたらしい少女が先生に褒められて返事をするかの如く、自分が「転生」してきた事実を伝えてきた。「何っ、転生だと言ったか」、「己、どういう意図を持って転生したと言ってきたのだ」、「君、見た目はあれだけど精神は高校生である自分を転生という言葉で騙せると思ったのかね」

このように深生は様々な人物になりきって状況を分析してみたが、少女が放った「転生」という言葉を信じることができずにいる。現実として起こって欲しいと願ってことなのに「転生した」という言葉を素直に受け取って喜べないのは、転生を願っているも頭のどこかで100%有り得ないとあきらめていた故なのか、はたまた高校生の思春期により起こる拒絶反応からなのだろうか。

「兄ちゃんであってしても転生になると信じられないようだね。まずは私の紹介から。名前はカノン・ベディ・エピローヴです。長いからカノンって呼んで。この世界では精霊の部類に入ります。兄ちゃんがなかなか私の名前呼んでくれないなあと思っていた

けどまさか教え忘れていたとはね。ということでは私の名前呼んでみて」

「カノン。ん、もう一回名前を呼んでほしいって？ カノン。これでいいよな。なんですぐ嬉しそうな顔をしてるんだ？　ところでカノンは精霊なのかよ。それが本当ならマジで転生したのかもしれないが。……信じるには時期尚早なんだよな」

この少女はカノンというらしい。苗字の方は「エピローグ」だとすると、結末のカノンっていう意か。フツ、なかなか趣のある名前ではないか。また、自身の名前を伝えられるとは何とも微笑ましい。

また、名前のことは以外にも発見があつた。転生先の世界に精霊が存在している可能性があるということだ。信用に値するかどうかは別にしても、カノン本人がぶつちやけ嘘をついていることもありえなくはない。ただ、カノンは精霊だつて名乗っていることからこの世界にもし精霊がいるのならばここは日本ではなく異世界なのかもしれない。とにかく、夕方に見た夢みたく今回も実は夢でしたつてオチがないのならひとまずはそれでいい。

「信じるか信じないかは兄ちゃん次第つてところだけど、結局信じるしかないと思うよ。だつて、私本当に精霊だもん」

「……そこまで言うぐらいなら今の所は信じてみてもいいとは思っているが。カノン、転生したつてことはさ、よくある話みたいなどこかの勇者の召喚のように、自分の転生

理由として例えば世界を救うとかの使命でもあるのか？」

「うん、もちろん。兄ちゃん和使命はね、ずばり、これから私と一緒に過ごすことだよ。私もサポートするし、改めてよろしくねっ」

「……はっ」

自分が転生した理由が目の前にいる少女と過ごすことだと聞いて、深生は呆気にとられる。カノンは順調に育てば息をのむほどに美しくなりそうなのは誰が見ても一目瞭然なのだが、まだまだ幼い子供であるカノンに対して深生はあまり興味がなかったため、一緒に過ごすことに気が乗らない。実際、深生の精神年齢は高校生なのだから深生にとってカノンは圧倒的に年下である子供の世話をするように感じてしまう。深生は子供には興味はないのだ。

「俺の役割って一緒にいるって……ことでもいいのか？　つまりカノンを守るってことか……」

幼女のおもりだっと思ってしまおうとつらいものがあるが、サポートもあるらしいし色々経験を積む時間だっと思って考えみると、カノンと一緒に過ごすだけで済むのなら、むしろこんなにも楽な使命はない。何もない状態で放り出されるよりかはよっぽど条件はいい。

（冒険もしてみたいがまずは力を付けることを目標にしよう。転生できたのにすぐ死ん

でしまつては面白くないし)

深生の考えでは異世界つていつたら冒険だと思つてゐるが、冒険を試みたところでどうせこの小さな体ではすぐ疲れるだろうし、何しろ冒険には向かない。それならば一緒に過ごすだけならその使命を果たすのも悪くはない。格闘術などの護衛に関する知識はないが、覚えておけば将来冒険に出た時に役に立つに決まつてゐる。

「おつ、兄ちゃん、名目上は私の護衛にするそのアイデアとてもいいじゃん。兄ちゃんを引き留める理由を特に考えていなかつたし、そういうことにしておこつと」

「精霊の護衛とかよく分からないのだが、まず何をすればいいんだ」

「護衛は名目上でいいつて。基本的には一緒に居てくれればね」

言葉通りのまま護衛の任務は名目上のことらしい。しかし、どうせカノンが誘拐とかでもされたら一緒に居る条件を満たせなくなる。そうならないようにも自分の役割として護衛も兼ねなければならぬのだが。

「早速だけど簡単なテストでもします。転生前の記憶がちゃんと残つてゐるか確かめたいんだ。特に何事もなく成功したから記憶はそのまま移行されてゐるはずだけど念のためね」

カノンは繋いでいた手を離しておもむろに立ち上がったと思うと手を叩き話始める。手を叩くのはよくある注目のさせ方であるので、深生はカノンに視線を向けつつ少しず

つかノンとの距離を開けていく。現在、カノンと身体が同じぐらいで抱き着かれると抵抗しづらいので出来るだけ距離の間隔を広げておけば、次にまた抱き着かれても対処の仕様が生まれる。

「急に手を離してくれたのはこういうことか。そんなことしなくても転生時に忘れた記憶などないぞ。確かめる必要がないと思うが」

「忘れた記憶がもしあつてとしたらその忘れた記憶があつたこと自体も忘れているでしょ。だからテストをするの。まず兄ちゃんの名前は？ これは覚えているよね」

「……どうしても付き合わなきゃいけないのか。俺は鏑木深生。深生が名前で鏑木が姓だ。これでいいか」

言われてみれば、忘れたことを忘れてしまっていたら覚えていないのは当たり前であり、何もカノンは間違っていないなかったので、渋々ではあるものも現代日本での名前を教える。

「まさか名前の確認だけで終わるわけないでしょ。こっちの世界では名前が変わっているから間違えないようにね。次の質問は兄ちゃんが最後の晩餐で食べた食べ物は何でしょう？」

「単に向こうでの最後の食事ってだけなんだから最後の晩餐とか言うなよ。まあいいや、答えはとんかつだ。からしに塩に、そして味噌。色々と付けながら食べるのが美味

しいんだ。今になってみれば昨日の食事がとんかつでよかったなあ」

名前を答えさせるにとどまらずカノンは次の質問をしてきたのですらすらと述べていく。ただ、最後の晚餐って言い方は気にかかる。深生自身、元居た世界の記憶もすっかりと残っているのです。現代日本での最後の食事は昨日の食事のように思える。あまりお腹が空いていなくても、飯とおかずだけでも食べたことに満足する日があるとは、人生何があるかは分からないものだ。

「違うよ兄ちゃん。本当の答えはヤンセン食堂の日替わりランチでしょ。お金も持っていなかったのに食べていたじゃん」

「あの日替わりランチも転生前の食事として入れるのかよ!? 夢の中だったからお金もかからないかなあと思ってたんだよ。そもそも夢なのに融通が利かないってなんだ。まあ、確かにあのランチも美味しかったけど、あれはあくまで夢の中での出来事だったしノーカンだろ」

深生はあの時食べた日替わりランチは味とかもはつきりと覚えてはいたが、実体が伴ってもない夢の中での食事を最後の晚餐として認める気はない。夢の中での出来事はあくまで幻に過ぎず、うつつに起こったものではないのは事実だ。

「ああ言わなきゃいけないつけ。兄ちゃん、さっきまでの出来事は夢なんかじゃないよ。あれは環境の変化に困惑しないように、兄ちゃんが転生する前にこの世界がどんな感じ

なのかを体験させてただけだもん。向こうの世界でのVRみたいなものに似ているのかな。兄ちゃんの最後の食事はヤンセン食堂の日替わりランチです」

一方で、カノンはどうしても俺の最後の晚餐を夢の中で食べたヤンセン食堂の日替わりランチにしたいのか頑なに押し通そうとしてくる。

「……いやいや夢でしょ。最後の晚餐なのなら流石に夢の中での食事まで含めちゃ駄目でしょ」

「うーん、1回目に出会った時の最後の方に伝えたと思うんだけどなあ。確か、ゲームの体験みたいなのもつて言ったはず。でも兄ちゃんが聞こえていなかったら伝わってはいないよね。この話は後でもう一度言うことにして、別の質問ね」

カノンが彼女自身が精霊だと言った時と同じほどまでに、深生はあの夢が実は転生前でのお試し体験だということを信じられないでいる。何しろあの夢のクオリティーは日本にある高度なVRでもあれほどには再現できないぐらいに物凄く精密だったはずだ。また、もし体験していたと仮定するならば、意識のみだけではなく身体までも転移させるシステムがどういうカラクリで成立しているのかは気になりつつあるが、後で教えてくれるとのことなので今はカノンの話を遮らずに進めさせる。

「転生前の人生において一番心に残っている思い出の名場面は？」

「思い出の名馬か？ 色々と候補は有るけど一番といたら、うん断然でタケシバオー

だ。距離、芝ダートのコース、馬場状態、どんな条件でもほとんどの出走で1着や2着だとか、あれほどオールラウンダーというに相応しい馬はいない。その上で斤量とかのハンデがあってももろともせず勝つぐらいに強いものだからこれこそ名馬だ。もはや別格の存在よ」

「名場面」を「名馬」だと勘違いしている深生はタケシバオーの名前を挙げる。タケシバオーとは1960年後半に中央競馬で活躍した馬であり、1969年には春の天皇賞を制し、同年の年度代表馬に選ばれている。もちろんタケシバオーの現役時代には深生は生まれてすらいなかったが、タケシバオーが走る映像を見た時にその桁違いな強さに心底から惚れたのである。

「名馬じゃなくて名場面！ 兄ちゃん私の話もしっかり聞いてよ」

深生の勘違いに対してカノンが拗ねそうになり、深生は慌てて謝ったが、謝られてすつきりしたのかカノンが気にしてない素振りを見せたのでじつくりと思いい出を振り返っていく。

「ごめんよ。……でも思いい出の名場面ねえ。16年ちよいしか生きていなかったし、名場面になるような思いい出なんてないんだけど」

「ねえ何かないの？ 何でもいいからさ。ね」

「……そんなこと言われても。カノンだって思いい出の名場面なんてパツと浮かばないで

しよ」

「そんなことないもん。私の思い出の名場面は、今このように兄ちゃんと一緒に過ごしたり話したりしていることだから」

「……ああ、そうかい」

深生は名場面とかすぐに思い浮かばないだろうとカノンに同じ質問をすると、予想に反してすぐに回答してくる。しかも、初めまして状態の自分と過ごすのが名場面だとか言ってきたが、深生は今までの流れる的に自分に関係する答えだろうと見当を付けていたので驚きすらしない。確かに、カノンは自分のことが本当に好きなようで嬉しさのあまり泣いていた時以外は楽しそうにしているし、それに短い間でも笑顔を絶やしていなかった。

「……見る専門だけど野球ならあるよ。ドラゴンズを53年ぶりの日本一に導いた2007年の中日対日本ハムの日本シリーズ第5戦の山井―岩瀬の完全試合リレーもすごく感動したなあ。ワンプレーだけに限ると、2008年のセリーグCS（クライマックスシリーズ）第2ラウンドの1戦目での『なんていう井端』と言われるほどに華麗で冷静な守備も候補から外せないんだよ。結局その年は日本シリーズには進めなかったんだけどさ。うーん、カノンにとってこの話題は興味ないよな？」

カノンが名場面を教えてくれたので、自分だけ答ええない訳にはいかず野球の話をする

る。その時深生は野球好きが高じて、つい感傷に浸って話し込んでしまったが、どうやらカノンは興味なさげでこちらを見てくる。そもそもこちらの世界には野球自体がな
いだろうから、ここまで熱く語られても内容が分からずじまいではチンプンカンプンな
のだろう。

「この話は正直どうでもいいとは思っているけど、異世界の話自体には関心はあるんだ
よ。実際どんな感じなのか体験したままを直接聞きたいし」

「そうだなあ、さっき食べ物のお話が出てきたし、初めは向こうの食事についてならどう
だ。カノンだでも気にならないこともないだろう」

こうしてしばらくの時間、深生とカノンは食べ物についての話に花を咲かせた。

始まるエピローヴ劇場—どこまでも、これからも

深生という名前の私の兄ちゃんに対してこちらの世界での理や覚えておかないといけない常識を少しだけ上から目線で自慢げに一から教えてあげているこの美少女である私を皆さんは知っていらっしやるでしょうか？ ご存知でない方はこれを機に覚えてくださいね。答えはともかわいくて愛嬌のあるヒロイン候補のそうこの私、カノン・ベディ・エピローヴ、種族は枕の精霊です。ふっふ、以後お見知りおきを。

(ああ、自分でとてもかわいいか言っちゃうなんて、なんだかこっぴどくかしいものですね)

あれから多少時間が過ぎたのち、深生は気落ちしていた。転生先の身体も含めた自身の境遇もその理由の一つだ。

「聞いた感じだとこの世界は日本での生活とは勝手が違いすぎるんだろ。知識にしたってどれだけ覚え込まなきゃならないのさ。第一、設定が3歳児とかそもそも何なのさ。」

全然体が思い通りに動かねえ。これでは近いうちに怪我しそうなんだが」

深生は浮かび上がってきた現状に対して不満を色々と口にする。深生にとっては転生したことで急に体が小さくなった感覚なのだ。部屋の中を少し歩いてみるも歩き方がぎこちない。

「どこに住んでいようが新しい生活を起きる都度慣れていくしかないしょ。早いうちから慣れていった方がこの世界での当たり前やマナーが体に染み込むし、このお年頃なら言動がミスっても若さ故とかとして何とかごまかせるよ。仮に15歳ぐらいの大人ぐらいから始めたとして、日常的に異質な言動をしたせいで頭おかしいとか兄ちゃんも言われたくないでしょう?」

悪口を言われたくはないし、頭おかしいとか噂された日には見知らぬ世界への恐怖から人生初の引きこもりになりそうな気がする。向こうの世界では一度もそういうピンチはなかった。それなら高校受験ぐらい必死になってこの世界の教養を身につけた方が賢明な選択と言えるだろう。

「それにこの年代にしといた方が大人の時からと比べてより長く兄ちゃんと一緒に居られるもんね」

「おい、結局お前の勝手じゃねえか。だから俺はお前のお兄ちゃんじゃないって」

自分のために色々と考えた上で尽くしてくれたのだと感心していたが勘違いだった

ようだ。この少女のエゴだけで3歳児にされたとか……、単に俺被害者じゃん。しかし、お兄ちゃん呼びは慣れないどころか、そもそも兄弟ではないだろうよとツツコミをしたいたが効果が薄そうなのでしないでおく。

「いいえ！ 兄ちゃんは私の兄ちゃんです。私の、私による、兄ちゃんのための私、を至上命題にしてこの世界でも兄ちゃんをいつも支えるから不安にならずにいつでも頼ってね！」

案の定のことだったが、カノン兄ちゃん呼びをやめない。カノンさんはどこかの国の有名な演説になぞらえたようにいかにも当然だという感じでおっしゃられるが、口に出すまでもなく普通に怖い。そりゃあこの世界で楽ができるのならこの上ないことだが、今までの会話にあたりこの娘はいわゆるヤンデレ気質ではないかと推測する。この感じは間違っていないはずだ。そうであればカノンの扱いには気を付けようと誓う。面倒ごとはこの人生にもいらぬ。

「……ああ、そうかい。どうせ、なんて言っても兄ちゃんって呼ぶんだろ。じゃあ兄ちゃんって呼んでくれ。それと自分を支えてくれるっていうならまず、この世界の情報が欲しい。全く情報がないのでは今現在もこれから不便極まりないしな」

カノンがしつこいので兄ちゃん呼びを許可したが、兄ちゃんっていう呼称もいずれ慣れれば気に入ることもあるだろう。それよりもこの世界に対して圧倒的に知識不足で

あるため早急に情報が欲しい。情報を制する者が戦いを制しひいては世界を制すつてもんだ。それほどに情報とは価値が高いものでもあるのだ。かわいらしい少女でも精霊ならばこの世界についてある程度は詳しいに決まっている。

「言葉にして伝えてもいいけど、それだと理解できない部分も多くなるよね。じゃあ手っ取り早く契約しようよ。兄ちゃんこっち来て」

「は、ちよい待て、まず契約つてなんだよ?」

突拍子もなく契約しようと言われても何に對する契約なのかさっぱり分からない。わざわざ言うつてことはゲームのイベントみたいなものなんだろうか。しかし、カノンは無駄なことを長々と説明しやがったくせに契約のイベント的な話を一度も喋つてくれなかった。それなら省略しがいいのあるくだらない話よりも契約の方を詳しく説明しろつてものだ。急に話を持ち掛けてくるとかカノンは悪徳セールスよりもたちが悪いのではないか。誰が悪徳セールスなのか自分は見抜ける自信は割とある。

「説明してなかったっけ。私たちがみたいなの精霊族は精霊以外の普通の人間や魔人、獣人といったようなヒトと契約を結ぶことで結んだ者との間で互いの能力を共有したり高め合ったりできるんだよ。ただ、精霊も数としてはたくさん存在しているんだけど警戒心からなかなか契約を結ぼうとはしないんだよね。そもそも大半の人間は契約を結べるだけの資質を持ち合わせていないし、たとえ資質のある人間が精霊にアプローチして

も万が一に契約を受け付けてはくれないから」

聞いただけで想像すると精霊は数としては多そうだ。ただ、精霊という種族は気難しいのか契約しようとはしないらしい。そして、そもそも契約するには人間側にも条件があつて「資質」が必要とのこと。ということは資質が無ければ契約はできないよな……。

「自分には契約するための資質はあるのか？ ないのならないとは思うが」

気になることをカノンに聞いてみる。自分には資質をどのように計るのかは分からないが、精霊なら資質の有無ぐらい分かるものだと思う。

「資質がなかったらそんなことは言わないよ。期待させるだけさせてから出来ません、つていくらなんでもひどすぎるよ。兄ちゃんにはきちんと資質はあるからね」

資質があるつてはつきりしたことで、深生はほつと一安心した。まだ、気になることも多いので聞いてみることにする。

「さっきの話なんだけど魔人とか獣人とかつてホントに存在するのか。憧れを通り過ぎるほどファンタジーな世界だったんだな、ここは」

カノン情報だとこの世界には魔人や獣人もいるらしい。どんな感じの見た目なのかすごい気になる。どうせならこの精霊ではなく初めに魔人とか獣人に会いたかった。まあ人間と敵対していたら殺されたかもしれないがその時はその時だし、転生ものオタクとしては実際にこの目で見られるのなら死んでも悔いなどない。

「もう急に目を輝かせてしまつて仕方ないなあ。この世界には兄ちゃんが転生もので知つてゐるような種族ならそれなりにいるよ。ここからは遠いけどね。」

よし決めた。10歳とか15歳ぐらいになったら成人を迎えるだろうから魔人とか獣人の国に行こう。それぐらいの年になれば体力も増えるだろうし、魔法も使えるようになるだろう。異世界つていつたらいつでも冒険は付き物だ。

ただ、そうすると旅の前にカノンとは絶対に別れないといけない。遠いなら長い旅になるし自分のわがままによつてカノンにまで危険を及ぼせる気はない。これまでもこれからも関わつてしまつた以上、その人にまで迷惑をかけるのは流石に良心が痛む。

「話を契約に戻すよ。精霊の性格もあつて人間と契約している精霊は少ないんだけど、転生時にきちんと確認したから兄ちゃんはちゃんと資質も持ち合わせているし、私も兄ちゃんと契約する気まんまんだから契約には問題ない。実際契約して失うものはないし損はないよ。契約によつて発動する便利な機能もあるし」

「例えばどんな機能があるの？ 普通に便利なら考える余地はある」

楽しんで人生を過ごすなら珍しい能力は必要ですよ。契約できるだけの資質を持つてゐるとしても自分の心や魂などではなくやっぱりこの身体本体のおかげなのだろうか……。深生は少しだけ考えていたがパツと顔を上げると、答えが出なさそうな問題は気にせず生きていけばいいはずだと一人納得する。果たしてどんな機能があるのか。

「おつ、兄ちゃんもノッてきたね。まずはこの機能、知識の共有です。私の欲しい知識を好きだけコピーできます。知識の可視化ができるとかできないとか。もちろん、私も兄ちゃんの知識を得ることができるよ。手早く情報を得るには効果的だし、契約するのはこれが目的でもあるよ」

「なるほどね。契約した者同士なら知識の共有ができるから契約しようよ、つてことか」
契約することで知識を得られるのなら効率的だと感じる。知識の可視化とはいまいちピンと来ないが、これもまた便利なまでに理解しやすくなるように作用するのだろうか。

「そういうこと。兄ちゃん、次の便利な機能は記憶容量の拡大だね。人間の脳は記憶できる情報量に限界があるのは知っているよね。このままいくとこの世界で過ごすために必要な情報がどんどん増えてしまつて、今までいた日本での記憶は忘れてしまうかもだけど、契約することで記憶容量がアップします。これで大事な記憶も遠い思い出も覚えておけるよ」

「それはそんなにすごいのか？ 自分にはそんな大した知識も記憶もないぞ」
皆さん本当にその通りなんです。カノンは自分の知識についてやけに期待しているようだが、所詮、料理も家事もできない平凡な高校生の知識や記憶では役に立つものなんて一つもない。

現代日本と全く同じでない限りは、こっちの世界で生きていくなら心機一転を計って現代日本での記憶は忘れてリセットするのもありなのではとも思える。余計な記憶は判断に行動を誤らせる罠にかなりええない。

「兄ちゃんの知識に記憶はとも貴重だよ。この世界には魔法がある分明らかに技術は発達していないし劣っているから、兄ちゃんの居た向こうの世界の技術はこちらの人々にとつては驚くほどのものなんだよ」

クルウドは精霊とか魔人とかが当たり前にいる世界なら魔法も存在すると信じていたが、予想通りこの世界には魔法が存在している。それも技術を凌駕しつつあるほど魔法が一般的に使われているため、技術があまり発達していない。仮想体験の時にもオツセラの街の中で移動手段として馬をよく見かけたことをクルウドは思い出す。

「まだまだあるよ。次のものは記憶の鮮明化。鮮明化の方は文字通り一度でも見た記憶を脳の中で鮮明化してまるで今見ているかのように映像にして見ることが出来るっていう機能ね。この機能はここがポイント！一度でも見たつていうところがミソなんだよね。つまり、たとえ兄ちゃんが今忘れていたような記憶やチラッと目をやっただけの記憶でも鮮明化できるんだ。ただ、この機能の弱点として私たちの頭、脳に直接作用するから魔力の消費が他の機能に比べて果てしないこと、そして、脳の中で映像化されるから兄ちゃんと私しか見られないことだね。まあ後者の方は契約するのが私たちがな

んだから当然と言っちゃ当然だけどね」

一度見た記憶なら忘れたものでも復元するかのように見えることが出来るなんてことは現代日本での技術を集大成しても恐らくは無理だ。このような素晴らしい機能には美しいバラには棘があるように、代わりとして知識の共有化や記憶容量の拡大とは違ってデメリットも存在する。その一つが魔力の消費量に表れている。脳に負荷が掛かるようなので魔力が他の機能より必要になる点は致し方無いところだろう。

「ある意味記憶の使い方には気を付けないとならなそうだな」

深生はそう言うとう自分の記憶の事でしばらく悩みこむのだった。

契約とは突然に――まだまだ転生初日は終わらずに

私は精霊族のカノンです。転生がうまくいってせっかく直に会えたっていうのに誰かさんの態度が冷たいような……。美少女を目にしたことによる照れ隠しならいいのですが、ひよつとすると兄ちゃんは私のことを嫌っているのかもしれないです。特に兄ちゃんって呼ぶと俺はお前の兄ではないと少し怒気を帯びた顔つきで言うあたり怪しいです。しかし、もし兄ちゃんの不本意でないと、いやいや受け入れてもらわなないと私困ります、一緒に居たいので。というわけで少し早い気はしますが私、兄ちゃんと契約しようと思います。いえ断定しましょう、私カノンは絶対兄ちゃんと契約してみせます！

「兄ちゃんの知識に記憶はとても貴重だよ。この世界には魔法がある分明らかに技術は発達していないし劣っているから向こうの世界の技術はこちらの人々にとっては驚くほどのものだよ」

こう言われた深生は無言になって黙り込むと、自分が持つ情報の重大性を再確認する。

(それほどまでに魔法が人々の生活に与える影響が大きいんだな。確かに魔法で事足りるのなら技術は発展しない、のか。となると現代日本で技術にあふれて育った自分がふとした迂闊な行動を取ると変えてしまう可能性もあるってことか。恨みを買うのはごめんだから大人しく過ごすべきなのか)

転生者が異世界にて活動する場合たとえ普段から行動に気をつかっているもどこかで必ずボロが出てしまうものだ。そして、そのボロは勘が鋭い奴に見抜かれてしまうのがオチだ。ならばいつその事初めのうちから包み隠さずに堂々としていりやいいのではないかって、答えは考えるまでもなくノーだ。

大概このような場合において転生者ですと正体を隠さずしてのんびりと過ごせるわけがないのだ。理由はこうだ。まず、そのような者を貴族や国などがぬくぬくと放置することはない。次に目を付けられた以上は権力という名の下で身を捕らえられる。いい人ならご来賓として丁重に扱われるが、悪い場合はひどい拷問が待っている。どちらにしてもその世界での新しい技術を一から十まで教えなければならなくなる。断るのなら半ば脅迫という形で結局情報を吐かされることになるだろう。そうなればどのルートを通っても俺は大切な時間を奪われることになってしまう。つまりは自由な時

間が減るのだ。再び言い換えるならそれは面倒ごとに値する。面倒ごとはいらないのさ、なぜなら面倒だからねつ。よしキマった。

ちなみにこの仮説の参考文献は今までに読んだ転生もの関係の書籍やストーリーからだ。しかし、案外知識や記憶も役に立つもんだな。記憶のリセットとかは前言撤回するのでナシでお願いします。

「ね、兄ちゃん兄ちゃん。生でころころと兄ちゃん表情が変わっていくのを見られて初めは新鮮で面白かったんだけど、もう見飽きたしぶつぶつと呟いていてちよつとキモいから仏になって。仏の心を忘れないで」

「そんなにキモかったんかよ俺。ってキモいつて言うな。それに仏になれってどんな命令だよ」

どうやらあのキメに行った我が仮説はカノンに聞かれてしまった上に、あのブラコンのカノンにさえもキモいと言われてしまった。不幸中の幸いを探すなら、この場にほかの奴がいなかったことぐらいか。

「キモいつて言っちゃったことに関してはおめんなさい。仏の意味は兄ちゃんに仏みたいに冷静沈着で寛大な心で許してほしかったから……。ケンカしたくないし」

「……何故上目遣いをしてくるんだカノン。心配するなって。まあキモいつて言われてシヨツクだったけど人生の通算で2度目だし気になんて留めていない。それより契約

の話をだな。早い方がいいんだろ？」

こいつこんな表情もするのかというレベルで頭をペコリとしつつも上目遣いでカノンは許してほしいと謝ってくる。べたべたと許可もなく触ってきたりはしゃいでいるカノンの姿なら一日でずつと見てきたがそんな顔は初めてだ。この状況はハニートラップだと分かっているけども世の男性ならず女性でも引つかかるだろう。転生しても一応俺の心は男のままだし。まあそもそも転生先であるクルウドも男ではあるが。とにかく年齢に見合わずどこか妖美でかわいらしい少女を目の前にして絶対に許さずにいられないじゃないか。すぐにでも場の空気を変えるためにもここはひとつ話題を戻すべきだな。上目遣いで見つめてくる姿が可愛すぎて見つめられすぎ毒だ。

「まだ、機能はあるけど他としては念話かな。念話っていうのは転生ものの好きの兄ちゃんに説明することもないけど私と兄ちゃんの間で直接目を見て会話することなく離れていても互いの意識の中で会話できるシステムだよ。あと、私限定なんだけど兄ちゃんの見ている視界を私は見ることができるとさ。え、なんで冷たい目で見てくるの。私が見れるのは兄ちゃんが見ているその景色だけだし、ちゃんとプライバシーに配慮して兄ちゃんの方でアクセス権限のオンオフ切り替えは出来るからさあそんな目でこっちは見ないでお」

これではカノンに対する評価が難しい。謝ってきた直後であるのにも関わらず次

は盗撮でもする気らしく、あ、こいつやるな、と万引きGメンのように厳しい視線をカノンに向けてみればカノンはふためいて取り繕ってくる。人の視界を勝手にのぞき見しようなんてこいつはストーカーとか変態の類いなのかとつい構えてしまったが、しばらくれた顔を見るにどうも悪気はなさそうなのでスルーする。

ただ現実的な問題として、こつちの世界に来てから今のところ頼れる人がカノンと未だ確認はできていないが血のつながった親という3人だけではどうしても一番の情報源であるカノンとは縁を切りにくいし、今切ってしまうのは勝手がわからない現状として悪手すぎる。一応切り替えてできるらしいしずっと視界共有はオフにしておけば問題なからう。すぐにもでも楽しく生き抜くために友達を作ってツテを増やさなければ。

「念話は使い勝手は良さそうだけど、視界共有はなしだ。こちらがカノンの視界が見れないとかフェアじゃないし。念話とかそれらってカノンと契約しないと使えないのか？」

「そりゃ互いに了承した上で契約することによって兄ちゃんも私も不思議な力がはたらいて常時意識を繋げられるんよ。その上で能力が強化されたり、互いの能力が使えたりするなどとってもお得なんだよ。ただ兄ちゃんが言ってた視界共有だけは太古の時代からどうやってても精霊しか使えないらしいんだ、そのところはごめん……」

視界共有が精霊固有で使える能力っていうのならしょうがない。お前のせいじゃな

いんだから気にするなと泣きそうになるカノンをなんとかだめて落ち着かせる。使えない能力が一つぐらいあるからって泣いて謝ることか？ 案外、素直に優しいのかもしれない。

「悪徳商法みたいに契約しろと押しつけてくるけど本当に大丈夫なんだよな。きちんと時機を見て解約できるのか。一人につき精霊もまた一人ならば他の精霊と契約したい時は解約しないといけないんでしょ。そこのはつきりしておかないと後々不利益を被りそうなんでね」

若干語尾を強くすることでこの俺でも真剣に怒ることを示して、カノンが動揺してくれることに期待する。解約できないなどそれこそ悪徳セールスの戯言と同類だ。

「解約？ そんなのできるわけじゃないじゃん。っていうか私絶対兄ちゃんとの契約は破棄しないし、する予定もないんだから。っていうか精霊と一度契約したならもう解約はできないもん。そもそも浮気するなんて完全にアウトです。私はいつでも兄ちゃんを心のうちから信頼しているし一緒に過ごすのは決定事項なんだからね！ 分かった？」

（二度あることは三度あるかのように普通に既定事項が何事もなく飛んできたよつ。カノンさんある意味で恐ろしや）

ツツコミしてくださいといわんばかりに、点火した爆弾を平気で投げることく発言するとは気が強い以上にこの娘かなりのやり手の部類に入りそうだ。どの世界にお

いてもこういうやつと結婚すると尻に敷かれるのが手に取って理解できる。

ただ冷静になって考えると、ヤンデレの可能性大で重いことの多いカノンであってもここまではつきりと言うのだから契約を結ばないとこの身に災いが降りかかってもおかしくはない。実際によくある展開だしな。今までの会話にない程強引までに押し切っていることから、あえてこれから起きる現実を教えることによつて怖い思いをさせたくないという慈悲が感じられる。それに転生が完了したとも言つてたような気がするし、たとえば今死んだとしてももう高校生の鏑木深生には、そして、現代日本には戻れないような気もする。それなら精霊カノンとの契約が自分がこの世界で生きるために必須なのなら面倒ごとが増えてしまいがやむを得ない。面倒ごととは嫌だがこんなところで死んでたまるか。

「精霊カノン。君がそれ程自分の身を案じてそう言つてくれているのなら、自分と契約してくれないか。これは自分の意思で決めたことなんだ。この通りだ、よろしく頼む」
妙にかしこまつた言い方にはなつてしまつたが、ここで精霊カノンの機嫌を損ねて契約が不成立にでもなつてしまうものなら、これからの人生が色々と辛くなるだろう。特に情報面においてだ。情報を制する者は世界をも制するつてもんだ。まあカノンも自分のことがとつても大好きらしいし契約成功になるだろう。

「ふっふっ。精霊カノンってなんなの。私は今まで通りカノンって呼び捨てされた方が

親しみやすいから名前前の前に精霊って付けなくていいよつ。精霊って人間と契約しているのってまだまだ珍しいから注目されちゃうし、ばれちゃうと悪い輩どもが襲つてくるかもしれないじゃん。なんだから私もかわいし、精霊の力って普通の人から見るとすごい力だしね。これから契約を結ぼうと思うんだけどこの部屋はちよつと狭いからどつかある程度スペースがある場所にいこつ」

「そんなこと言つてもこつちに来て間もないからここら辺はさつぱり分からないんだけどどこに行けばいいのさ？」

転生してまだ初日のうえさつきまで長々とこちらの世界の説明を聞いていたので我が家付近の地理に詳しくはない。ここはオッセラだとはカノンに教えてもらつてはいるが、ここがオッセラのどこかまではカノンも知らないようだ。

「聞けばいいじゃん、聞けば。この家にはこの街に長年暮らしている人もいるんだし」カノンはこう言つて自分の手を掴むと部屋のドアを開けて、リビングへと向かう。そして、そのリビングにはこの世界における自分の母さんが居たのだった。

契約の儀式　ニオラント・ミダ

「お母さん始めまして。私は枕の精霊であるカノン・ベデイ・エピローヴと申します。早速本題に入りますが、私は、兄ちゃんと……、間違えましたクルウドさんと契約することに決めました。もちろんクルウドにも了承の返事を貰っています。ところで、できるだけ目立たないようなところであつある程度の広さのある場所はここの近くにありませんか」

こちらの世界の母さんは現在リビングで料理をしていた。自分らの姿を見ると手を止め椅子に座るように促したのでカノンと隣りどうしで大人しく座る。母さんが飲み物を持ってきてくれたところで早速カノンが話し掛ける。その姿は凜としていて数年生きただけの少女とは思えないほど礼儀正しい。十何年生きている今どきの高校生でもこれほど礼儀がいい奴はそういないだろう。ただ、初対面の人に精霊って名乗ったり、契約が既に決定したとか堂々に言ったりして正体をばらしてもいいものだろうか？

ところでカノンさんって精霊といっても枕の精霊!? え、枕なの!? 寝る時に使うあの枕ですか!?

「カノンちゃんねえ。とてもかわいい精霊さんのこと。これからクルウドと契約の儀式をするってことかしら。なるべく目立たない場所かあ……。それならば扉を出て右に進んで2つ目の十字路を左に曲がってしばらくするとヤンセン食堂っていう料理屋があるからその料理屋の右手前の狭い路地に入って少し歩けば多少広い空き地はあるけど、そんなに広くはないかな。クルの部屋4つ分ぐらいかしらね。目立たないとなるとそこぐらいかしら」

「ありがとうございます。4つ分もあれば広さは十分です。それじゃあ兄ちゃん早く行こつ。あ、そうだ、あと厚かましいお願いなんです、私も一緒に住ませてもらえませんか？ 迷惑はかけないですし、私枕の精霊なので普段から枕の状態です。どうかお願いします」

なんと母さんがカノンが精霊だつて言つても疑いもせずにあつさりと思つてしまつた!? これも精霊の力なのかとつい感心したけど普通におかしいだろう。まず、カノンと一緒に住むだど!? いい奴であるのは否定しがたいが同じ屋根の下で過ごすのはどうかしてあげ。多分カノンは存在するだけで迷惑かけてくるぞ。だから母さん、しっかりと断つてくれよ。

そもそも枕の状態つて今の人間状態から変身するのかカノン!? どういう話になつてるんだ、最初にきちんと説明しとけよ!

「もちろんいいに決まってるじゃないの。だって、クルをお兄ちゃんって呼ぶほど仲良しこよしなんだし、それにクルの精霊ちゃんなのでしょ、なのにクルと一緒に居られないとかかわいそうじゃない。むしろ、クルのことをよろしくね。あと枕の状態でなくてもいいからね。私にも遂に娘ができたわ〜」

娘が増えたやらと歡喜するとかどういう神経しているんだ母さん。心底呆れてしまったぜ。どうしてこんなやつをうちに受け入れるんだ。一緒に居たいとか口にすら出していないんだぞ！ 母さんはもしかして早とちりの癖があるのかもしれない。

あとおかしいところとしては何が俺のことを宜しくとか言ってしまったるんだよ！俺は契約は受け入れたが一緒に住むとは決めていない。カノン、既成事実を作る必要なんて全くないんだぞ!?

「クル、カノンちゃんのこと大切にしなさいよ。クルなんかには勿体無いほどいい子だからね。クルの将来のお嫁さんになるならそれはすごく嬉しいわあ。あら、自由気ままに妄想しちやつてごめんさいね。クルつ、カノンちゃん泣かせたら許さないんだから。あとクルあなたには拒否権はないからね、分かった？」

声を出して異議を唱えようとする前にカノンからも母さんからもキックされくすぐられたりでことごとく遮られて発言できなかつたうえに最終的には俺には拒否権はないらしい。カノンは勝手に俺の嫁さん候補にすらなってるし。母さんが有無は言わせ

まいと見つめてきてるしその目が恐すぎる。俺は何か癩に障るような地雷でも踏んでしまったんですかね。

(しかし、どうしましょうかね。ここで反発して家出をするのも手なのだが、情報すらない中で独り身で生きていけるほど果たしてこの世界は甘いのだろうか。楽するために反抗せずに従うべきなのではないか。カノンのことだから家出しても問題はなかったかのように連れ戻されそうなんだよなあ)

散々シユミレーションした結果波風立てずにこの家で過ごすことに決めました。絶対反抗した方が厄介になるのは自明だし。なに反抗しなければどうってことないっしよ。

「お母さん。兄ちゃんと婚約しても本当にいいのですか。なれば私はふつつか者ではありませんがこれから是非ともよろしくお願いいたします。兄ちゃんく、婚約許可も取つてきたよ!」

打ち解けたのかカノンの堅苦しい話し方がいつの間にか砕けた口調に変わる。

「ああそうかい。もう好きなようにやってくれ……。いきなりこんなとはツライなあ。なんていうかこの2人似た者同士過ぎるだろ……」

初日で婚約決定とかテンポが早すぎるって。もうここまでくると抵抗する気力すら失われ選択肢は匙を投げるしかない。長年の親友のように息びつたりのお二方を見て

自分にどんな悲劇が襲ってくるのかを考えてはその度に落ち込む。

どうやら自分クルウドは契約精霊のカノンにも母さんにも逆らえないようだし、これからの人生は振り回されそうだ。……強烈なキャラばかりの世界なら転生しない方が良かったのかもしれないが、もう後の祭りなのだ。流れに身を任せるしかない。

いつの間にかカノンと同じ家で暮らすこととなり、婚約も決まってしまった自分クルウドとクルウドの契約精霊にして母親公認の婚約者となったカノンの2人は教えてもらった空き地に来ている。そうこれから契約の儀式を行おうとしているのだ。

「やっと到着したあ。契約の準備をするからちよつと待つてて」

「分かった。暗くなる前には帰らないとな。こっちの母さんを怒らせたら恐そうだ」

ここに来るまでに道に迷ってしまえば色々大変といったらありやしない。中でも面倒だったのはご近所さんと思われる人たちに「クルウドはもう彼女ができたのか」と勝手にカノンを彼女のよう仕立て上げるわ、カノンもカノンで「私はクルウドの婚約者のカノンです。これからよろしくお願いします」とかしやれにもならないことを平気で口に出して、ご近所さんたちが更にヒートアップするわけでどうしようもなかった。

それでもどうにかこうにか一旦は事態を收拾させた時にはすでに遅く噂を聞いた母さんが乱入してきて、そうそうに「この子はうちの子になったカノンです。みんなよろ

しくね。めでたいことにカノンとクルは婚約したのよ」とカノンを紹介しながらこの婚約を肯定していくので、それはそれはと大騒ぎになって取り返しがつかなくなってしまう。街のおじさんおばさんたちにもみくちやにされつつも人ごみから抜け出して、暗くなる前にと急いで走るうちに空き地に到着して今に至った次第だ。

あの母さんはしかしどれだけ知り合いがいるのだろうか。あの人々の集まりようならば余裕で300人は超えていたはずだ。社交的という感じを通り越してコミュニケーションお化けだろ、あの人。

話を現在に戻そう。契約の儀式の準備をしているカノンは空き地に落ちていた木の棒を拾うと真剣に何やらマークを書き始めたが、自分は準備に参加することなく空き地の隅に腰を下ろす。手伝おうにも事前にカノンに間違えて失敗したら困るから何もせずに見守っていてと言われたのでわざと手伝って邪魔をする気はない。こういうことはやる気がある奴がやれば大概上手いく。

「起きて兄ちゃん、準備は終わったよ。じゃあ契約しちやおう。こつち来て」

大分待ちくたびれてしまい眠っていたようだがもう少しで契約の儀式を済ませられそう。初めのうちはカノンが熱心に書いているところを見ていたのだが、地面に書かれた文字というのも有名どころの英語とかフランス語とかではなく見慣れない言葉であつてその意味はからつきし分からない上につまらないのですぐ見飽きてしまった。

それじゃあと、やることもないならネットサーフィンかなあとズボンのポケットからスマホを取り出そうとしたのだが見当たらない。本当に見当たらないので周りを見回してみて気づく。転生したここは異世界であることに。現代日本と比べて技術が未発達というこの異世界の歴史上にはこれからもスマホという大発明は刻まれないのだろう。ああ万能アイテムのスマホが恋しい。

「早く来てよ。あつ来た来た。契約の儀式の手順を改めて説明するね。まずこの下に魔法陣みたいな模様が描かれているでしょ。これをこちらの世界ではニオラント・ミダといって精霊と人間が契約する際に使われます。この模様にはもちろん意味があるけど時間がかかるからまた今後。まず契約する者同士が手を繋いだりして身体が触れ合った状態にしないとイケないんだよね。ああ、その時には身体は枠の中に入れてね、あの狭い長方形だよ。次に互いが自分の魔力を相手に流す感じで二人の間で循環させる。そして——」

まだ説明が続きそうだったのでクルウドは説明を一回遮り質問をする。

「ちよつといいか。転生前には魔法なんて存在してなかったし使ったことないんだけど魔力ってどういう風にすれば流せるんだよ。魔力なんて具体的には見えないうし、いまいちイメージがしにくい」

クルウドは魔法の使い方なんて知らない。この世界に転生してから魔法を見るのは

これが初めてなのだ。魔法に関する勉強もしていないので魔法の行使の仕組みすら分からない有り様だ。もし魔力が足りなかったりして出来なかったらどうしようかと少しずつ緊張してきて顔がこわばっていることは自分がよくわかっている。

「見えないけれど兄ちゃんとの魔力はそこにある。だつて契約できるだけの資質を持ち合わせているなら魔力は十分にあるってことだから。アドバイスするなら瞑想しながら相手の存在を感じ取って2人一つになって信頼しあうみたいなものかなあ。うん、目をつぶった方がうまくいくかも。ただ、上手く説明しにくいね。ああ、心配しなくてもそもそも魔力が流れなかったら効果が現れることなく何も変化しないから危なくないよ」「なるほど、ある程度は想像がついた。では続きの説明をよろしく」

失敗してもデメリットがないと知ったことでクルウドの心情は幾分か楽になった。また、カノンのアドバイスも心の持ちようを説いたものであったので、ひとまず心を落ち着かせて話の続きを聞くことにする。

「魔力を二人の間で十分に循環させると段々光の粒が舞ってきて魔法陣が何色かに光って浮かんでくるから、更に集中力を高めていくの。そうしているうちに完全に魔力の循環が行われて互いの意識が同化するはずだから、その時にニオラント・ミダと叫べば晴れて契約完了だよ」

クルウドは話を聞き終わってこれからの流れを頭の中で再確認する。

「単純すぎる気もするが、魔法の名前のままに叫べばいいのか。……ええと、何だったわけ、ミオラント・ヒダ……で合っているよな？」

叫ぶ契約魔法の名前はたったの7文字ではあるが、クルウドはまだ数回しか聞いていないので正しい契約魔法の名前を覚えきれていない。もちろんカノンに指摘される。

「兄ちゃん、惜しいけど違うからね。二オラント・ミダだよ。ミオじゃなくて二オ、ヒダじゃなくてミダだったら合っていたのに。この契約魔法の呼称には兄ちゃんの転生前の名前の「深生」の読みは入ってないから、くれぐれも間違えないでよ」

間違いが許されないような大事な儀式なのだろう、カノンの目や口調も真剣なものに変わっている。それを感じてクルウドも余計に緊張してくる。

「もう本格的に暗くなりそうだから今からやるよ。準備は……、うん終わっているよね」カノンは若干緊張気味であり明らかに心構えができていないのを分かっているはずなのに自分のことを待とうとはしない。

「どう考えたって準備できているように見えないだろ、ちよい待ちで」

「そういうのは後で聞いてあげるから。さあ、長方形の枠の中に入った入った」

心の準備が整っていないと伝えても、カノンはまともに会話を取り合う気は無いよう
で、半ば強引に気の棒で地面に書いた枠の中にクルウドを入れさせる。

「はい行くよ。兄ちゃんもしっかり集中して取り組んでよ。一発で成功させるんだか

ら

クルウドのことはお構いなしにカノンがクルウドの手を取ると儀式を始める。クルウドとしては未だに不安であったが一応カノンのアドバイス通り目をつぶる。

(これが魔力の循環ってことか？ 確かに身体の中に流れてくる感覚がある)

しばらくすると2人の間を魔力が循環することによって自分の身体に力や熱が入ってくるのをクルウドは感じ取る。クルウドはこれが魔力の循環だと認識し、更に集中を高めていく。

クルウドが感覚を感じ取ってから1、2分を経たないうちに2人とその周りに光の粒が舞い始め、青紫色に光る魔法陣が現れる。

カノンは初めて見る幻想的な景色に見とれつつも失敗しないようにと今まで以上に神経を使う。一方で、クルウドは目をつぶって集中しているのでこの感動的な景色すら見ていない。これは後日談だが、クルウドがのちに契約による記憶の共有によってこの光景を見た時に、生で見るべきだったと後悔している。

(今だ！)

光の粒とともに現れた青紫の魔法陣が夕暮れ時の空の赤さを打ち消さんと空き地を覆いつくそうかというほどに大きくなった頃、転生時とは違い目を開けて周りの様子を見ておこうとも思わないぐらいに集中しきっていたクルウドの意識がついにカノンの意識と同化する。

「ニオラント・ミダ！」

互いに同化したのを察知したクルウドとカノンは同時に「ニオラント・ミダ」と叫ぶ。次の瞬間、浮かんだ魔法陣が地面に書かれた模様と反応して、2人とそれ以外を隔てるように円柱状に光の壁を作ったかと思うと、壁の中で絶え間なく生み出される光のうちその空間で抑えることができなかつた一部が上空に向かって一直線に放出される。そして、空で一瞬眩しいほどに煌めくと何もなかつたかのようにすぐに消えたが、空に放たれた圧倒的な閃光をたくさんの市井の人々が見ていたことだろう。

「これはどうなっているんだよ。1秒でも目を開けばなしにしてたら失明しそうなほどに眩しい」

「兄ちゃん、多分ニオラント・ミダの行使に成功したんだよ。古い書物の一部分に溢れんばかりの光の祝福あれ、とか書かれていたから。でも、これは眩しすぎるよお」

一方で、クルウドとカノンに着目すると、2人は光の中にいる錯覚を覚えている最中

であった。通常では起こりえないほどの光が限られた空間内で爆発的に生み出されているのだから当然ではある。

しばらくすると、空の暗さが確認できるまでに生み出される光は少なくなり、やがて2人が居る空き地も普段通りの静寂に満ちる。

「……カノン、……今のは一体……。……成功したのか？」

クルウドは光の幕から解放されても言葉を発しないカノンに疑問を覚え、いても立つてもいられなくなり、何故か黙り込んでいるカノンに結果を聞いてみる。

「……うんっ、成功したよっ。やった〜！ 兄ちゃんの記憶が見られるようになってるもん」

カノンは顔を上げて笑顔を見せると、契約が成功したことを大いに喜ぶ。ただ、許可もないのに人の記憶を見るのはどうなんだ。

「何勝手に見ているんだよ。文句言ってもいいけど、疲れたし今日のところは咎めはないでおくか」

ライブバル

「あつ、クルウドじゃん。今度うちに遊びに来る？ それとも私が遊びに行つた方がいいよね。レイラさん優しいし」

契約の儀式も終え、大通りに出ようかとの辺りで一人の少女に声を掛けられる。

「おい、カノン。自分たちの前にいるこの少女は誰だよ？ まだこつちの事を何にも知らなすぎてろくに会話にならないぞ」

気安く話してきたこの少女はシルバークレーの艶やかな髪や優しそうに見える眼が印象的で、その髪の長さはボブといったところか。余程性格が悪いとかじゃなければこういう女子は一目置かれるようなクラスのマドンナのポジション候補の人気者だろう。自分から見てもカノンよりもこちらの少女の方が清楚さがあつて、好みのタイプではある。

「……えつと、私も転生前の交友関係については分からないや。つてことで兄ちゃん、うまくこの子についての情報を引き出して。ファイト」

カノンなら何か知っているかと思つたが、転生前の交友関係は記憶の中に網羅してないようだ。この少女の名前や性格ですら分からないので、地道にでも聞き出す他な

い。

「クルウド、今お兄ちゃんって呼ばれなかった!? ということはクルウドの隣にいるのは妹ってことなの? でもクルウドに妹なんていたっけ。レイラさんたちも兄妹がいるってことは全く言っていないかったけど……」

「おう、そりやそうだよ。こいつは最近新しくできた……義妹なんだから。これから宜しく」

「あーそうだったんだ。ふくん義妹かあ」

クルウドがカノンのことを義妹だと紹介したところ、少女は品定めするかのようになノンのことを観察している。

『兄ちゃん、彼女の目線を見るにこの子は兄ちゃんの妹であるこの私に興味を持っていそうだから私が話してみる。私が自己紹介すれば向こうも自己紹介せざるを得ないよね』

クルウドが自身とカノンの関係が怪しまないようにと策を練っていると、カノンから私が自己紹介するからと念話が飛んできたので、カノンに任せることにする。

「まず先に私が自己紹介しますね。私はカノン・ベディ・エピソードと申します。年は兄ちゃんと同じく3歳ですが、私の方が生まれた時期が遅いらしいので私が妹になりますね。そして、兄ちゃんの婚約者です。レイラさんにきちんと許可を頂きましたので、ほ

とんど正式に近い婚約です。兄ちゃんと一緒に居る機会も多いので、これからよく会うかと思いますがよろしくお願いします」

カノンはさり気なく自身がクルウドの婚約者であるアピールを自己紹介に入れていく。

「こ、婚約者なの!? ねえクルウド、どういうこと。なんでクルウドもレイラさんもこの子を選んだのよお」

「ひよつとしてあなたは兄ちゃんのことが好きなのですか。しかしながら、兄ちゃんにはもう私という正式な婚約者がいますから、きつぱりと諦めてください」

「本人がいる前で言わないでよお。ああ、聞かれちゃったじゃない。恥ずかしい」

どうやらこの少女はクルウドのことが好きらしい。カノンに見抜かれて少女は顔を赤らめる。クルウドも少女の赤面姿を見て、これは初恋だなと理解する。

「その様子なのなら私の勝ちですね。好きな人に好きだと言えない時点で勝負にすらなりません」

意中の人に好きだと言えないからっていうだけで負けだとは思えないのだが、カノンが少女を嘲笑うかのように勝利宣言する。少女は先程から赤らめていた顔を更に赤く染めると彼女自身に言い聞かせるように叫ぶ。

「——私だって……。私の方がクルウドのことを愛してる!」

この子、今俺のことを愛しているって言った？ クルウドはタイプの子に告白されて嬉しいのだが、唐突で全く理解が追い付かない。でもこの少女に鞍替えしたらカノンがどれだけ怒ってくるかは想像できるし、どちらも今もお張り合うほどに負けず嫌いっぽいのでケンカに発展しそうだ。

「……大きく出ましたね。私のライバルになるのなら、相手はこれぐらいがいいのかも。ただ、あれだけ大声を出せば周りの人に見られているんだけどね」

流石のカノンも少女のこの大胆な宣言には言葉が詰まったようだ。だが、カノンも負けずにお返しとばかりにあの宣言が通行人たちに聞かれていたことを本人に伝える。

「えっ本当に。……ああ、物凄く恥ずかしい。これじゃあ笑いにされて外へお嫁に行けなくなるじゃん。ということだからクルウドが私のことを貰ってくれるよね？」

カノンに言われて初めてこの状況に気づいた少女が周りを見回して睨みつけると、野次馬と化していた通行人たちは目を合わせないようにこの場から去っていく。そして、嫁に貰ってくださいと相変わらず衝撃的な発言を口にする。

「だから、兄ちゃんの婚約者はこの私なの。もう空いていないから何をどうぞ」

「そんなに怒らないでって。今のは恥ずかしすぎた余り吹っ切れたからわざと言ってみただけだからさ。でもね、急に現れたと思ったたらクルウドを誘惑して婚約したという女に私が負けるわけがないの。私とクルウドの間にはあなたが知らないような今までの

3年間があるんだからね」

少女はそう言っただけで、今まで過ごしてきたという3年間があることをカノンに自慢している。やはりこちらもちらでカノンに負ける気はないようだ。

「残念だけど、兄ちゃんは一度転生しているから、あなたが過ごしたその3年のことは全く覚えていません。つまり、あなたの思い出は兄ちゃんを引き留めるのに何にも役に立たないよ。これで本格的に諦めてもらえますよね」

「おいカノン。何さなりと俺が転生したってことを話しているんだよ!? この負けず嫌いの精霊め。転生初日にいきなり秘密をバラしていくとか、そんなに俺の人生を険しいものにしたくない!」

確かに今のクルウドには転生前でのクルウド自身の3年間の記憶はない。それは紛れもない事実であるが、俺が転生したってことを包み隠さずに堂々と言っている理由にはなるまい。クルウドにとってこれではサポートどころか迷惑でしかない。

「あつ、兄ちゃんごめん。決して迷惑をかける気はさらさらなかったのだけど、こればかりは意地を張らずにはいられなかった。でも兄ちゃんに対しての私の思いは本物だよ。私が兄ちゃんの1番になりたい」

「転生? 精霊? 一体どういうこと?」

「……なんで私が精霊だと知っているの……? 貴方は天才少女とかですか」

出会って間もない少女に精霊だと指摘されてカノンもまた動揺する。

「んなことないよ。私はここの食堂の娘だよ。今クルウドがそう言つてたから聞き返しただけなんだけど……。私悪いことでもしちやったのかな」

「単純に兄ちゃん馬鹿！ 思い返せば、あれほど言わないようにして何度も忠告していたのに精霊だつて口走るなんて信じられないよ。あと、負けず嫌いってどういうことなの」

「なあ、今日はもう遅いし、暗くなつているから明日になったらもう一度話し合うのはどう？ 親御さんだつて心配するでしょ」

カノンから怒りという集中砲火を受け、思い返すとカノンが精霊だと言つてしまったような気がしてクルウドは我に帰る。このまま怒られ続けるのは嫌だったので、話題を変えて矛先を収めようとする。

「あとで叱られるのもねえ。分かった、すぐお母さんからクルウドの家に泊まる許可を貰つてくるから少し待つていてよ。店は目の前だし3分もあれば説得できるから」

クルウドは秘密に關してはお互いに非があつたのでこれから要相談という形でカノンと仲直りする。景色に目を向けるとすっかり日は落ちつつあり、空は地平線付近を赤く残してほとんど一面を暗くしている。少し時間が過ぎればじきに夜になるだろう。

「お母さんが泊ってきてもいいって言うてくれたからこれで問題は解決。クルウド、あとは……カノンだったっけ。暗くなるし、早いとこ行こうよ」

「……その格好で行く気か。夜になってきたし少し外に出るだけでも身体を冷やすぞ。あと見た感じ手ぶらのようだが、泊まるのに着替えとかもつていなくてもいいのか」
少女は先程と同じくまるでちよつと軒先に出る感じのようならフな格好のまま、泊まるための荷物すら持たずに出てくる。初対面の少女ではあったが、一応心配して声を掛けておく。夜になってそれほどまでに寒いのだ。

「そうだね。さつきみたいになら3分では言えないけど出来るだけ手短に準備を済ませてくるからしばらく待っていてくれない」

「先に帰っちゃおう？　こんなに寒い中待つのも嫌だし。それに多分あの子、私たちの家の場所知っているよ」

「ここは待つて3人で帰るべきだと思う。彼女を一人にしてしまうと転生や精霊という秘密を他の人にうつかり洩らされるかもしれない。自分たちにとっては機密であつても、彼女にとつて転生や精霊とかの情報は重要ではないからさ。それについて口が滑る可能性も否定できない」

少女がそう言うて食堂である実家に戻つてからとつくに5分ぐらいは過ぎたあたり

で、カノンが2人で先に帰らないかと提案してくるが、クルウドは即座に却下する。クルウドとしては自分たちの秘密を他の人に言われたくないように監視しておきたいのだ。

「兄ちゃん。こういう秘密裏で進めるべき話題の時こそ念話の機能だよ。私がさつき一度使っていたでしょ、あんな感じで使えば周りの人に気づかれることなく会話ができるよ。魔力は微量ながら消費はするけど、物は試しで兄ちゃんも使ってみようっ」

クルウドもカノンも自分たちの秘密についてはあの少女だけならまだしも他の不特定多数の人々にまで聞かれたくはない。ともあれば声に出さずして会話することが出来る念話機能を使えるようになったことは非常に効果的である。

『こんな感じで念話しようと思えば通じるのか?』

『うん、兄ちゃんもなかなか上出来の方だよ。話題を元に戻すけど、転生も精霊もばれてしまったのはどうしようもない仕方ないとしても、どうやって誤魔化す? それとも、正々堂々と正体を明かしちゃう?』

『……どうしたのかなあ。どちらとも上手く誤魔化しきれればいいけど……。ところで、カノンが精霊だということは母さんに言っていただろ。契約した自分に言うのは当然だとして、カノンはなんで母さんにも言ったんだ?』

クルウドはカノンが母さんに精霊だと明かした理由を聞く。自分が精霊だということとは誰にも言わないで秘密にしてお願ひされたのに、どうして母さんには自身の正体

を明かしたのだろうか。

『私の経験としてレイラさんには言っても問題ないかなって思ったからだけど。実際物怖じせずに快く受け入れてくれたし、結果としては良かったよね。—私の直感だと、レイラさんにはあの笑顔の裏に数多くの修羅場を潜り抜けたかのような凄みがある気がする。本当いつでも頼りにできるほどに』

『なるほどな。……もういつそのこと母さんとかあの子とか関係者全員を巻き込んでしまおうか。決して諦めたんじゃないよ、カノンの勘を信じて打ち明けるのも手かと。こっちはお前と契約の儀までも交わしたんだ、時々なら相棒の直感に従ったっていいだろう。明かす内容はカノンが精霊であることと、もう一つは俺が転生してきたってことだな』

クルウドがそう言うのとカノンは驚いた顔をしてクルウドの方を見る。恐らくはクルウドが転生したことを話すと聞いたことが思いがけないものだったのだろう。

ただ、クルウドとしても浅慮さから述べたものではない。初めは半信半疑ではあったが、クルウドはカノンが自分と一緒に居たいという気持ちも、契約精霊というパートナーとして自分のことを支えていきたい思いも、そのためなら積極的に行動する信念も、この一日を過ごしながら感じていた。そんなカノンがクルウドの母さんであるレイラのことを秘密を教えても問題ないと判断したのだ。実際に精霊だと明かしてもカノ

ンのことを追い出さなかった実績もある。

またクルウドの認識として少女の方はクルウドのことを愛しているほどに好きだということとはそう簡単には播るがないだろう。そんな少女が果たして好きな人の秘密を他人に話すとも考えにくい。カノンに対する少女の評価は不安材料ではあるが、そこは何とか黙っていてもらう予定だ。

カノンの意向次第ではあるものの、クルウドはこれらの理由から母さんとその少女の2人ぐらいなら秘密を打ち明けてみても大丈夫だと考えた上で、どうせなら巻き込んでしまおうかとカノンに話したのである。

信頼を生む覚悟

『レイラさんは私が精霊だっていうことなら知っているから、あの子に対しても言ってもいいとして、兄ちゃんが転生したことまでもわざわざ話す必要はあるの？ レイラさんもそれについては知らないんだから、彼女さえ口封じすれば解決するけど』

カノンはそう言うのと彼女の家に指をさす。確かに言わせなければ秘密がばれることもない。

『転生のことを母さんに言う理由はこちら側の味方に組み入れたいんだよ。何かあった時の防波堤みたいな感じとして。今打ち明けるのと、転生者だつてばれてから打ち明けるのでは、全く印象が変わってくるだろ。「転生してしまって困っています」とアピールでもしとけば助けてくれるかな、とか』

『そういうこと。悪くないと思うよ。嘘をずっと付き続けたくはないよね』

秘密を隠しておくことはある意味嘘を付き続けることに似ている。勇気を持って言えばすつきりすることもある。

『ああ。少人数のうちに限るのだが、秘密は2人より3人、3人より4人と人が多い程ばれてしまった時に感じる罪の重さが減るんだ。ずっと秘密を2人で抱え込むのも今は

まだ耐えられるけど将来を見据えて考えるとなあ。出来れば隠し通したいんだけど隠し通し続けるのは俺としても辛い部分もある……』

こういう秘密は心の中でくすぶり続ける。早めに暴露する方がいい場合も多い。

『さつき言ったことと矛盾するようだけど、秘密とは共有する相手が少なければ少ない程外部に漏れにくいことは常識だ。よって今回の場合は母さんとあの少女だけに伝える。母さんはカノンの勘を信じてだな。あの少女については秘密を知られてしまったという理由があるから話そうと思う。カノンはこれでいいか?』

『基本的に私は兄ちゃんに従うよ。変な言動をした時は絶対に阻止するけどね』

人とは何かしら理由がないと思いついて行動することが難しくなる。理由があれば動くことは容易くなる。

これで次に起こす行動の方向性が固まってきたので念話を切断して少女の準備を待つことにする。

「それにしてもあいつ遅いな。自分たちが相談している間だけでも十分に時間は経っただろうに」

「いつの時でも女の子の準備には時間が掛かるものなんだから。もう少し待ってみよ、——って言おうとしたら来たよ」

大事な話も済んだことでやることが無くなったクルウドもついに待ちくたびれる。

2人とももうそろそろ寒さに身体に堪えてきそうだとところで少女が裏口から出てくる。

「2人とも待たせちゃってごめんね。行こっか」

帰路に就いてもなかなか少女についての情報を聞き出せず苦勞しているうちに家に着いたので中にはいることにする。それにしても外は寒かった。

「お帰りなさい。あら、マヤカちゃんも一緒だったの。そんなに荷物を持っているってことは今日は泊まりにきたのね。クルがカノンの歓迎パーティーに誘ったってところかしら」

カノンのライバルとなったこの少女はマヤカというらしい。母さんがすんなりとマヤカのお泊まりを許可していることからマヤカと転生前のクルウドはさぞかし仲が良かったのだろう。

「クルウド、今日は帰りが遅かったな。そっちがレイラから話に聞いていたカノンに、あとはマヤカもいるのか。クルウドも女子2人を携えるとは——何て言うか……お前、両手に花だな」

(この人が父さんになる人物なのは大概予想が付く。しかし、この親父はいきなり何を言い出すんだよ。ああ、そんなこと言っちゃったらまあカノンも構えるわな)

豪快に話し掛けてこられたのでクルウドはちよつとビビッてしまい、またカノンも明らかに引き気味である。この家に居るってことはお父さんに違いない。そうでなければ自分の親戚の類いか。

「いきなりそんなことを言い出すんじやあなたに対する評価がだだ下がりです。——この人はシーハさん。私の夫で、カノンとクルのお父さんにあたるよ。さあさあ、みんな中に入りなさい。外は夜になって寒かったでしょ」

母さんが紹介を済ますとカノンは少しばかり警戒を解きつつも父さんとは目を合わすことなく一直線に部屋に向かう。ただ、カノンもわざと目をそらしたのではない。父さんという予定外の人物の登場にどう対応をしようかと計っているだけなのだ。

『兄ちゃん。レイラさんとマヤカには話すことは決めていたよね。でも、シーハさんはどうしよう。ついどとして加えて話しておく?』

『自分たちの家族とのことらしいから話すしかないでしょ。仮にも母さんが結婚した人だよ。どんな秘密だつて気にすることなく一緒になつて抱えてくれるさ』

マヤカや母さんには秘密を打ち明けることは契約の儀式の帰り道で既に決めていた。しかし、転生してから一回も見ることがなかったので父さんの存在は考慮の対象には入っていない。でも父さんも一応は家族だ。たとえカノンにシカトされたとはいえやはり家族であることには変わりはない。ならば話を聞いてもらうのがいいだろう。まあ

秘密を話したことで拒絶でも示そうとでもするものならカノンが信頼を寄せた母さんの夫としてはいささか不釣り合いとも言える。

「カノン、お〜いカノンさん。無視しないでくれ。俺はずっと娘が欲しいと思っていたからカノンとも仲良くしたいんだよ。ああ、行っちゃった」

「カノンは繊細なところがありますからね。はじめの挨拶でそつぽを向かれたのでしよう。ですけど、私たちは家族になったんですから仲良くなれますよ」

一方でその父さんはカノンに口を聞いてもらえないことでしょぼくれている。事情は知っていても何だか可哀想に思えてくるが母さんが宥めているようなので心配ないだろう。やっぱりカノンは父さんに対してそつぽを向いていたのだな。

「カノンもふてくされることもないだろ。父さんの第一印象は良く思わないけどさ」
「両手に花だつて言つたじゃん。気に食わない」

部屋に戻るカノンを追いかけてクルウドも部屋に入る。その部屋はカノン用の部屋ではあるが、自身の部屋がどこかもよく分かっていないクルウドがカノン用の部屋であることを知るわけがないので、ためらうことなく入っていった。

「そう言っていたけどさ、念話をするために無視する理由にはならないし気に食わないほどのものでもないんじゃないのか」

「兄ちゃんは私のものだし婚約者なんだよ。私があの子と同列に扱われるのは嫌。私の方が立場が上だっていうのは一目瞭然なのに。あの発言は気に食わない。あとで撤回を要求してくる」

つまりカノンは、マヤカと比べられた時に婚約している自身の方が上に見られたいのらしい。そこで父さんが両手に花だと言ったことでカノンは同列として扱われたと思えない不機嫌になったといったところか。でもこれって父さんの方が被害者なのでは……。
「カノンが婚約者なのは確定しているんだから気にしなくて。……ひよつとして俺がマヤカに取られるとか考えているのか？」

巷に出れば俺とカノンが婚約していると知っている人の方が明らかに少ない。ましてはそもそも幼少期から婚約している例自体がそうなのだろう。これからのことを思うと父さんが言ったような言葉一つが気に障っているようではカノンの気持ちを持たなくなるのではと心配になる。

「——絶対に兄ちゃんは取らせない。兄ちゃんもマヤカになびかれないでよね」
「なびかれないようには努力はするよ。ただマヤカも可愛いからね。そうだな、2人とは他の人たちよりも友好的な関係でいたいよね」

クルウドはカノンを刺激させないようにと慎重に言葉を選んでいく。だが、カノンだけではなくマヤカとも仲良くしたいというのが本音ではあるため、マヤカになびかない

という約束はどうしても出来ない。仕方ないので努力義務という形にとどめておく。「私を差し置いてでも?」

いつもだつたら自信満々に話すカノンのその声は少し心許ないように聞こえた。

「いやあそういう訳ではないけどさ。ぶっちゃけるとマヤカの方がタイプなんだよ」

クルウドだつてカノンもカノンで可愛いとは思っている。しかし、清楚さもあつて真珠のように光り輝くシルバーグレーの髪色を持つマヤカの方がやっぱり好みなのである。このことをカノンには初めて伝えたのだが、カノンは幾分か喪心しているように見える。そうなっちゃいますか。

「クルウドつてやつぱり私の方がタイプなんだ。そうなら、カノンなんかよりも私のことを優先すればいいのに」

「マヤカか、急に入つて来て驚かせるなよ。つて、いつから盗み聞きしていたんだ」

マヤカがタイプなのだと言つた直後、ドアが急に開いたかと思うとマヤカは今がチャンスとばかりに身体を近づけてくる。そのマヤカの表情は嬉しげに緩んでおり、意気消沈のカノンとは大違いだ。しかし、ドアを急に開けられるとドキリとするのでやめて欲しい。正攻法にノックしてから入ってきてほしいものだ。

「クルウドが部屋に入った直後ぐらいからかな。2人の時だとカノンはどんな感じなのか知りたいと思つてね」

「それはつまり丸々全部聞いていたのか。堂々と部屋に入って聞けばいいのに」

今までのカノンとの会話を全て聞かれていたことを知りクルウドは慌てて部屋での会話と行動を頭の中で再生する。そして、特に聞かれていたら不味いような重要な言動はなかったことを確認すると胸をなでおろす。今回は恥ずかしいことがなかったから良かったものの気を付けなければならないことを心に留めておく。

「それだとカノンが本音で話さなくなるよ。絶対猫を被つちやう感じてしょ」

マヤカの行動は良くないことだと思いつつ、発言については確かにその通りだと思いつくクルウドは首を縦に振る。カノンは自分や母さんのように仲の良い相手に対しては何でも話すだろう。しかし、素性の知らない相手とはあまり会話をしなさそうだ。人見知りということなのだろうか。

「まあカノンならそうかもしれないな。見知らぬ相手だと気を許さなそうだし。でも、カノンとマヤカは似た者同士で案外気が合いそうな気がするんだけどね」

クルウドは何気もなく呟いた気が合いそうとの言葉によってこの場の空気が冷凍庫ぐらいには冷たくなる覚悟はした。帰りの道中からずつといがみ合っているのだ。当の本人たちは快くは思わないものだろう。

「どうなんだろう、気は合うのかな。お互いクルウド一筋つてところは似ているのかも。恋のライバルでなければ仲良くはしたいかな」

「違うと思いたいんだけど、ただ兄ちゃんがそう言うのならそうなのかもしれないね」

2人とも機嫌を悪くして反論してくるのかと思っていたが、予想に反して素直に返してきた。カノンとマヤカの2人はこういうところで非常に気が合っている。

「ただ、兄ちゃんが絡んでくる話ではない場合に限るけどね。そうだよねマヤカ」

「ええ、クルウドとの結婚するハッピーエンドに関してだけはカノンに負ける気はないよ。私にとっては負けられない戦いだから」

俺が関わることになるとは是非とも負けたくないのは2人とも一緒のようだ。この様子を見たクルウドはこれをまさに息びつたりと言うのではなからうかどつくづく実感する。似た者同士絶対がいい友達になれるはずだ。

「ねえカノン。私たち勝負しましょうよ。障害となりうるライバルが出てきたってことは争いが起きるのは必然でしょ。カノンなら逃げたりはしないよね」

「もちろん受けるよ。兄ちゃんには私の方がいいに決まっているし。そもそもマヤカには私と兄ちゃん婚約を解消させないといけないハンデがある分大変だよ。それでも挑んでくるのなら負かしてみせる」

マヤカの放った最後の一文なんて安易な挑発としか思えない。でも、カノンはそんなことを気にする素振りを見せることなく安直な様子で挑戦を受ける。

(路上で会った時から常々感じてはいた。3歳の女子同士がこんな会話をするものなの

か？ 絶対に年相応の会話じゃないよな)

この世界の教養水準が高いだけの可能性もあるが、それでも3歳前後にしては難しい単語を使って言い争っている。この年頃になると恋敵の存在を猛烈に意識し始めるのだろうか。

「バッチバチに言い争わないで2人とも仲良くしようよ。この世界には無いの？ ほら、一夫多妻制とか。」

精神年齢がすでに2桁であるクルウドとしてはカノンとマヤカを含めた3人で仲良くして穏やかに過ごせれば理想だ。無駄な争いごとは面倒ごとで巻き込まるので好かない。最悪2人と結婚すればいざこざが収まって解決するのなら喜んで結婚もしよう。しかし、独占欲が強そうなので2人の仲が良好にでもならない限り中々厳しそうだ。

「国王様とか貴族とか偉い人は何人も妻はいるらしいし妾も取っている話は有名だよ。ただ、お金とか権力がある人がすることであって庶民で妻が複数人いる男性はほとんどいないよ。私のお父さんとかシーハさんでも妻は1人だけでしょう。えっ、私は妾なんて嫌だよ。誰がどう言っても認めないし断固拒否しますからね」

どうやらこの世界では一夫多妻制が導入されているらしく、上流階級の男性によく見受けられるようだ。ただ、複数の妻に対する扶助が難しいのか一般庶民には一夫多妻制は浸透していないとのこと。

「マヤカはもう私のライバルになったんだから妥協してもらっちゃ面白くない。肩透かしをくらった気分になるから諦めるのなら真剣に争ってからにしてよね」

「私はクルウドとの結婚願望を捨てる気はないよ。妥協もしない」

この2人は争いをやめる気はなさそうなのでしばらくのうちは見守ってみるのも手か。危ないことは起きないだろうしな。

「うん、そうこなくっちゃ。兄ちゃんもマヤカもリビングに行く。さつきキッチンを手見したら色々とお皿に料理が盛りだくさん。きつと私の歓迎パーティーだから豪華なんだよ」

「そうなの。レイラさんが作る料理も美味しんだよ。楽しみ」

ほう、母さんが料理上手で困ることはないのだから純粋に有難い。転生前でも柴田に習っていたようにこつちの世界でも料理を教えるもらえば料理スキルを上げられるかも。

『兄ちゃん、私たちの秘密についてご飯を食べる前に話しておかない？』

『晩ご飯が楽しみなんじゃないのか。食べてから話したっていいんだぞ』

『食事して楽しんだ後に重い話はしたくないよ。それに兄ちゃん眠いんでしょ。ウトウトしているもん。やるべきことは早めに終わらせておこうよ』

精霊や転生の秘密を今日のいつ話すか決めてはいなかったのだからこの際に決定しておく。相談の結果、カノン案の早めに言うことですつきりさせようとの意見を採用してご

飯を食べる前の今から話すこととする。

「ねえ何で2人で見つめ合っちゃっているの。私を仲間はずれにする気。そうか、既に戦いは始まっているってことね」

クルウドもカノンも互いを見つめるつもりは毛頭なかった。ただ、カノンから念話を受け取った時にお互いが普段会話をする時のように相手の顔を見ていたことで、マヤカには見つめあっていると誤解されたようだ。

カノンが精霊だつてことや俺が転生してきたことをこちらの世界での両親やマヤカはどう思うのだろうか。

打ち明けようとする秘密

皆さんこんばんは、精霊族のカノンです。先程、部屋での会話時に「マヤカと気が合
うんじゃないか」と兄ちゃんに言われました。私としてはライバルと気が合っても……
とは思いますが、自分の行動によつて兄ちゃんが嘘を付いたということにはされたく
ないので、マヤカとは程よく付き合うことにします。でも、今まで同年代の女子の友達
がいなかったので内心ちよつと楽しみだつたりもするんですよ。それよりもご飯ご飯
。あのような豪華な料理の数々を見るにレイラさんは料理も得意なようです。いい
勝負になるぐらいには私も料理には自信がありますよ。……ああ、そうだった……。ま
ず食べる前に私が精霊だつてことを明かす予定なんです。ああ、早く食べたいのに
なあ。

正式にバチバチと火を散らそうかというほどのライバルとなったカノンとマヤカ、そ
してその正式な被害者となったクルウドの3人は部屋を出てリビングに向かう。リビ

ングには既に料理の支度をほとんど終えた母さんと仕事着からゆつたりとした服へと着替えを済ましていた父さんが隣同士の椅子にもたれて談笑していた。

「用事は終わったか。じゃあカノンの歓迎パーティーにしよう。3人とも座りなさい。カノン、これは全てレイラさんの手料理なんだぞ」

カノンやマヤカだけではなく父さんであるシーハまでもがレイラの料理を称賛する。クルウドは皆がそこまで言うのならどんなものだろうかとキッチンを覗くと、そこには複数の大皿にそれぞれ違う料理が盛りられていた。クルウドは思わずレイラの料理スキルに感嘆する。

「これ全部母さんが作ったのかよ。よくあんな短い時間の間にこんなにも。」

クルウドたちがリビングに来るとレイラは一旦キッチンに戻りハーブといった香草を盛り付ける等の最後の一仕上げに取り掛かる。カノンやマヤカはテーブルに向かったが、クルウドはキッチンに寄ってレイラと会話をする。

技術の発展度合いが低いらしいこの世界において、現代日本ではあって当たり前とされているような冷蔵庫とか電子レンジといった白物家電が無い中でも、5、6皿の料理がそれぞれ大皿で盛られている。食事の材料はその日その日に買うのが一般的な生活スタイルであるこちらの世界では生鮮食品が欲しいのならまず買い物に出なくてはならない。しかも、買い物だけでなく調理しなくてはならないのだ。ものすごく効率的に

こなさないと間に合わなかっただろう。

「そうかしら。大通りでクルたちと別れた後も1時間ぐらい近所の皆さんと話し込んでいたから……、そうね、買い物に1時間ほど、料理で2時間弱ぐらいは掛かっちゃったわね。いつもよりは時間が掛かるけどカノンの歓迎パーティーをするのだから当然よ」
「大通りで別れてからもう4時間も経っていたのか。契約の儀式は想定よりも長いこと掛かったんだな」

時間は意外と早く経つものだ。クルウドとしては契約の儀式前の近所の人たちによる婚約の祝福から今現在までこんなにも時間が過ぎているものとは思ってもみなかった。せいぜい2時間ぐらいだろうと思っていたほどだ。

「カノン、そこをどきなさいよ。私がクルウドの隣に座ります」
「嫌。マヤカはポツンと置かれたあの椅子にどうぞ」

レイラと話しているとテーブルの方から大声が響いてくる。カノンやマヤカの声だったよなと考えつつ様子を見てみると、また2人はケンカをしている最中であった。どうやら座る位置を巡ってトラブルになっている。こういうところは2人とも年相応だよなとクルウドは感じながら仲裁に向かう。

その2人のケンカの原因というもの、長細いダイニングテーブルの周りには5つの椅

子が置かれており、長い2辺にそれぞれ椅子が2つと短い方の1辺に残りの椅子が1つ、つまり椅子がコの字になるように置かれていたことにある。

既に母さんと父さんはおしどり夫婦らしく仲良く隣り合わせになるように着席することになっていらいしい。よって残りの席は長辺の2席と短辺にある1人席となるのだが、カノンもマヤカも短い辺にある余りの1つの椅子に座ることはすなわち、クルウドの真横に座れないとの理由で嫌がってケンカになったのだ。

「2人ともケンカせずともこの椅子を動かせばいいだけだろ。ほら見てみる、母さんも父さんも困惑しているぞ」

そんなことでと気抜けしながらもクルウドは短い辺にある1人席の椅子を動かして3人が同時に横に並んで座れるように手配する。3人が横に並んだことで少々狭く感じるものの、これでケンカも収まったので気には留めない。子供たちの様子を困惑気味に見ていた大人たちのうちレイラは席の取り合いをするなんて可愛らしいと微笑んでいる。また、シーハは自分の子供にも関わらずクルウドのことを複数の女子に好かれるなんて男の敵だとか思っていたりする。

「それではそろそろ晩ご飯を頂こうか。そうだな、皆飲み物はどうする？ お水でもいいけど今日は歓迎パーティーなんだしジュースにでもするか」

「シーハさん、気を遣わなくてもお水で十分ですよ。ジュースとは合わなそうなので」

「なあに、子供が気を遣う必要はないんだ。たまには豪華にいこうぜ。」

マヤカはあくまでお邪魔させてもらっている身ですからとやんわり遠慮する。しかし、そのような配慮は無用だと言わんばかりにシーハは椅子から立ち上がると軽い足取りでキッチンに行き柵からジュースを取り出す。そして別の柵に向かうと犯人が様子を窺うかのようにシーハはこっそりとボトルを手に取った。

シーハはクルウドたちとは対面して座っているレイラの視界には写らないようにと実に塩梅な角度を保ちながら自身の身体に隠れるように左手でボトルを持っている。ただ、レイラには何としてみ見られないようにワインのボトルを持っているため、子供たち側から確認されるとバレバレであったりする。

「シーハさんがお酒を飲みたいだけなのでしょう。もう、酔っぱらわない程度にしてくださいよ」

「——何故分かったんだ。ワインのボトルはうまく隠していたのに」

こうしてジュースとワインのボトルを手にしたシーハがまず第一関門は突破したことにほっとしながら座ろうとした時、レイラはその心を揺さぶる一言を述べる。子供たちだけではなくレイラにもうまく隠すどころか見え見えだったらしい。

「はあく。シーハさんジュースを取りに行つた後どこに行きましたか。そう、お酒が保管してある別の柵に行つてその柵を開けていましたよね。そして、ジュースをテーブル

「持ってきた時の左手が不自然でしたよ」

「毎回あなのよ。シーハさん本人は隠しているつもりなのでしようけどあからさまに不審な行動をするもの。その度に看破されるのに懲りないのよね」

「こども見透かされシーハは降参したかのようにがっくりする。レイラの発言から考えるに似たようなことが起きたのは一度や二度の事ではないとのこと。」

「話したいことがあるんだ。ご飯を目の前にして待たせるのは申し訳ないけど聞いてほしい」

「どうしたんだクルウド。顔がこわばっているぞ。気楽に話してごらん」

「シーハによるつまらない茶番もやつと終わったのでクルウドは秘密を明かすという本題に入ることにする。」

『先に私から話すよ。ねえ兄ちゃんいいよね』

『カノンが先に話しても構わないよ。精霊の話は母さん以外には詳しく説明していませんかったもんな』

『詳しくは言っていないね。でも皆なんだかんだで精霊とは知られているから』

「念話が飛んできてカノンが先に明かしてもいいかと聞いてくる。クルウド自身は秘密を明かす順番にこだわりは無い。カノンに合わせることにする。」

「まず私からね。私は人間ではなく精霊です。私は枕の精霊カノン・ベディ・エピローヴ

といいます。レイラさんには既に言っただけで、ライバルであるマヤカにも知ってもらおうと思っただけだったのでいい機会かなあと」

「ええ、聞いていた通りだわ」

「精霊って本当にいるんだ……」

「……………、カノンが精霊だっけ!? こんな愛くるしい見た目なのに……………。……………精霊族がねえ……………」

このように三者三様に反応が分かれる。レイラは予め聞いていたので遠い昔を思い返すようにうなずく。マヤカは若さ故の知識不足からなのか精霊が存在していることに純粹に衝撃を受けたようだ。シーハは見た目からは全く想像できないらしくカノンが精霊であることがどうも信じられないようだ。

「はい。私は精霊ですよ。これからもよろしくお願ひします」

カノンは何事もなかったかのように再び精霊だと言ひ表す。

「……………えつ、カノンは人間じゃないんだよな……………。そうか、最近のアンドロイドは本物だと錯覚するほどに人間らしい振る舞いをするということか」

「シーハさん、そういうところですよ。カノンが今にも泣きそうになっているじゃないですか。カノン。シーハさんが単に馬鹿なだけだから、ごめんなさいね」

明らかにふざける場面ではないのにも関わらずシーハは今までの調子を崩すことな

く冗談を言う。シーハ以外の4人のこの時の心情を表すと「こいつ、いい加減にしろよ。ふざけるのも大概にしろ」とかだったりする。隠そうかと悩んでいた秘密を明かしたのに軽薄な態度を取られたカノンにはクルウドのもとに行くと言いき出そうになる。

「ねえレイラさん、馬鹿つて言い方はないでしょ。言い方がきついつて」

「いじわるをして自分の子供を泣かせる親が馬鹿ではないと言うんですか。シーハさん、頭を冷やしてきたらどうです?」

シーハにあまり反省の色を感じられない中で、クルウドはレイラの口調の変化を感じ取っていた。これはレイラのように普段温厚な人が怒る時の合図だ。温厚な人は滅多に怒ることはない。しかし、そういう人こそ怒った時が恐かったりするものだ。

「私だったら最低一カ月は口を利かないですね。しかもカノンとシーハさんは今日初めて会ったんですよ。初日からいじめるなんて……、これから一生仲良くしてくれないかも」

今にも泣きそうになっているカノンが可哀そうだと思ったのか他人の家の子であるはずのママカでさえシーハの言動を咎める。

「カノンごめんな。出来心でいたずらしてみようと思っただけでいじめてはいないよな……、なあ。……うん、そうだ冗談だよ、冗談。つい酔っぱらって言っちゃったんだよ。カノン許してくれ」

マヤカが発した一カ月は口を利かないという文言はカノンを娘として仲良くしたいと願うシーハにとつて重い一撃になった。シーハとしてはカノンとの距離を近づけるためのジョークであつたのだが、泣かれてしまつては謝るしかない。しかし、シーハは2つの過ちを犯していた。一つ目は酔っぱらつて言つてしまつたと嘘を付いたこと。そして2つ目はいつも優しく多少の事では動じないレイラが本気で怒ることはないと思つていたことだ。

「ボトルを開けすらもしていないのにどうやったら酔っぱらうんだよ。まさかこんな父さんだつたとは……。うん呆れた」

クルウドは呆れてついツツコんでしまつた。そもそもワインを飲む時間もなかつたのに酔うわけがない。ここまできるといくら何でも言い訳がましい。

「もうシーハさんいい加減にしてください！ 青色に青色を塗り重ねたつて青色のままのように？ に嘘を重ねたつて嘘には変わらないんですよ。罰としてシーハさんだけ食事の後の甘味は没収します。今日からしばらくの間はなしですからね。ほんと酒を少し飲んだだけでもすぐ顔を真っ赤にする人が真っ青な顔でよくそんなことが言えるわ」

クルウドがツツコむのとほぼ同時に、ついにレイラが嘘を付きまくるシーハに対して怒る。その形相は恐ろしく、いわゆるマジギレをしているようだ。シーハも怖気付いたのか何も喋らなくなり仏像のように固まっている。

「んん、あのさ……、なんか大荒れになつていけるけどまだ俺の話は終わつていないから話をしてもいいかな」

クルウドとしてもこんな気まずい状況では言いたくはないのだが、家への帰り道までには既に転生初日に言おうと内心では決めていたことを変える気はなく、もし拒否されても押し通すつもりでいた。

「クルウドも話があつたんだよね。……どんな内容でも受け入れるつもりだけど、私はクルウドとの結婚を諦めてなんていないから」

マヤカはクルウドがカノンとの結婚の許可を得ようとしてしていると盛大に勘違いした。それを受けてクルウドは婚約だつて半ば強引に決められたんだよなあと苦笑しつつ今日の昼の出来事を思い起こす。

『うう、ぐすつ……。兄ちゃん言い忘れていたんだけど、私が兄ちゃんを転生させたことは伏せておいて。バレるとこればかりは厄介になるからお願ひね。ぐすつ』

カノンがどうしても自分が転生させたことは話さないでと懇願する。クルウドもこれぐらいなら誤魔化そうだと思ひ、上手いこと誤魔化すための筋書きを再構築し始める。

『……ああ、分かつた。しゃべらないように上手くまとめておくわ。ところでさ、念話する時さえも演技をしなくつたつていいだろ。それより父さんの顔見てみるよ。母さん

にこつぴどく、られて顔面蒼白だぞ』

『私ってそんなに演技下手なのかなあ。兄ちゃんに見破られるなんて』

『涙を流していないからそうなのかなあって思っただけだよ。服も濡れていなかったし。じゃあ俺も話すと思いますか』

クルウドはカノンも自身の秘密を話したのだから俺も話さなければと理由を付けて気合を入れると、気持ちがりすぎないようにと淡々と話し始めた。

「実を言うと、俺はこの世界に転生してきてクルウドとして今ここにいます。ここで生きることにします。信じるのが難しいのは重々承知だけど皆には信じてほしい。この世界で生きる手伝いをしてほしい……と思っているんだ。受け入れてもらえたら嬉しいのだけど……」

クルウドは言っている時もなお少しためらいを残していた。この人たちなら多分今の自分を受け入れてくれるのは分かっている。それでもためらいの気持ちがあつたのは自分が本当にこの世界で生きていく覚悟が足りず、心の中では後ずさりしてしまう弱さかどこかからともなく主張してくるのだ。初めは淡々と話すことが出来たのに、次第にクルウドは不安に苛まれながらも最後まで自身の思いを告げた。

「クルは転生してきたのね。確かに信じられないことではあるけどクルはクルなのだから家族には変わりないよ」

「転生？ クルウドが転生したってレイラさんということですか。生まれ変わりって
って？」

「転生しただと。ファンタジーとしてそういうのがあるってことは知っているが……。
いいやあり得ない。お前、頭がおかしくなったんじゃないのか」

「その一世一代の告白に対しての皆の感想はカノンの時と同じように反応は三者三様に別れたのだった。」

詰めに詰められた転生初日

「今度は自分の子供に対して頭がおかしいと言うのですか。シーハさん、次の罰は1カ月食事抜きと断食とかでどうですか？」

正直に告白したクルウドに対して頭がおかしくなったのかと言うシーハ。また自分たちの子供を馬鹿にされたことでまだ腹の虫が治まらないのかレイラは1カ月無飲食生活というトンでもないことをシーハに提案する。先程憤怒したレイラから責を受けて青ざめていたシーハがそのせいで更に色を失う。

「……いやいや1カ月も飲み食いしなかつたら死んでしまうだろう。だけどさレイラさん、今回ばかりはどう考えたって普通の反応だろう。空想上のフィクションの話だつていうのならまだしも、実際に起こつたとなると……。事實は小説より奇なりとは言つたもんだが、誰が聞いたつてにわかには信じがたい話ではあるだろう」

転生した張本人であるクルウドでさえも他人が転生したと言つたらまずはその人を疑うことから始めるだろう。よつてシーハが物申すように今回ばかりは彼の態度はいたつて至極当然である。この場面においてはむしろレイラが異常なまでに平静すぎるのだ。

「まあ確かに一般の人々には信じてもらえないでしょうね。しかし、クルはあなたの、私たちの子供なんです。カノンの時もそうですけど自分たちの子供の言うことを親である私たちが信じてあげないでどうするんですか。クルもカノンも自身が置かれている境遇を十分理解した上で、昨日までは赤の他人だった私たちに話してくれているんですよ。ですからあり得ないと切り捨てるのではなくて、まずは受け入れて信じてあげましょう、シーハさん」

「……そこまでレイラさんが言うのなら。ああクルウド、分かったよ。俺もお前が転生したと信じてみるでしょう。ところで、レイラさんにとつても息子が転生したことが今までで一番衝撃的だったろう。昔のあれこれよりも勝るんじゃないのか」

レイラは先生が児童を諭すような口調でシーハやこの場に居合わせているマヤカに語り掛ける。今日一日のクルウドの様子を振り返ってみても、クルウドは各部屋の場所が分からずに右往左往していたり、転生を明かすまでは時々誤魔化す部分はあったものの、安易に嘘を付こうとはしなかった。このことからクルウドが前に居た世界でしっかり育てられたのだろうとつくづく実感する。

「そうだね。色々な経験をしてきた中でもこれは格別なことよね。自分の息子が転生することは普通考えられないもの」

「レイラさんは衝撃的だと口にするわりにはいたって冷静に見えるのですが。私はクル

ウドが転生したことさえよく分かっているのに……。もしかして初めから知っていたりしました？」

「マヤカと一緒に今初めて聞いたわ。ただ、クルが変わったなあとは思う節は所々あったからそこまで感情が顔に出ていないのかしらね」

シーハやマヤカよりは圧倒的に博識なレイラであつても転生するという例は古い書物で見たような記憶がうつすらと残っているだけで、実際に関しては今まで聞いたことが無い。そのためいくら冷静沈着であつてもこんなことが本当に起こるものなのかとキョトンとしたものだ。それでもポーカーフェイスであるレイラはその気持ちが顔に出ることなく平然としているように見えたようだ。

「まずクルが自分のことをいう時に一人称が僕ではなくて『俺』になつていたでしょ。他にも私のことを母さんと呼んでいたし、大通りで近所の人たちに婚約の祝福をしてもらった時もクルは凄く煩わしそうな顔をしていたのよ。目立ちたがり屋さんだったはずなのに。まだまだあるわよ……」

こうも挙げられてみると言動が違ふどころか外見以外は全く別人のさまであったのに街の人たちからよく怪しまれなかつたものだなとクルウドは苦笑いを浮かべる。話さなくても筒抜けだったのなら早めに話しておいて正解だったようだ。

「そう言われてみると納得だな。クルウドが俺のことを父さんと呼んでいたのも転生

してきたからなのか。うう、ちよつと大人になったんだなと父さんは心の中で感動していたのに。クルウド、涙を返せい」

「父さんが勝手に思い込んだだけで涙を返せとか無茶苦茶すぎるだろ。しかも、心の中でしか感動していなかったのだから涙は流してはいなくせに。しかし、転生したという事実を述べただけでよくもそう話が続くね。大抵転生したって言ったら転生前はどんな世界で暮らしていたとか、詳細とかに関心が向かない？」

「事あるごとくに感動する、それが子育てでありまた親心つてもものなのよ。それに転生前の生活などは簡単に聞いていいような話ではないと思うの。だからクルが話す気であるなら話せばいいし、話したくなければ話す必要はないのよ」

レイラが無理に話すことはないと言ったが、クルウドは既に決めていた。転生した事実だけを突き付けるのでは説得力に欠ける。事細かに話すことで完全に信じてもらいたいのだ。

「いや、もう話すつて決めてるんだ。さつきから俺を拒むことなく耳を傾けてくれたことがとても嬉しかった。例えば家族であつても容赦なく切り捨てるなんてどの世界でもありふれた現実だからさ……。俺はここで生きる。俺は転生して今ここに居るから」

転生前の名前は鏑木深生であつたこと。日本という国に住む一般的な高校生であつ

たこと。日本には魔法がない代わりに絶大なほどに技術が発展しているということ。パンよりは断然米派であることなど、クルウドは住んでいた世界のことから自分に関わる情報まで挙げればきりがなくぐらいに転生前のことを、そして転生した自分のことを近い仲間であるカノンやマヤカ、自身の親となるレイラやシーハたちにより深く知ってもらうために時には丁寧な、また時にはかみ砕いた表現を使いながら話す。

「一応これで一通りぐらいは言ったはずだと思う。自己紹介はこんな感じにして何か聞きたいことはあるかな。早くご飯にしよう」

クルウドは大分伝え終わったところで話を切る。話の所々で質問や疑問が出てきたのでそれについて答えてながら話をしていくうちに眠気の限界が近づきつつあったからだ。女性陣3人衆はそのことに気づいて質問をすることなく再び晩ご飯の支度を始める。しかしシーハだけはお構いなしにと質問を続ける。

「クルウドは前の世界では17歳で誕生日を迎えたばかりだったんだよな。じゃあ実質21歳、いやもう22歳ってことか。祝わないとな」

「シーハさん落ち着いてくださいな。クルウドは前の世界で生きた分の17年が実質の年齢ですよ。子育てなのに全く手が掛からないだろうなあ」

クルウドの精神年齢がすでに大人であり、子育ての苦勞をもう味わえないことに気づきレイラは肩を落とす。どうやらレイラは困難な難題にぶち当たるほどやりがいを感じ

じて燃えるタイプのようだ。

「……うん？ こちらの世界での俺の年齢っていくつなの。こういう自分のことでも知らないことも多いんだよ。」

現代日本での年齢が17歳であることは間違いない。ならば、合わせると22歳になるということは現在クルウドは4、5歳のはずだ。どうもカノンから聞いていたのとは異なっている。

「クルは5月生まれの4歳よ。今は12月だからあと5カ月もすれば5歳のお祝いをしなきゃね」

「カノンから聞いた話だと3歳だったんだけど。どっちが正しいんだ？」

「兄ちゃんごめん。私が間違えていたんだと思う。精霊はその人がどんな人なのかある程度捉えることが出来るんだけど、どうしても精度が低くなるんだよね。だから兄ちゃんも私も4歳ってことで一緒になるね」

「2人とも、私も4歳なんだからね。クルウドはともかくカノンもこれからは幼馴染にしておく」

どうやらクルウドの年齢は3歳ではなく4歳のようであり、またカノンやマヤカの年齢も4歳だということも判明する。カノンとマヤカは義妹と幼馴染で関係は異なるといい、同学年であることにクルウドは少し運命を感じずにはいられないのだった。

「そういえばカノンはクルウドが転生したことを知っていたの？ さつきからクルウドの言葉に対して全然動揺していないよね」

「ああ、うん。……私は兄ちゃんと会って早々に教えてもらっていたの。私は兄ちゃんの契約精霊だからね。契約する前に私が精霊だと伝えたら兄ちゃんも教えてくれたんだ。そういうわけで互いに秘密の共有することになっちゃって。……まさか兄ちゃんも転生という大いなる秘密を持っていたとは思ひもしなかったよね。精霊よりも転生の方があり得なさ過ぎて……。私も聞いたときは驚愕したよ」

「カノンには契約するときに伝えておいた。——母さんもマヤカも、……あとは父さんも聞いてくれてありがとう。手短に簡潔に伝えるつもりだったのに長くなっちゃって。料理もすっかり冷めてしまったし。作ってくれたのに母さんごめん」

実際のところ、カノンが日本人であった鏑木深生をクルウドとして転生させたのだから知らないはずがない。でも、カノンも転生させるのに成功させた時には嬉し涙を流していた。嬉し涙が出るほどに驚愕したことにでもしておこうか。

「料理はまた温めなおせばいいのよ。高暖石を使ってパツパツと温めましょうか」

「高暖石って何？ この世界には魔法だけでなく魔石まで存在しているの？」

魔法のみならず魔石のようなものまであるとはやはりファンタジーの世界のようである。庶民の生活にまで魔石が浸透しているのもこの世界では当たり前のだろうと

クルウドは認識する。現代日本での常識がそのまま通用する世界ではない。

「そっかあ、転生したからクルウドは知らないんだよね。高暖石は魔結石まけつせきの一種でね、使うところの石が熱い程に温かくなるんだ。料理とかで使うと便利だよ」

高暖石とはこの世界では日常的に使用される鉱石類の一つであり、見た目は少し赤みを帯びた石のことである。高暖石の純度に応じて石が発する最大の温度が決まっており、純度の高さによって石に刻まれた（ように見える）線の数が多くなるのが特徴だ。低純度のものだと最大温度がおよそ60度ほどであり、高暖石の発した最高温度はこの世界で今まで確認されたもので2500度前後にもなるという。それでも決して高暖石自体が燃焼するわけではないのだが、石の周りには熱が生まれているため中々高純度の高暖石に直接接触すると想像した通りやけどする危険がある。

「この世界には魔法があるんでしょ？ それなら石を使わずとも魔法で火を出して温めることはできないの？」

「高暖石を使わずとも簡単な火属性の魔法を使えば火は出せるわ。それに高暖石を子供が誤って使うと怪我をしてしまうから危険ではある。それでも高暖石は魔法に比べるとすぐに暖かくなるの。あと一番の理由としては魔法が使える人はそんなに多くないからなの。正確に言い直すと、決して魔法が使えないんじゃないやなくてほとんどの人は魔法の一つ二つは使えるわ。ただ、使える魔法の中で火属性の魔法を持っていない人や使え

たとしてもお湯を沸騰できないほどの小さな火を出すのがやつとの人も多少なりともいるのよ。だから高暖石には需要があるし、皆こぞって高暖石を使うの」

この世界の人間族のうちの9割以上の人々は何らかの魔法を行使することが出来る。ただ、あくまで魔法が行使できるだけということであって、決して普段の生活に役立てられるほど実用的な魔法を使える人はそこまでいない。高暖石を使う方が遥かにコスパがいいのだ。

こうして高暖石を使つて温め直した料理を5人で頂く。そこには先程まで秘密を明かしたことで戸惑いが生まれたとは思えないほどに和気あいあいと食事を楽しんでいゝる姿があつた。そして、クルウドは罪悪感を感じながらも素早く食べると「寝る」と一言だけ残して部屋に戻る。最後は眠気に誘われてクルウドは濃密な出来事が満載だった転生初日を終え、転生2日目を迎えようとする。

この時疲労が溜まっており深い眠りに付いていたクルウドは気づくことはなかったが、リビングでは女性陣3人衆による談合が行なわれていたのだつた。

青く深く、枕の精霊は枕に戻る

クルウドが自身の家族と幼馴染のマヤカに対して、自分は転生してきて今ここに居んだと打ち明けた日の翌日の朝。クルウドは色々慣れないことが重なったことで疲れているだろうから休ませてあげようとの女性陣3人衆のご意向のおかげで、朝早くから起こされることもなく日が昇ってから数時間後まで眠ることができた。

もうそろそろ起きないとは思いつつもまだ外も寒い。まだしばらくは暖かい布団の中でのんびり過ごすことに決めたクルウド。二度寝すべきかと考えるもふと目に付いた本でも読もうかと一瞬だけベッドから離れて本を手にとると急いで布団の中に戻る。案の定今は12月であるので部屋の中でも寒かった。

「クル。カノンを見なかった？ マヤカが起きてきたときには部屋にはいなかったらしいの。私も見ていないのよね。どこ行ったのかしら」

レイラはどうやら部屋から聞こえる物音でクルウドが起きたことを理解したのだろう。クルウドにカノンが見当たらないことを伝える。

「カノンがいなくなった？ 転生初日である昨日でも俺のことを好き好きアピールして自分から離れようとはしなかったカノンが？ ……俺が想像できる以上のことが起き

ているのかもしれない)

『カノン、どこにいるんだ。何も言わずに出掛けたらみんな心配するだろ』

とりあえずクルウドは最初の手段として念話を飛ばす。離れていても電話のように連絡が取れる念話ならどこにいても出てくれるだろうと思つたからだ。昨日何度か使つた時には何事もなく繋がつたし念話が使えるのは既に証明済みである。しかし、念話を飛ばしてみるも、カノンからの返事が一向に来ない。

念話を通じないのなら直接歩いて探すしかない。クルウドは太陽が昇つてから時間が経っているにも関わらず外も中もまだ寒いので正直布団から出たくはなかった。ただ一方で誰にも行き先を教えずいなくなつたカノンの行方も気にもなつたので再び潜り込むことがないように布団を思いつ切り蹴つて起き上がる。

「うわつ、何するの兄ちゃん!? 布団を取り上げるなんてひどい。うう、寒いよおー」

「うおつ、びっくりした! 急に話し掛けるなよ。……あれ、この声はカノンの声だつたはずだよな。——でも声だけで姿が見えないんだけど、何処にいるんだよ。これつて念話か飛んできているのか?」

クルウドが勢いよく起き上がつてみると聞こえてくるのは寒いと嘆く少女の声だけ。声の主はカノンであるはずとクルウドは部屋の中をくまなく探すもトレードマークの青い髪や眼はもちろんのこと肝心の姿が見えない。

「違うよ。ほらここに居るでしょ。ねっ、ほらここだよ、ここ」

「録音の類いかそれとも監視の類いかは分からないが早く出てくるか居場所を教えてくださいよ。母さんもマヤカも心配しているんだぞ」

初めのうちは真剣に探していたクルウドは徐々にいたずらではないかと疑い始める。既に扉が付いている棚も押し入れも繰り返し何度も確認した。それでも見つからなかったので、クルウドはうんざりする。

「そこに枕があるでしょ。布団の中にある枕の方が私」

「布団の中に枕？ でも寝た時に使った枕はここにあるしな……。あれ……。何故に二つ目の枕があるんだ？ しかも寝た時には無かったはずの枕だし……。あつ、これってもしやカノンの枕状態バージョンか、成る程」

「うん、そういうこと。つてことで兄ちゃん、布団返して、寒い」

クルウドはベッドに腰を掛けると布団の中にあつた方の枕を手に取り近くで確認する。その枕の色は青空を凌駕するほど蒼穹に染められており、枕らしくとても軽い。カノンの枕状態バージョンは正面から見ると縦30cm、横も30cmほどだろうか、座布団として使っても悪くない大きさである。あくまでも枕としては普通の大きさではある。しかし、人間状態の少女姿の時と比べるとどうしても小さく感じてしまう。

「そういえば昨日、枕の状態でいるとか言っていたけど枕状態のカノンはこんな感じな

んだな。で、いつこっちの部屋に来たんだよ。マヤカと寝ていたんじやなかったのか」

「夜中トイレに行った時にこっそりと来た。寒かったんだもん」

「カノンにも布団やベッドが用意されていただろうに。」

「……兄ちゃんと一緒に居たかったから。それだけじゃ……だめ……？」

「……そうかい、分かった分かった。ひとまずカノンを見つけたし、母さんたちに報告しに行くぞ」

クルウドに涙目を浮かべながらじーつとクルウドを見つめる枕状態のカノン。いつの間にかクルウドの膝の上に座っていた。明らかに懇望されていることを悟ったクルウドは一度溜めたあと少し目をそらして答える。契約した効果だろうか、枕状態でもカノンの気持ちが変わった気がした。

「待つてよ。私はまだ枕状態のままなんだけど……」

「……昨日打ち明けたんだし別に気にすることもないだろ。また探しに行かせて徒労させる訳にもいかないし」

クルウドはヒョイと枕状態であるカノンをお姫様抱っこするように持つ。クルウドとしてはこの枕がカノンである以上つまむように持つのも失礼だよなと抱えたのだが、前触れもなくお姫様抱っこされたことにカノンは機嫌をよくするのだった。

「母さん。カノン居たよ」

「私もレイラさんもあれだけ探したっていうのに……、で、カノンはどこに居たの？」

カノンを探しに外に出ていたら呼び戻さないとと思っていたクルウドだったが幸いレイラとマヤカは家の中に居た。特にマヤカの方はカノンのことが心配だったのかクルウドの元に駆け寄ってくるほどだった。

「ほらよ。普通に隠れていやがった」

手に持っていたカノン（枕状態バージョン）を見せると、母さんはそういうことかと合点がいったようで朝食の準備に取り掛かり始める。しかし、枕状態のカノンを見せたところですぐにそれがカノンだと気づく人はそうそういない。マヤカもその一人だ。

「それってただの枕じゃない。クルウドもずっと寝ぼけていないでちゃんと探したらどうなの。」

一方でマヤカはというと怪訝の表情を浮かべつつも、自分がふざけていると思ったのか怒る。マヤカはしばらくの間ずっとカノンを探していたようなので、青い枕を目の前に出されてこれをカノンだと言うのなら普通だったら怒って当然だ。

「兄ちゃんの間違ってはいないよ。一応私のことを探していたもん。それにマヤカも私が何の精霊かっていうのは知っているでしょ」

「えっ、カノンはどこなの」

誤解を解くためにマヤカにどう説明しようかと悩んでいたところ、カノンが助け舟を出してくれる。しかし、枕状態のカノンの姿を知らないマヤカにとっては、正にカノンの声は聞こえど姿は見えず、という状況であり当惑する。

「だから目の前に居るでしょ。まず私の質問に答えた」

「カノンは確か枕の精霊だったでしょ。ん、……………その枕つてもしかしてカノン？」

マヤカにも昨日の夜に自分たちのことは話していたのでマヤカは迷いなくすらすらと答える。この枕の正体に思い当たる節が出てきたようで枕状態のカノンに顔を近づけ観察すると、不思議がる素振りを見せつつもカノンの名前を出す。

「そうだよ！ マヤカとは昨日あれだけ話し合ったから仲良くなったと思っていたのに。気づいてよ」

「……………うん、ごめん。クルウド、これは流石に……………気づかないよね？」

「そんなの気づかないだろ。……………現に俺もすぐには分からなかった。似ている要素なんて、カノンが人間状態の時の髪や眼の色が枕の色と同じく青いことぐらいしかないんだからさ」

クルウドの顔を見て同情を誘うマヤカ。マヤカはクルウドならカノンの機嫌を直せるかもと期待してクルウドをわざと巻き込む。マヤカも初めはレイラを仲間にしようと考えたが、レイラはすぐに青い枕がカノンだと判別したためにクルウドしか頼れな

かったのだ。クルウドもマヤカと同じくすぐには気が付けなかった同士、肩を持つことにする。あれで気付けと言われる方が無茶である。

「それでも兄ちゃんなら分かると思ったのに……。兄ちゃんだけは初見でも気づかないきや」

「カノンももう過ぎたことを責め立てても仕方ないのよ。まあクルもカノンはあなたの契約精霊であるんだからきちんと気づいてあげないと」

「……すまない。でも、もう枕状態のカノンも確認したし次からは間違えないから。許してくれ」

マヤカに加勢したはいいいのも、カノンだけでなくレイラにも契約者なのだから気づいてあげないとと白い目で見られてしまい気まずくなつて謝罪するクルウド。マヤカが「こればかりは気が付かなくてもしょうがないよ」と暖かい視線を向けてきたので謝る必要はあるのかと若干迷ったのだが、後味が悪くなるのを防ぐためにも正直に言ったのだ。

「それじゃあ揃ったことだから朝ご飯を食べて出発しよ〜」

「マヤカ、どこか行く予定でもあるのか？」

「マヤカと一緒にヤンセン食堂に朝ご飯を買いに行ったのよ。その時に会ったアビジャさんがクルとカノンも遊びにおいでと強く勧めてくるから連れて来るわってついつい

言っちゃった。ということで朝ご飯を食べたら行っちゃい

クルウドは当初近所の把握も兼ねて自宅のある北地区を中心にオツセラの街をぶらぶらと散策でもしようと考えていた。しかし、予定がすでに決まっていたのなら散策はまた今度にする方がいい。どこに行くのかと尋ねると行き先はマヤカの家でもあるヤンセン食堂とのことらしい。距離も近いのでさほど時間は掛からないだろう。

「アビジヤは私のお母さんのことね。お母さんはカノンのことが気になってるんだと思う。ああ、何にも心配することはないよ。精霊と転生の秘密は話してないから。紹介がてらに私の家においでよ。……、でも、カノンは現在枕状態なんだった。秘密の保持のためにもこの姿じゃ行けないよね」

マヤカは気を遣ってあらかじめ秘密を漏らしていないことを告げた。クルウドはきちんと口止めが守られていることに対して胸をなでおろす。これからもマヤカには秘密をばらされないように努めてもらいたい。

「人間状態を維持する分の魔力は回復したし、今からでも戻れるよ」

マヤカの言葉にカノンの現状を慮ることになるクルウドたち。このままの枕状態では外に出して紹介は到底できない。もう一度カノンが人間状態になってから出かける必要がある。考慮していなかったことに改めて考えを巡らそうとする。しかしどうやら、カノンはすぐ人間状態に戻ろうと思えば戻せるらしい。この場で人間状態に戻ろう

としたのだが、カノンに待ったが掛かる。

「カノン、自分の部屋で変身してきなさい。素っ裸にでもなったら困るでしょ」

「……そうだった。状態変化の時は服がなくなるんだった。……でもこの部屋にはレイラさんに兄ちゃん、マヤカしかいないからここで変えた方がすぐ朝ご飯も食べられるし楽じゃない？」

「いや、だめだからねカノン。クルウドは転生したとはいっても一応は男の子だからね。私と一緒に部屋に行くの」

「兄ちゃんとは婚約もしているし私は見られても——」

マヤカはカノンの言葉を遮るように枕状態のカノンを拾い上げると部屋に入る。普段から気の利く女性陣もこういう場面ではなかなか期待できないもので折角のチャンスも不発に終わった。今クルウドが感じていたものとは自身の不運さと換気のために窓から入ってくる冷たい風だけであった。

憧れは二つ名

カノンが人間状態に戻り、朝ご飯を食べ終えて、支度を済ましたクルウドとカノンとマヤカの3人は会話しながらヤンセン食堂に向かって歩いていく。

「ねえねえカノン、どうして枕状態に戻っていたの？ あれじゃあ探しても気が付かないよ〜」

「仕組みはよく分からないけど確か魔力がうんたらこうたらって言うていたよな」

素朴な疑問を口にするマヤカ。その声量は呟いているかのよう小さいことからマヤカも秘密がバレないようにと相当配慮していることがうかがえる。

「枕状態に戻ろうと思って戻ったんじゃないんだよね。ほら、昨日ニオラント・ミダで契約をしたあとに契約が成功しているかどうかを確認するために兄ちゃんの記憶を覗き見た時にさ、その2つのダブルパンチで私の魔力がこさぎ取られてしまつて……。魔力が枯渇したことで枕状態になつたんだと思う。ニオラント・ミダもそこそこ魔力の消費量が多いからね」

「記憶の鮮明化を選ばずとも念話とか視界共有とか他にもあつただろ」

カノンだつて記憶の鮮明化が魔力の消費が激しいことを知っているはずだ。そこま

です。でも俺の記憶に興味があるのだとクルウドは感じ取る。ただ同時に、カノンをしてでも強制的に状態変化を引き起こすほどに魔力を使用しなければならぬことに対して、クルウドは使いだころは考えものだと思えるのである。

「ニオラント・ミダって何？ 魔法の一種？」

「これはまだ説明していなかったっけ。ニオラント・ミダは契約魔法のことだよ。精霊と人間が契約するときを使う魔術のことで、滅多に使われない魔術なんだ。ニオラント・ミダを行使する際には契約する者の間で魔法陣の光る色が違うらしくて私たちの場合は青紫色だったよ。あれは綺麗だったなあ。ただ契約完了時に閃光が空に伸びるんだけど、私たちにとってはこの現象はとても不都合なんだよね。よほど僻地でない限りその閃光が見られてしまうから。しかも、王国レベルにもなると過去の膨大な資料もあることだし、もうすでに精霊と人間の間で契約が行われたことも察知されていて、おおよそ見当がついているかもしれない。そうなれば平穏な暮らしなんて夢のまた夢になっちゃう」

「カノン。ちよつとした騒ぎになっていたよ。何にも昨日の夜に入って間もなく、空に白い光が上がったと思うと眩しく光って消えたらしいとか。これって例の……契約魔法、ニオラント・ミダの影響だよね？」

「……うん多分そう。もう噂になりつつあるんだ……早いなあ。契約魔法の詳細を知ら

ない巷の人々は怪奇現象で事を済ませるだろうけど……、教養の高い王国の重鎮や関係者の目は欺けないだろうから……私たちがだつてということが明るみにされないように祈るしかないよね……」

契約した時に打ちあがった光が既に噂になつてゐることを聞いて、カノンは悲壮感を漂わせる。オッセラには高い建物がそう多くない上に現代日本とは違い、暗くなつた夜でも街にあまり光が溢れてかえつていないため、大分目立つたことには間違いない。

「……おいおい、困つたときの神頼みか。何か良い方法でもないものですかね」

カノンが祈るしかないと言ひ出すほどに事態は深刻さを極めてゐるらしい。ただ、神頼みを戯言だと切り捨てるクルウド。もしまずい事態ならば祈るのではなく考えるべきだとクルウドは思うからだ。そして、その時絶対カノンの力が必要になるだろう。

「それつてまずいつていう話だつたわよね。運が悪ければ国王様や近衛騎士らの前で尋問形式で事情を糺されるとか言つていたし」

「王都まで行つて詳しい事情を説明しなきゃいけなくなるだろうからかなり面倒ごとになると思う。もしそうなつた場合にはマヤカも私たちの契約のことについて知つてゐるから王都連行の巻き添えをくらうかもしれない。レイラさんもそうだけど、私のせいで皆を巻き込みたくない……、でも……」

「カノン、もう契約したのだから今更氣を揉んだつてどうしようもないだろ。俺たちが

契約を交わしたことを気づかれなければいだけだ。自信を持って堂々としていたらそう簡単に暴かれることもないはず。頼んだぞカノン、お前は我が相棒にして策士なんだからな」

しかしながらカノンは先程からのネガティブ思考を崩さない。あまりにもひどいので見ているこっちまで憂鬱になってしまふ。そこでこの空気を払拭しようとするクルウドはカノンのモチベーションを高めるためにも気にするなどと伝えるとともにカノンは俺の相棒だと言ってみる。献身意欲の高いカノンならばその言葉だけでも気持ちには上向くだろう。例え悪い方向に導いてもなるようになるだけだ。

「ねえ聞いたマヤカ、今兄ちゃん私が私のことを策士だと言ってくれた。つまり、兄ちゃんにとってなくてはならない存在ってことだよ。これでライバル争いも私のリードが大きくなったね」

「少し落ち込んでいたから慰めてあげようと思っていたのに、カノン変わり身が早くない？ ってこんな話をしている場合じゃなかった。ねえクルウド！ 恋のライバル争いに負けるわけにいかないの。私にも何かいい名称はない？ 私はカノンの策士に負けず劣らずの二つ名がいいな」

「……は？ 二つ名？ そんなもん無くて生活には支障をきたさないだろ」

思ってもみなかった展開にクルウドは目を点にする。あくまでもクルウドはカノン

を奮い起こそうと策士だと言ってみただけなのだが、カノンはあまりの喜びようを見せる。すっかり調子に乗ったようで恋のライバル争いも私が優勢だとマヤカを煽るカノン。それでマヤカの負けず嫌いに火が付いたようだ。

「じゃあクルウド君はなんでカノンだけには二つ名を付けたのかな？　クルウドを支える身である以上私も二つ名が欲しいのになあ……」

「それはカノンもさつき言っていたようにカノンが塞ぎ込もうとしていたから励まそうとしただけだつて。別に、カノンを差別化しようとしたわけじゃないからさ」

つれない態度を取るクルウドに対して二つ名を要求するマヤカ。その目は本気だ。

「本当に？　……でもやつぱり欲しいものは欲しいって言い続けるからね」

「子供じゃないんだからさ、駄々をこねなくても。……いや4歳はまだまだ子供なのか。うーん、俺としてはマヤカには凜としてもらいたいんだけどな」

二つ名なんて無くたって問題というスタンスを保っているクルウドの前でそれでも二つ名の取得を諦めきれないのかマヤカは強情を張る。普段は大人びているマヤカもこういう場面では年相応の態度を見せる。昔からマヤカが年相応の態度を取るのはクルウドがいる時だけだと相場が決まっている。しかし、転生2日目でそのことを存じて上げていないクルウドにとつてはマヤカが甘えん坊に見えているらしい。どうやらクルウドはマヤカに凜とした姉さん気質を求めたいようだ。

「兄ちゃん。マヤカにも二つ名を与えてあげればいいじゃん。私だってマヤカだってそもそも兄ちゃんにわがままを言ったところで何にも悪くないでしょ」

「……いやいや、そのわがままを受けることになる俺のことを考えろよ。っていうかカノン、マヤカとはライバルだったんじゃないのか？　なのにマヤカにも二つ名を与えたら優位性が消えてしまうだろ」

「兄ちゃんは大人なんだから私たちのわがままを聞く立場なの。……それにマヤカはライバルではあるのと同時に友達でもあるから。友達の肩を持つのは当たり前だもん」

ライバルの味方をするカノンに対して、それなら義理の兄妹である俺の肩は持たないのかよと思ってしまうクルウド。そんなクルウドを尻目にカノンとマヤカは2人ともクルウドにマヤカの二つ名を考えてもらおうと意気投合していた。この時期の友情はこうして育まれるのだ。

「そう言うのならカノンは二つ名の返上でもするってことで決着だな。これでカノンもマヤカも条件は同じになる」

「嫌だよ。私の二つ名は策士。策士カノン、語呂もいい響きだし気に入ったもん」

「カノンは取り下げる気はなしか……。となると二つ名だけど……。いい感じのものが思いつかないんだよな。ところでさ2人とも、見えたぞヤンセン食堂。こうして皆で仲良くおしゃべりしながら歩くときすぐ着くものだと思うっていても案外時間が掛かるもの

だよな」

そうこうしているうちに目的地に到着する一向。2人で楽しく話し込んでいるカノンとマヤカとは対照的にやけに時間が掛かったと感じるクルウド。実際、クルウドの家からヤンセン食堂までは大体十分少々でたどり着くはずなのだが、不思議なことに倍以上の時間が掛かっている。まあスマホや腕時計がないので本人たちにとっては確認するすべはないが。

「クルウド、こっちこっち。私たちはご飯を食べに来たお客さんではないから隣にある家の方の玄関から入るの。今度からも遊びに来るときはこっちの入り口から入ってね」
「……そうなのか。カノンと2人で来たら間違えるとこだったな」

クルウドはあれからというもののマヤカの二つ名についてわりかし真剣に熟考していたので特に何も考えることなく店舗の入り口に足が向かっていた。しかし、クルウドたちはヤンセン食堂に用事があるのではなく、マヤカの家遊びに行くのが目的である。一行は家の通用口があるという店舗の手前にある裏小路に入ってお邪魔することにする。

「料理屋らしくいい匂いがするよね。朝ご飯食べなければ良かったなあ」

「あの朝ご飯もほとんどうちの店の料理だよ。オッセラでは朝ご飯を買う人の割合が多いからね」

今は営業中のこともありヤンセン夫妻は揃って厨房にいるとのことなので廊下を通って厨房に向かう。もちろんマヤカの苗字はヤンセンである。マヤカの家とヤンセン食堂は中で繋がっているらしく、家と店を隔てている扉が閉まってもマヤカの家の中では美味しそうな料理の匂いを微かに感じるができる。

「ちょうどお父さんにお母さんも厨房にいるじゃん。 たっだいま」

「あら、マヤカおかえり。クルウド君もいらつしやい。そちらの子は……」

「ようクルウド。その子の名前はカノンだったはずだ。そうだろ？」

ヤンセン夫妻にとってみれば娘が仲良くしているクルウドはいつもの顔ではあるが、転生したクルウドにとっては初対面で名前も分かっていないのでとりあえず会釈することにした。ヤンセン夫妻がいい人そうなのは見た感じで想像が付く。シーハみたいななお調子者が知り合いの大半を占めていないことに改めて安心感を抱いたクルウド、及びカノンなのであった。

将来の夢

「初めまして。カノン・ベディ・エピローヴといいます。マヤカとは友達なのでこれからちよくちよく遊びに来ます」

「そうそう、カノンちゃんだったわ。ようこそヤンセン食堂へ。いつでも大歓迎よ。ほんつとレイラさんの話で聞いていたようにとつても可愛いらしい。水色寄りの青いサラサラした髪とか昔は憧れたものよ」

マヤカのお母さんであるアビジャがカノンの髪を気に入ったようで何度も撫でる。カノンはくすぐったそうにしつつも気持ちよさそうにアビジャの手に髪を預けている。マヤカに目で合図するとマヤカが人物紹介を始める。

「クルウド、カノン紹介するね。こつちがお父さんでアルギン、お母さんのアビジャ。奥にいる、あ、手を振ってくれているのはうちの店で働いているサンクルさんね。朝の間の忙しい時間帯にはトンブさんもいるんだけど今は時間的にもピークも過ぎたからいないね」

カノンだけでなく一見いつも通りのクルウドにも紹介すると言ったあたりマヤカの気遣いが垣間見える。それからというもののカノンがスープや料理に使うソースの味見

などして一通り紹介を終えたところで食堂を後にする。案内と言つても所詮食堂と、マヤカの家族と食堂の従業員であつたので大して時間は掛からない。

「私たちは家の方に戻つてゐるね。またお昼になったら店の方に来る」

「分かつたわ。もちろんカノンちゃんもお昼ご飯食べていくわよね」

「いいんですか。じゃあぜひ！」

お昼ご飯をご馳走になることとなり、一旦食堂を離れる。クルウドは自身の父親以外はいいい人揃いであることに巡り合う人の運は恵まれていることを実感する。

「あれ、もういいの？ 顔を見せただけでも」

「お父さんもお母さんもお店の営業があるからね。そろそろお昼でお客様が入り始める頃だから忙しくなる」

マヤカの部屋に上がらせてもらうクルウドとカノン。カノンが紹介がこれだけでよかつたのかと尋ねる。一方でクルウドはマヤカの二つ名について熟考していた。

「兄ちゃん、ずっと考え込んでいるようだけどマヤカの二つ名の件？」

「そうだよ。さつきから色々と考えていた中で候補は複数あるんだけど一番良さそうなのは軍師。……うん悪くないと思う。マヤカ、軍師っていうのはどうか？……？ 策士

と軍師つて似たような意味なんだけど、それはそれで似たところも多いカノンとマヤカの関係からしても合うと思うんだ。もし他のやつがいいのならまた考えることにする

けど……」

「軍師でいいよつ。私は今度から軍師マヤカと名乗らせてもらおうぞ、つてね」

軍師マヤカの響きが良かったのかクルウドが決めた二つ名なら何でも構わなかったのかは分からないが、マヤカは間髪を置くことなく自身の二つ名を決定する。

「それ人前で言ったら変な目で見られるだぞ。厨二とか言われるからやめとけよ」

「ちゆうに？ 何それ。クルウド、それはどんな意味なの？」

「……いや、知らないならそれでいいんだ……。知ったところで使う場面など無いだろうし」

「ふーん。よく分からないけど分かったことにしておく」

「厨二」という言葉を知らないマヤカが質問する。マヤカに対して積み上げていたイメージを崩さないためにも純粋なマヤカに「厨二」という言葉を覚えさせるわけにはいかないのだ。知らないならそれでいいとやんわりと断るクルウドであった。これがきっかけでマヤカが厨二病にでもなったら大いに悲しむ。

「クルウドは転生してこっちの世界に来たんでしょ。この世界でやってみたいこととかあったりするの？」

「あ、それ私も聞いてみたいな。兄ちゃんの将来の夢はまだ詳しく聞いていなかったなあ」

昨日の夜はクルウドが早く寝てしまい話し合えなかったので、情報の獲得のためにも互いのことを聞き合っていた。

その中で将来の夢の話になる。まず、料理の腕の向上を挙げたのはマヤカだ。次にカノンが兄ちゃんと楽しく一緒に居ることだと言う。それを聞いて昨日も言っていたよなあと思い起こすのはクルウド。改めてこの恋のライバルは強敵だなあと再認識したのはマヤカである。

「俺の夢か？ やってみたいことねえ……何だろ……。うーん……」

「どうしたの兄ちゃん？ 何でもいいんだって。ほら兄ちゃんは既に17年生きてきたんだから夢の一つ二つはあるでしょ」

最後にクルウドの番となるのだが、クルウドは自身の将来の夢を思い浮かべずにいた。いつまで経っても何も言わないのでカノンが心配する。

「……そうなんだけどな。17年も生きていてどうやっても自分の現実が分かってくるのさ。夢だつてそう、この夢を追いかけて頑張ってみたところで実現不可能だとか自分には無理なんだろうなあって」

「クルウドはその夢に対してどれぐらい頑張ったの？ 色々な夢や希望を持った中で本気で叶えようと思って努力した割合は？」

クルウドが諦めの言葉を口に出すにつれマヤカの表情が険しくなる。そして、真面目

な顔をしてクルウドに問う。どうやら夢を簡単に投げ出すことに怒っているようだ。

「いや……、夢を追いかけける前にばつさりと切り捨てるが多かったかな。大抵のものは時間の無駄だし、叶いつこないから」

「どうしてそんなことを言うの……。私の知っているクルウドは目立ちたがり屋で将来について語っているときには目を輝かせてかつこよかったんだよ」

「と言われても俺は転生前のクルウドについては全く知らないからなあ。性格や人格だつて思いつきり別人だし。それにここは転生前にいた現代日本とは生活とかもろろ大違いだ。場所が変われば叶えられる夢の数も変わってくるし……」

漠然とした夢を持つては努力をすることなくそうそうに諦めているクルウドに対して、マヤカは自分がよく知っていた深生が転生してくる前のクルウドの様子を今のクルウドと重ね懐かしむ。とは言っても転生後のクルウドやカノンは転生前のクルウドとは会ったことがないため反応がぎこちない。クルウドは困った顔を浮かべつつマヤカを見やる。

「それならまた一から夢を考え直せばいいだけのことじゃん。この世界は兄ちゃんが前に居た世界とは違うけど、その分向こうの世界では出来なかったこともできるからね」
例えばの話だが、コンピュータの無いこの世界でプログラマーとかの夢を持つていたとしても叶う見込みはないということだ。所変われば品変わるといったように世界

が違えば持つ夢も変わるはずである。

「確かにそうだな。うーん……。折角の異世界に来たのならやつぱり冒険とかしてみたいかな。転生前の世界だどこに行ってもあらかた踏み調べられていたし、衛星写真とかでどこでも確認できたから冒険家も多くなかったんだ。だけどこの世界にはファンタジー小説のように冒険者として生計を立てている人も多いようだし需要はあるんだろ」

「いいじゃん。じゃあ将来は皆で冒険しようよ。そのためにも頑張らなきゃね」

「冒険は危険だし、命を落とすことだってあるんだろ。そんなものに初めからカノンを巻き込む気もないし危険な目に合わせたくはないんだけど」

向こうの世界でできなかったことも出来ると言われて冒険してみたいと呟くクルウド。現代日本に居た時から転生といったら冒険、冒険⇨転生のイメージが頭に染みついている上に、この世界には魔人や獣人といった人間族とは違う種族が居ることが判明していたので漠然とした中でも旅にはいずれ出るつもりはあった。

「つまり、クルウドは一人で冒険する気なの？」

「ああ、そのつもりでいるけど」

マヤカの問いに対してクルウドは当たり前のことのように答える。このままいけば彼女たちに自分のわがままに付きあわせる必要はないというクルウドの考えは揺るぐ

はずはなかった。

「昨日私が兄ちゃん与会った時に何て言ったか覚えてる？ 私はいつでも兄ちゃんを支えるってきちんと言ったよ。冒険の時の料理とか洗濯の家事一般は私に任かせておいて。家事は得意分野だからね」

「家事が出来るってさり気なくアピールしていくなんて……、流石策士カノン。私もクルウドが旅に出るのなら一緒に付いていく。それはカノンだつて多分同じ。好きな人の近くにいないという選択肢は私たちの中にはないもの。ね、カノン」

カノンに同調を求めるマヤカ。似た者同士故に考えていることは同じらしく、遠距離恋愛という選択肢はカノンもマヤカも頭の中にはないようだ。

「当たり前じゃん。私は絶対兄ちゃんと一緒に居るって決めているもん。そもそも兄ちゃんは私の護衛があるのに離れ離れになれるわけないよね。遠すぎて守れなくなっちゃうもん」

カノンに指摘されてクルウドはどうしようかと悩む。クルウドの役割はカノンと一緒にいることになっている。いずれかは別れようと思っけていても、カノンが拒否することが手に取って分かるためクルウドの思考は徐々にカノンを連れていく方向に傾きつつあった。

「護衛は名目上だっただろ。それにマヤカの場合ヤンセン食堂はどうするんだ。今だつ

て繁盛しているのに継がなくてもいいのか？」

「元々うちの両親は2人ともオツセラ出身ではないの。お父さんも色々と各地を巡っていたらしいし、その道中に母さんと出会って身を固めようと移住してきてお店を開いたと言っていた。だから料理に関する知識の見聞を広げるためにも旅に出てみたい」

マヤカとしても冒険に出る積極的な理由を持っているようである。

「……それじゃあ冒険する時は3人で行くことにしますか。その時は一緒に」

「兄ちゃん、これは約束だからね。反故にしたらほんとに怒るからね」

「ええそうね。置いてきぼりは許さないから」

最終的には女性陣に言いまとめられてクルウドは渋々といった感じで約束を交わす。カノンとマヤカはハイタッチして喜びを示す。今朝から兆候は見えたものもその様子を見てたつた一日でそれほどまで仲良くなったことを知るクルウド。約束を結んだことで各人笑顔を浮かばせているのは気のせいであろうか……。

「あつ、でもその場合は兄ちゃんと私が婚約からそのままゴールインして結婚しているから、マヤカには悪いけど将来独身生活になっちゃうけどそれでいいなら皆で冒険がてら旅に出ようよ」

マヤカと2人で上機嫌だったカノンは何かを思い出したかのような素振りを見せると無意識に爆弾を落とす。

「……、カノンは何を言っているのかな？ 第一、何故私が負ける前提になつてゐるの？

クルウドとは私が結婚するのだから独り身はカノンの方だからね。悔しさのあまり冒険に行きたくないつて言つたとしても私はカノンのことは知らないよ」

不意を突かれて一瞬黙り込んだマヤカ。顔を上げると当然カノンに対して反論する。特に結婚の部分を強調しながら。この時のマヤカの目は笑つていなかったのは言うまでもない。

「……むうつ、マヤカも本気だね。だからこそ私だつて負けはしないもん」

「……ふっふっ。私こそ3年前も前からクルウド一筋なの。たとえクルウドが転生して変わったとしても気持ちは揺るぐことはない」

「まだ結婚なんて数十年先の未来のことなのに断定するなよ。つていうか、お互いに言い合つてゐることが酷すぎない？ それはいくらなんでも惨めすぎるだろ」

クルウドはこういうと2人の気持ちを静めることになつた。

カノン編エピソード1 日本から来た少年との関係

話はクルウドが転生した日の夜に戻る。クルウドが晩ご飯の直後に寝た後、次に翌日も仕事があるシーハが床に入った。

というわけでリビングにはカノン、マヤカ、そしてレイラの3人が残り、女子トークに花を咲かせている。

「カノンが本当に精霊だなんて。どこからどう見ても人間そのものなのに……。実物なんですよね」

「やめてよく、マヤカくすぐったい。今は魔力によって人間状態になっているんだよ。魔力が切れれば精霊の姿になるし。まあ精霊の姿といっても枕状態になるんだけどね」
「精霊族を見る機会はそうそうないからね。カノンが精霊だつてことをマヤカは信じられなかったって不思議なことじゃない。お偉い貴族でも精霊と話すことはできないだろうさ」

マヤカはカノンが本当に精霊なのかと触って確かめるも分からずじまいでいる。それもそのはず、カノンが人間状態の時は精霊でありながら姿は人間そっくりなのである。

「カノンは礼儀がすっかりしているし随分と人懐っこいから親しみやすいのよね。まるで精霊とは思えないぐらいに」

「精霊は親しみにくい種族なんですか？」

精霊についてあまり理解できていないマヤカがレイラに精霊のことを聞く。

「昔に人間族と精霊族が戦争をしていた話があるのよ。この世界の歴史として有名な事象なの。戦争直後は互いの印象は最悪だったらしくてね。それこそ人間と精霊の契約は500年以上も行われなかったのね」

「……でも、ファンタジーの小説では人間と精霊の契約した者同士は仲良く書かれていますよね。それはまるで戦争をしていたとは思えないほどにです」

「500年以上契約者は現れなかったのだけど、ある時ついにマラ・モロツカという人が精霊との契約に成功したの。それ以降は時々現れてきた契約者と契約精霊の活躍によつて人間族の間では精霊に対しての悪印象が薄れてきたのだけど……」

レイラは人間族と精霊族との関係を語り始める。昔の時代に人間族と精霊族は一度戦争になったことがある。それは100年も続いていたものだ。

「だけど、ですか？ その後に何か問題でも生まれたんですか？」

「新たに問題が起きたんじゃないくて、問題はずっと問題としてあったのよ。悪印象が解消されつつあったのはあくまで人間族側から見た精霊族に対してだけ。つまり、精霊族

から見た人間族の印象は悪いままで何も変わっていないなかったの」

「それじゃあ精霊は人間のことをよく思っていないということですか」

「私もカノンとは別の精霊には会ったことはないから確信は持てないのだけど、恐らくそのはずよ。歴代の契約者を書いた多くの書物には契約精霊は契約者以外とは友好的でなかったと記されているの。そして、その契約者の中には人間と精霊の戦争前の人もいるから」

「あまり人間とは親密では無かった上に、人間側と戦争が起きたとなると……。それなら悪印象であつてもおかしくないですね」

戦争以後、精霊族は人間族との関わりを閉ざす者も数多くいた。それでも中には人間と仲良くなり契約した者もあり、それが契約精霊だ。

その契約精霊も誰でも良くして契約をしたのではなく、人間側の契約者の実力を十分に認めた上で契約に至っている。どの契約者も全員実力を兼ね備えているのだ。

「私が思っているより、固定概念として考えられてきた感じとは違ってカノンが気さくなようだから意外な気がしたのよ」

「カノンは人間が嫌ではないの？ 私がクルウドとの関係者ではなかったらライバルとしてみなかつた？」

カノンはマヤカの言葉に首を縦に振る。マヤカがクルウドの知り合いでなければカ

ノンとマヤカがこのようにライバルになることはなかった。

「私はまだ4歳なんだよ。そんな歴史があったことは知ってはいたけど人間に対して嫌悪感が全く無いんだよね。今だって人間の格好をしているほどだよ。それに私は人間族に敵意は持っていないし仲良くしたいとも思うし。シーハさんみたいに意地悪する人や相性が悪い人とは距離を取るだろうけどね」

「カノンも年齢の割には知識が豊富だよ。クルウドは転生する前の人生がある分博識であることは分かるのだけど……。カノンって本当に私と同じ年齢なの？」

「——そうだよ。私は兄ちゃんやマヤカと同じく4歳。知識が豊富なのは……。私
は頭がいいから？ ……困らないためにも今こうしてここに来る前に色々勉強した
んだから」

「何、その謎の間は。あと何で疑問形になっているの……。……同じ年齢だというのは分かった。でも、クルウドの元に来るにしても、家族はよく了承したものよね。まだ幼い自分の娘を良い印象のない人間族の元に送るんだもの」

「……それは……。……私が無理を言って離れたの。もちろん反対されたけど。それでも……」

年齢故なのか人間に対して拒絶感を持ち合わせていないカノン。実に人間らしい振る舞いをしている。

しかし、マヤカの質問に対して説明していくうちに徐々に言葉に詰まるカノン。何か話せない事情があるらしい。

「マヤカもそこまでしておきましょう。マヤカ、私もカノンの過去に何があったのかは知らないわ。ただね、クルウドが秘密を話すときも同じことを言ったのだけど、その過去のことを話したくないのならカノンは無理して話すこともないのよ。根掘り葉掘り聞くつもりもないし口外するつもりもない。だって私はあなたの家族なのだからね」

「レイラさん分かりました。カノンごめんなさいね」

「マヤカが謝ることはないよ。ただ、私の過去に関してはあまり触れないでほしいかな」
レイラの言葉で下を向きつつあったカノンの心持ちや表情が元に戻る。カノンの過去については聞かぬが仏なのかもしれない。

「暗い雰囲気になっちゃったし話題を変えましょうか。何にしようかしらね……。クルンについての話にする?」

「いいですね」

レイラは場の空気を変えようと話題の転換をする。

「私ね、クルの髪色が黒なのはクルが転生してくるといふサインだったのかなと今になって思うの」

「クルウドの髪は黒でしたね。確かに黒い髪って珍しいですよ」

「ええ、生まれた時には既に黒い髪色だったわ。それを見てシーハさんは不吉だとか言っていたのよ。もちろん私は怒ったんだけどね。我が子に対して不吉というなんてほんと酷いよね」

「あの〜レイラさん、黒髪ってそんなに珍しいんですか？」

「うん、珍しいわね。少なくとも10,000人に1人もいないんじゃないの。茶色系とかはよく見るけど、クルミみたいに真っ黒な髪の人全然いないのよ」

「そうなんですか。そういえば、兄ちゃんは転生前も黒髪だったって言っていたよ」

「へえ、転生前も黒髪だったんだ。レイラさんが言ったように黒い髪はサインだったのかも知れませんね。クルウドは黒髪が似合うし」

現代日本とは違いこの世界では黒い髪の間人はあまりいない。黒髪は不吉とのイメージがあるため、クルウドは黒い髪という理由で見知らぬ人には時々避けられることがあったのだ。

「ところでさあ、やつぱり女子だけの時は恋バナでしょ。2人ともクルが好きなんだよね。晩ご飯の時も隣の席をめぐってケンカしていたようだし」

「私たちはライバルですよ。マヤカは恋のライバルです。兄ちゃんには私という婚約者がいるのにマヤカは諦めるどころか道端で大声で好きだと告白していたんですよ」

「——ちよつとカノン何言っているの!? あつそうだ、これをレイラさんに聞くためにクルウドの家に来たんでした! どうしてクルウドの婚約者にカノンを選んだんですか!? 私はいつもクルウドのそばに居たのに」

リビングでは女子の集まりらしく話題は好きな人の話に移っている。カノンの言葉で羞恥心と共に本来の目的を思い出したマヤカが身を乗り出して、今まさにレイラにかみかかろうかという勢いでレイラに質問する。手をテーブルについたときに大きな音がなったのだが、マヤカは気にすることなく迫る。

「カノンがいい子だったからクルと婚約してくればいいのにと言ったらカノンが二つ返事で婚約しますって言ってきたからオツケーしたのよ」

「私だつてクルウドと婚約したいですよ。レイラさん、カノンに言う前に私にも一言くれないと」

「ごめんごめん。でも、契約している者同士は普通一緒に居るものでしょ。婚約してもらつても問題ないかなつて」

「私にとつては大問題ですつ。将来私がクルウドと結婚しようと思つていたのに」
「今日初めて会つただけマヤカもこういう行動を見せるんだね」

マヤカの子供っぽい言動にそう呟くカノン。それを聞いてマヤカは我に返り一旦椅子に座り直す。

「他にもね、自分の子供同士だったら相手方の承諾は要らないのも理由の一つとしてあるわ」

「確かにそれはそうですけど……。でもっ、私のお母さんお父さんならクルウドとの婚約ぐらいあつさりと思ってくれます。親同士だつて日頃から仲良しなんですから」

「確かにお二人なら喜んでクルとの婚約話を受け入れそうね」

「ならカノンでなくて私で良かったじゃないですか！」

一回落ち着きを取り戻したマヤカだったが、この戦いは引けないとばかりにまたヒートアップする。

「落ち着いて落ち着いて。今のところ手続き上クルはカノンと婚約していることになっているけど、みんなが10歳を迎えて成人したら婚約は一時的に解消される決まりなのよ。そして、その時に婚約を破棄するか、あるいは成人後すぐに結婚するか、もしくはそのまま婚約状態を保持するかを選ぶことが出来るの。最終的に誰と結婚するかはクルが決めることだから、どの選択を取っても私は支持するつもりでいるわ」

10歳で成人を迎えるということはこの世界の共通した認識である。その中でもジベック王国は特異的で成人になると婚約が一度自動的に解消されるようになっていく。「……なるほど、そのような仕組みなんですわね。それならば、成人までのあと6年弱の間

に改めてクルウドの気を私に向けさせるのみです。いくらカノンがクルウドの義妹とはいえ私の方がよく知っているのは確かだからね」

「マヤカ、兄ちゃんは転生したからね性格とかガラツと変わっているんだよ。だから一から知るつもりでないと、兄ちゃんとすれ違いが起きるよ」

「口調だけでなくクルウドは中身全てが変わっているってことなの？」

「そういうこと。以前のクルウドのことはよく知らないから断言はできないけど、趣味嗜好が180度違っていてもおかしくはないかな」

「2人とも頑張らないとね」

「もちろん（ええ）」

カノンもマヤカも綺麗な返事をする。

「あらあら、私ったら余計に恋人争いに火を付けちゃったようだよ……。まあ私の息子ですし、クルルならカノンもマヤカもいい方向に導いてくれるでしょうけど……」

「……クルルにとっては少し重荷かしら。でも、物事は大体なるようになるものなのよね」
どうやらレイラの心配は過熱する恋の争いに気を向けている2人の耳には入っていないようだ。

カノン編エピソード2 一緒に居るための契約・機能

「カノン、質問したいことがあるのだけどいいかしら？」

「いいですよレイラさん。何の話ですか？」

「クルとカノンは契約しているでしょ。契約すると色々効果があることは知っているのだけど、人間と精霊の契約自体如何せん珍しいことですよ。具体的な内容は知らないから教えて欲しいのよ。これでも私も昔は冒険したことがあってね、契約に関して興味があるの」

今度はレイラがカノンに質問をする。その内容は人間と精霊の契約についてだ。カノンの母親となる以上レイラは契約の内容を理解すべきだと思ったのだ。それに対してカノンは気軽に了承をする。

「契約ですか。私も多少は知っているので分かる範囲でなら答えますよ」

「私も聞いてみたい。カノン、いいよね」

「いいよ。私としても契約の内容についてある程度は知っておいてもらえると今度から一々説明する手間が省けるし」

カノンが精霊であることはこの場にいるレイラもマヤカも知っているので妙に誤魔

化したり気を揉んだりする必要はない。カノンは気楽になりながら契約の機能の説明をし始める。

「理解しやすいところからだ、まずは念話ですね。この念話の機能は契約を基としたファンタジー小説とかにもよく出てくるからどんなものかは想像できると思います」
「声に出さずとも会話ができるという優れものだったはずだわ。聞かれたらまずい話やその状況の場合にピッタリなんでしょ」

「私も念話を使ってみたいけど、契約者は何百年のうちに一人しか現れない上にその枠には既にクルウドがいるとなると……私には一生縁のない話ですよ」

まず念話の機能のことから説明するカノン。まだ一つ目の説明であるのだが、いきなり便利な機能を例示されたことに、契約者であるクルウドやカノンとの違いを改めて痛感してマヤカは早々に肩を落とした。

「まあそうね。ジベック王国から遠く離れた大陸の南側には念話石という念話と似たような効果を持つ魔結石があるらしいのよ。あまりの稀少さ故にどの国でも国自体が管理しているとか……。……私たちでは王国に余程恩を売ることでもないと手に入れないいわね。これこそ縁のない話だったわ、忘れてちょうだい」

「……念話石ですか。魔結石にもそのような種類のものがあるんですね」

「ええ、そうらしいわ。実物を見たことはないのだけど、その念話石はとても綺麗な色を

していて光るとそれは神秘的つて聞いたの。私たちでもお目にかかる機会があればいいのものね」

念話石とは魔結石の一種であり生産量の多い高暖石等とは違って中々お目にかかれない代物である。見た感じはラピスラズリのように濃青色であり鋭く輝く魔結石だ。ただ、珍しさや非常時の連絡手段として重要だと位置付けられているため、その多くは国家の所有となっている。そのため多くの庶民は念話石があることすら知らないでいる。

「レイラさん、王国に関わらずして手に入れることはできないんですか？」

「念話石自体があまり存在していないし、採掘地でさえも厳重に守られているようだからね。もし王国のパイプ以外で手に入れられるとしたら、現地まで赴いて闇取引でも持ち込むしか……。カノン、欲しいからといってそんなことは絶対しちや駄目よ。あなた私の娘である以上犯罪まがいなことをするのは許さないからね。覚えておくの」

「レイラさん、私はそんなことはしなくてすつて。そもそも私には念話石が無くとも念話ができるんだよ。念話できるのに念話石は要らないもん」

「まあそうね。そんなことをするぐらいならカノンはクルと一緒に居たいはずのものね」

我が娘が悪事を働かないようにと牽制するレイラに対してカノンは心配はご無用とばかりに契約によって念話ができることを強調する。その強調を受けてマヤカは私は

特別じゃないんだと更に落ち込むのだが、そのことは2人は知らない。

「次に知識の共有だね。互いの持つている知識を共有することを可能にする機能です」
「これは聞いたことがあるわよ。昔見た本に載っていたの。『契約を交わす者、互いに見聞を広め、包み隠すこと無きように』と書かれていたはず。恐らくだけど知識の共有をすることで契約者が精霊族の世界のことを、契約精霊が人間族の世界のことを理解できるようにしたのだと思うわ」

「種族の違う者だからこそ互いをより深く知るために知識の共有をするってことです。か。そういうことなんだ。知らなかったなあ」

「カノンも知らなかったの？」

「うん、私は契約の内容の一部については知っているけどその背景までは調べていなかったんだ」

「昔の珍しい書物だったからね。カノンもその本を見る機会はなかったのね」

2番目にカノンは知識の共有という機能を挙げる。この機能の存在理由としては互いの理解を深めることにある。契約後も互いのことを知らずに過ごすことは契約した者としては問題であるらしい。

「3つ目に視界共有です。これだけは特別で私は兄ちゃんの視界を確認できるんだけど、兄ちゃんからは私の視界は見られないんだ。どうも精霊特有の機能らしいね」

「クルウドが何を見ているか分かるってこと?」

「そうだよ。ただこの機能は許可制でね、視界共有するかどうかの権限が兄ちゃんあるから兄ちゃんが視界共有を停止したら私が見ようとしても見られないんだよね」

「普通は許可しなきゃならんんじゃないの。もし停止したことがバレたらカノンが怪しむってことぐらいクルウドも分かっているだろうし」

「転生前にある程度生きていたのだからクルも馬鹿な真似はしないとわ。私としても視界共有の機能は初めて聞いたわ。精霊しか使えない機能である分あまり伝えられていないのかしらね」

クルウドは昼にこの機能についてカノンから聞かされていた時には難色を示していたのだが、3人の見解は一致しているようでクルウドが視界共有を許可すると思っっているらしい。これでクルウドは嫌でも許可するしかないだろう。

また、この視界共有の機能はレイラが言うように人間族には使えない機能であるので契約者の伝記や本にはあまり書かれていない機能であるのだ。契約で解放される機能は人間も精霊も使えるものが大半であり視界共有のように片方しか使えない機能は特別なものだ。

「次で4つ目だよ。4つ目は記憶の鮮明化です」

「これも聞いたことがないわね。鮮明化ということは記憶をはつきりさせるのかしら

「？」

「半分当たりで半分外れかな。この機能を使えば記憶をはつきりすることはできるけどそれだけじゃないんだよ。その何時ぞやの記憶を今見ているかのように脳の中で再生することができちゃうんだ。フラッシュバックさせるっていうの？ いやむしろ、仕組みとしては脳に錯覚を起こさせる感じなのかな。脳に作用するからか魔力の消費は他のよりも随分と多いだけだね」

「ふくん。記憶の鮮明化だったっけ？ 念話とかに比べると地味だし、魔力の問題もあつて何かと使う場面がなさそうな機能ですよね」

「魔力の問題？」

次に記憶の鮮明化についての話をするカノン。これはクルウドが諸刃の剣と評して、使い方を危惧していた機能だ。

カノンの説明を聞いて魔力の消費が多いことにマヤカは反応する。それを見たカノンは不思議に思いレイラに尋ねる。

「魔力の消費が激しい魔法は色々と敬遠されがちだわ。魔力の消費量が多い魔法になるほど日常で使うことが少なくなるし、そもそも山間部等の危険な地域で暮らさないのならば相対的に消費量が多い高威力の魔法なんて使わなくても生活できるもの。例えばだけど、料理時に使う火属性の魔法だって初級の魔法で十分なのよね」

「ふっふっふ、2人ともこの機能の凄さが分かっていないみたいだね。デメリットがあるってことは当然その裏側にはメリットもあるんだよ」

「メリット？」

「兄ちゃんは転生してきたでしょ。だからこの世界とは違う世界の記憶も持っているってこと。つまり、兄ちゃんが元居た世界の技術やアイデアを記憶を通じて利用したり応用したりして恩恵が得られるんだよ。その点を踏まえると既に兄ちゃんは歴代の契約者の中でも一線を画しているからね」

「そういうことね。それなら魔力量に見合っただけの効果が得られるわ」

カノンの説明で納得がいったレイラは頷く。常人とは比べ物にならないほどにレイラは実に頭の回転や話の理解が早く、その博識さや頭の回転の早さはオッセラの街では有名である。その能力からお偉いさんとも関わることも多い。そんなレイラだからこそクルウドが転生したという話も受け入れられたとも言える。

「えっ、待って。……どうということなのか理解が追いついていないんだけど。レイラさん分かりやすく説明してもらえないですか」

「クルが転生してきたというのは夕食前の話でマヤカも知っているわよね。その話の中でクルはこう言っていたじゃない。『俺は違う世界で生きていた。そこには魔法が存在しない代わりに凄まじい程に技術が発達していて、それはこの世界の技術とは比になら

ないんだ』ってね。記憶の鮮明化によってクルの記憶が有効活用できれば、私たちの生活をより発展したものに換えられるかもしれない。これがカノンの言うメリットなのよ」

「……でもそれだと転生したのはクルウドだけですから、クルウドしか転生前の記憶は見られないですよね」

レイラがカノンの説明の真意をマヤカに分かりやすく伝える。

「今までの契約の内容から推測するに、この機能も2人の間で共有できるものなのでしょう。視界共有はカノン限定ではあるらしいけど、それについては特別だと言っていたし。互いに鮮明化した記憶も共有できるのよね？」

「レイラさん流石、ご名答。この機能も契約者間で共有できるんだ。しかも、私の記憶の他にも兄ちゃんらの記憶でも鮮明化できるよ」

「そうなんだ……。何だかすごいね」

契約によって解放される能力が多いことにマヤカは純粹に驚嘆していた。これはレイラも顔に出さないだけで同じ気持ちである。

「最後に記憶容量の拡大かな。記憶として留めておける情報量が増えます。これは特に説明することがないんだよね」

「確かに説明するまでもないような気がする」

「でしょ。今のところ一番効果が実感できなくてさ。記憶の量なんて数値として測ることもできないし」

「でも2つ合わせると中々効果的じゃないの。記憶の鮮明化で新たに手に入れた記憶は記憶容量アップの機能によってほかの記憶を忘れないで済むのだから」

「……組み合わせで考えると記憶容量の拡大も魅力的に写りますね。なんで私はその発想に至らなかったんだろ。レイラさん、ナイスです」

「あらあら、カノンの役に立てたようなら何よりだよ」

今までカノンは記憶容量の拡大については契約の機能のうち最も使えないものとして付属品のように考えていたようだ。レイラの意見を聞いてカノンは記憶容量の拡大の機能について見直すのであった。

「私知っている機能はこれだけだよ。でも機能もまだまだありそうなんだけどね」

「カノンは何個ぐらいあると思ってるの？」

「私は5つ知っているけど、少なくとも倍はあるだろうなと見当を付けるかなあ」

カノンをもつてしても契約によって発動できる機能は全部は知らない。そもそも契約者及び契約精霊の数自体が少ないがためにその契約による機能の全貌はまだまだ明かされていないような未知なる部分が多いのが実情なのだ。

「夜更かしのしすぎは身体に悪影響だしそろそろ私たちも寝ましようか。まだ一日目で

はあるけどカノン、この家は気に入ってもらえたかしら」

「シーハさんはうざいですけど、それを除けば最高です。レイラさんは優しいですし頼りになりますし、自分の部屋もありますし。思ってもみなかったほど至れり尽くせりです。有り難い限りです。……あくまでシーハさんを除けばですが」

「カノンはまだ敬語が抜け切れていないわね……。フレンドリーでいいのよ。それにしても、シーハさん完全に嫌われてしまったようなのね。カノン、シーハさんは見た目はあんな感じだけど、さっきのは嬉しさのあまり空回りしていたのよ。ちゃんと言い聞かせておくから今日のは見逃してあげて、ね、お願い」

「レイラさんがそのように言うのなら……。ねえマヤカ、シーハさんっていつもあんななの？」

「まあそうね……。私が初めてお邪魔した時もカノンのように同じ洗礼を受けたわ。でも、何度も接するうちに善人であるってことは分かったわよ」

カノンは夕食前の一件のこともありシーハのことはあまり好ましく思っていないが、悪い人ではないことは接した時にすでに分かっていたのでレイラのお願いを受け入れる。

「そりやそうでしょ。良いところが無い人がレイラさんと結婚できるわけがない。レイラさんは女でも憧れる高嶺の花なんだよ。皆にとつての理想の鏡なんだから。レイ

ラさんみたいになりたいたいものだよ」

「いくら何でも買ひ被りすぎよ。私は陰ながら努力して大成したタイプの人間だから、努力は怠らない方がいいっていうことは自信を持って言えるわ。2人とも何事も挑戦&努力が大事よ」

「そうですね。よし、私はカノンに負けられないように自分磨きをしっかりと、恋のライバル争いに絶対勝つ」

「マヤカ、それはないね。私が婚約からそのまま結婚まで一直線に進むんだから。私だって負けないもん」

努力が大事だと言われて2人とも初めに思い浮かべたのはクルウドを巡る恋のライバル争いのことである。どういう訳かカノンとマヤカが絡むとどんな話をしたとしても最終的には恋のライバル争いの話になるらしい。

「はいはい、2人ともおしまいなさい。寝る前なのにまた熱くなっちゃって。そんなに闘志を燃やしていたらすぐ寝られなくなるわよ」

強制的にその話題を終了させて子供たちを寝かせるレイラ。カノンとマヤカが寝室に戻ってから独り言のようにレイラは呟く。

「……………クルも私と同じように苦労者になりそうですね。子供が親に似ると言うのは本当のようね……………」

第2章 学校編

第2章1話目 マラ・モロッカの伝記

こんにちは。私は枕の精霊であるカノンです。私たちも兄ちゃんが転生してきてからすすくと成長して早いこともう3年が経ちまして現在7歳の3月を迎えています。春は寒くなくていい時期ですよ。

えっ？ 3年程なんて案外短いって？ いえいえ、そんなことはないですよ。私も経験上思ったのですが子供のうちに過ごす数年ってあつという間なんです。

そのあつという間の時間の中でも色々と変わっている部分も数多くありました。私の場合だとマヤカとの関係がいい例ですね。初めのうちはライバルとしか見ていなかったんです。しかし、マヤカと関わっていくうちにいつの間にか仲良くなって今では彼女が一番の親友です。

逆にこの3年ちよつとでも変わらなかったものと言えば、やつぱりレイラさんの有能っぷりとかですかね。上手いこと誤魔化してくれたおかげで私が精霊だつてことは知られずに戸籍も作成出来ましたし、こうして悠悠自適に過ごしているわけですよ。あとは……シーハさんのちよつかいのうざさも相変わらずのもので日々飽き飽きしてい

ます。あまりにも長いこと無視すると反抗期になったと叫んでうるさいので時々は会話をあげています。

さて、精霊にも反抗期があるのでしようかね……？ うくん……、少なくとも私は聞いたことはないですが……。

転生してから既に3年以上が過ぎ、また新たな季節がクルウドたちに訪れる。クルウドが転生したのは4歳の冬であるから5月生まれのクルウドにとって今回で4回目の春だ。

この頃になるとこの世界での常識やマナーを間違えることもない。転生したことによる人格の変化については初めは驚かれたものも、街の皆さんには目立ちたがり屋の少年が大人になりつつあるとして受け入れられたようだ。

もうそろそろ学校に通わなければならない時期が迫っていることをクルウドは心の中では自覚しつつも遠ざけようとして過ごしていた3月のある日のこと。クルウドはリビングでのんびりしていると玄関のドアがノックされる。レイラは外出するため

に色々を用意をしていたのでクルウドが出ようとすると、もレイラに手で静止される。

応対を終えたレイラが玄関から戻ってくる。どうやら小包が届いたようだ。そして中身を確認しようと紐を解くとレイラが目を見開くのが確認できた。

「クル、やっと本が届いたわよ。流石アンディと言ったところかしら。まさか原本をそのまま送ってくるとは……、ほんとよく見つけ出したものだわ……。ただでさえ原本を写したものでも数が少なく絶版の上に、これはマラ・モロッカの日記だからおおよそ800年ほど前のものよ……」

アンディとはレイラの友人であり付き合いは20年以上にもなる。アンディはこのジベック王国の王都ホウサで製本から販売まで行う本屋を営む店主であり、その本屋は王都でも片手の指に入るほどの規模を持つ。

しかしアンディの性格上、店主であつても彼は店にいない日の方が多い。じゃあその時はどこにいるのかというとき当の本人は古本を求めて日々旅に出ている。新たな本との出会いが彼の趣味である。

そして、このアンディの性格を知っているレイラはオッセラの街では見つけられなかった本があるとアンディに手紙を出して本を送ってもらうことにしている。いつもは近況報告に加えて本のタイトルを記した手紙を送るのだが、今回は少し違う。本のタイトルではなく、人間と精霊の契約をメインとした契約者の実話が書かれている書籍の

中でアンデイの目に留まったものは全て送ってほしい、とレイラはしたためた。

「凄く驚いているようだけど、その本はそんなにレアなものなの？」

マラ・モロツカの伝記を目の当たりにして数分が経つてもなお、普段は何事にもポーカーフェイスを貫くレイラは未だ薄笑いを浮かべていた。レイラが表情を表に出しているのを見るのは久しぶりだ。その様子を見てクルウドは只ならぬものだと思つたうえでレイラに尋ねる。

「そりやそうに決まっているでしょう。普通こういう貴重な原本とかつて個人ではなく国が所有して管理しているはずなのよ。珍しいものを探し当てて送ってくれるなんてアンデイも気前がいい。だってマラ・モロツカのものよ」

「国が管理するようなものの手元にあるって……。それって実は盗品だったりしない？」

「そんなことはないわ。アンデイは本が関わりと独特な行動をすることもあるけど、盗んだりすることはしないの。……それに交渉術を持ち合わせているからね。半年で届いたのもアンデイのおかげ。運搬込みで半年つてもはや奇跡と言つてもいいほどよ」

通常は2カ月もあればアンデイは依頼を完了して本を手紙と共に寄越す。ただ、今回はやや特殊のお願いかつ入手困難であったため半年も掛かっていた。

レイラが言うには今回ばかりは無茶振りであつたらしい。それでもたった半年で応

えるとはアンディは中々にして恐るべし人物である。

「なあ母さん、800年も前の本がこんな綺麗な状態で現存していることってあるの？
紙が破れることなく触り心地もいいし、黄ばみや汚れすらない。この本が新品だと言われても俺なら信じるけど……」

クルウドはマラ・モロッカの伝記を手にとるとパラパラとめくり中身を確認する。すると中古本とは思えないほどに完璧に初期の姿を保っていることが分かる。

「恐らくこの本には魔法が掛けられているんだと思うわ。劣化の防止はもちろん雨風や熱に対しても効果があるんでしょね」

「だから年月が経つてもなお新品のように見えるわけか。……この世界ではありとあらゆることが魔法で出来るんだな。奥深い……」

劣化しないと聞いてクルウドはそんな魔法までもが存在するのかと一驚を喫する。いつか使えるようになりたいものだ。

「今度こそ新しい知識が手に入るといいわね」

「ああ、そうであることを願うよ」

実はこれまでも何度か歴代の契約者に関する書物をレイラに頼んで時々取り寄せてもらっているクルウド。そうして手に入れた数々の本ではあったが特に目ぼしいことは書かれていなかった。どの本にも契約についての記述も多少なりにはある。しか

し、転生直後にカノンから聞いた情報を上回るものは一つもなかった。

そこでクルウドは歴代の契約者の中でもわかりかし有名な人物の書籍に絞って注文を出した。その結果として今回届いた本というのがたまたま「再び絆を紡いだ契約者」として世に知られているマラ・モロツカの伝記であったという次第だ。

「それじゃあ私は出かけてくるから。何かはないとは思うけど何かあつたら近くの大人たちに相談するのよ。クル、行ってくるわね。あとカノンにもよろしくね」

「了解。いつてらっしやい」

遊びに行くと言われていないので、カノンも家に居るはずだ。今は自分の部屋で過ごしているのだろう。

「ああそうだ。今家にはあまり食材がないから昼はどこかに食べに行くといいわ。お金は棚に入っているから。でも……カノンのことだからお昼は自分で作りたいと言うかしら？」

「そうだね。カノンなら買い物に出掛けてまでも昼ご飯を作るんだって言い張るんじゃない。大体2人の時は家で料理するのが基本だし。まあ……俺が手伝おうとしてもいいからいいからって料理すらさせてくれないから見ただけだね」

レイラが用事で家に居ないときは大体自分たちで作る。といつてもほとんどカノンがこなすのだが……。どうも下手すぎてカノンに心配されているようだ。だけど、いささ

か過保護すぎる。俺の人生経験の合計はもう19年にもなるといふのに…。

「まあね……、クルはあれだから……。カノンも心配しているのよ。それなら今日の夜にでも私のを手伝ってもらおうかしら」

「そうさせてもらおうよ。……自分でも未熟だつていうのは分かっているからそう落ち込みはしないよ」

この世界に来てからも現代日本で暮らしていた時と同様に治らなかつたものがある。それは不器用であるということだ。現代日本にて料理に興味が出てきたところで転生したクルウド。しかし、転生先のこの世界でも料理の腕は全然上がらなかつた。これでは単に下手の横好きである。

「ん、兄ちゃんどうしたの?」

「注文した本が届いたから一緒に読まないかって誘いに」

クルウドはカノンと読もうとカノンの部屋に入る。互いの部屋は別れているが、大体どちらの部屋かに集まって一緒にいる機会が多い。

「また頼んだの? 兄ちゃんが契約のことを知ろうとしているのは私としても嬉しいけど、今まで参考になつた話が一つ二つぐらいしかなかつたじゃん」

「今回は一味違うんだ。なんとマラ・モロツカの伝記が手に入ったんだ。カノンも知っているほどの有名な契約者だろ」

「マラ・モロツカって戦争後初めて契約者になった人だったわけ？ 一応は知っているよ」

「有名な契約者が書いた本なら今までに記されていないなかった機能の内容も載っているかなあと思って随分前にお問い合わせした」

「まあ確かに有名な人のなら新たな情報が書かれているかもしれないけど……。どうだろう？」

カノンは今回もあまり期待していないようである。マラ・モロツカという有名な契約者からでも契約の機能についての新情報が得られないとなると…、カノンが知っている情報が全てなんだろうか？

「そういえば、今日は母さんはいない日だけどお昼ご飯はどうする？ 材料はない——」
「作る！ 兄ちゃん、もうお昼ご飯にする？」

クルウドが言い終える前にカノンは張り切って宣言する。クルウドの予想通りお昼ご飯を作る気であるようだ。

しかし、まだお昼というよりは午前中とされる時間帯だ。まだ朝食が腹に残っている。

「カノン、まだ昼になっていないからな。あと食材がないらしいから買い出しに——」

「大丈夫。今から買い物に行こつ！ 兄ちゃんも早く準備してね」

「やっぱりそうなるだろうとは思ったよ。カノンはぶれないなあ」

もう3年の付き合いである。この展開すらも予想していたクルウドは動じることなく素直に従うことにする。拒否することはできないし、そもそも拒否するつもりもない。元は一人っ子のクルウドもなんだかんだでカノンと一緒にいることが心地よくなったのだ。

先人の知恵

「まだ早いからな。俺の胃袋の容量にも限界があるんだ。カノンだって作った以上は料理を残されたくないだろ？」

「そうだね、もう少し経ってからにしようか。美味しく頂かないと食材にも失礼だよね」
「ああ」

カノンの一言で急に買い物に付き合わされること小一時間。カノンはお昼ご飯用だけでなく何故か数日分もの食材を購入したので家に着くころには二人とも両手は荷物で一杯だった。

それでも小一時間で済んだのはカノンが効率性よく行動したからだ。店に着くなりすぐに注文してすぐに受け取る。7、8件回っても一つのお店の滞在時間は長くて3分ほどで済みます。おかげでまだお昼になっていない。

「……昼まで時間があるし一緒に読まないか？ 契約に関わる話なら俺だけじゃなくカノンも知っておくべきだろ」

「そう〜？ う〜ん、アニメの続きでも見ようと思っていただけで、兄ちゃんが読むって言うのなら私も読む」

クルウドの記憶の中から鮮明化したアニメを見ようとしたカノンをうまいこと翻意させて、本を床に広げる。

日記であるから目次はない。本の厚みから推測するに2,000ページは優に超えそう。これから読破しようとする本を目の前にして鬱になる。それでも契約についてより深く知るためだとクルウドは発破を掛けて読み始める。

「兄ちゃん。何か書いてあった?」

『契約で新たに使えるようになった機能はとても奥が深い』とか契約の話であつても契約の機能の内容とは関係ないものも多いし、『視界共有は人間には使えない。しかし、視界共有するかどうかの権限は私たち人間側にある』みたいに既にカノンから聞いている機能について書かれていたりで中々参考にならないな」

俺は一人で目が痛くなるほど小さな文字と格闘しながらマラ・モロツカの伝記を読み進めている。

カノンは今記憶の鮮明化の機能を使って俺の記憶の中にあつたアニメを見ているようだ。カノンも初めのうちは読む気満々で臨んでいたのだが、活字ばかりで見るのに退屈してすぐにドロップアウトしてしまった。

「そんな簡単に私の知らないような機能が書かれていることはあり得ないって。調子は

「どう?」

「日記帳形式で書かれているから読むこと自体が億劫だな。飛ばし飛ばしで読みたいけど契約についての一文一文を見逃すわけにもいかないし」

「『ニオラント・ミダと言つて後に2人同時で魔法の行使をする時、魔法の威力や効果が数倍にも上がる』か……。これは初耳だけど、カノンはどう?」

目はしよぼしよぼとし始め身体は同じ態勢で読んでいたせいで筋肉が痛む。そんな辛い作業と引き換えにやつと契約の機能に関する新たな情報を得る。

「ニオラント・ミダ? え、契約する際に使ったあのニオラント・ミダ?」

「そうだよ。ニオラント・ミダと言つて言う魔法の効果上がるらしい。知ってた?」

寝転がりながら頬杖をついてアニメを見ていたカノン。この機能の存在が意外だったのか顔をこちらに向けて確認を取ってくる。この様子だと知らなかったようである。

「私も初めて目にしたかな。うん、まだこれは使えそうな知識だね。……だけど、2人で魔法を行使するタイミングが全然ないよ。それに威力が数倍にも増した状態で魔法を使うものなら普通に目立ってしまうし……。そもそも数倍にするほどに桁違いの火力の魔法を行使する場面なんて敵に囲まれて絶体絶命の時とか、……。あとは残滅戦をする時ぐらい?」

カノンが詳しく本の内容を確認しようとしてそくさくと立ち上がるとあぐらをかいてい
る俺の膝の上にちよんつと座る。昔からクルウドがあぐらを組んで座っているとカノ
ンはその上に座ってくるのだ。その一連の動作は流れるようである。

座る際に揺れる青い髪からふわつといい匂いがする。ただ、カノンも成長しつつある
ので最近はやつと重い……。

「残滅戦ね……。つまり使い道が全然ないのか。結局これもあまり意味のない知識って
ことでいい？」

「そんなことはないと思うよ。ほらここを見て、『威力だけでなく効果も倍増する』らし
いから。魔法だつて攻撃系魔法が全てではないし、例えば攻撃用の魔法ではない回復魔
法とかを使う前に2人でニオラント・ミダと言えば効き目が良くなるんじゃないかな」
「成る程。魔法であればニオラント・ミダの効果倍増機能がはたらくのか」

使い道がなさそうだと初めは切り捨てようとしたクルウドであつたが考え直す。使
う魔法の種類によつては使う機会もあるかもしれない。

魔法も攻撃系の魔法だけではない。契約する時に使用した契約魔法のニオラント・ミ
ダだつて非攻撃のものである。

「ねえ兄ちゃん。この効果倍増つて機能だと思ふ？」

「……………え？ これもまた機能じゃないの？」

「機能……なのかな？　よく分からないから機能っていうことにしておく」

カノンの質問に質問で返す。カノンはどうも納得ができないという表情を見せている。

「知らなかったことが悔しいとか？」

「——っ、そんなことは全然ないもん！　兄ちゃんを支えると決めた手前知らないことがあるのが嫌なだけで、この効果倍増という機能もそうだけど兄ちゃんが初めて知る契約に関わる情報は全て私の口から説明したかったの！　だって私は兄ちゃんの契約精霊なんだから」

「要は他人により契約の新たな機能が判明されたことが悔しかったんだな。俺はそんなこと気にしないのに」

「違う！　悔しくなんかないもん!!」

カノンが早口で喋っている時はすなわち怒っているというサインである。俺はカノンからの好感度が高い分喧嘩をする機会は滅多にない。

しかし、初対面の時から全く変わっていない父さんは何度カノンに捲し立てられていたことか。父さんも言動を変えれば嫌がられることもなくなるだろうに……。

「ごめんごめん、俺が悪かったよ。ねっ、機嫌直して」

「……兄ちゃんがそう言うなら許してあげる。兄ちゃんじゃなかったらずっと怒ってい

「たんだからね！」

その滅多にない喧嘩も大抵1分足らずで仲直りとなる。俺としてもカノンと喧嘩する気は滅相もない。これは多分カノンにしても同様だ。もっともカノンの場合は今回みたいないざこざは喧嘩じゃないらしく、ただの言い争いとして捉えているようだ。

「でさ、兄ちゃん。攻撃系魔法は危険だから回復魔法を使って試してみようよ」

「何かするのかわか？」

「効果倍増機能のお試し」

「今からか？」

「うん！ そりやそうでしよ。思い立ったが吉日だよ」

カノンはパンと手を叩き俺を行動させようと促してくる。普段は互いにお願いは聞き合うが、今回はカノンのお願いでもできないものはできないと拒否しなくてはならない。理由は3つある。

「……俺回復魔法使えないんだけど。あと、試そうにも回復させる相手がいない」

「兄ちゃんも私もレイラさんに止められているもんね。私はここに来るまでにある程度魔法に関しては習っていたから回復魔法でも使えるけど、兄ちゃんはまだ本格的に教わっていないからなあ」

カノンはオツセラに来る前からある程度魔法の知識は持っているので簡単な魔法で

あれば使える。時々レイラの立ち合いの元で魔法を学んでいるが、魔法に関してはカノンとは違って初心者であるクルウドはなかなか魔法の行使はさせてもらっていない。実践よりも知識や心構えの方が大事であるとか。

「不器用だから不安視されているのかもな」

「まあ兄ちゃん是不器用だけど魔法は使えるようになるって。学校では魔法も勉強するらしいし。もうそろそろレイラさんも腰を入れて教えてくれるはず」

これから通う学校では魔法に関する授業もあるらしい。現代日本では習わなかった科目には興味がある。

「それにカノンは記憶の鮮明化を使っていたら。人前で急に枕状態になったらどうするんだ？ フォローしきれないぞ」

「大丈夫。今日はまだアニメ一本分しか鮮明化させていないから」

「アニメ一本分って……。全魔力中4割弱も消費しているのかよ!？」

繊細に描かれているものはモノクロのものに比べて鮮明化する際に使用する魔力の量が多いことが分かっている。

ちなみに1年前の検証ではカノンの場合、5時間程のアニメ1クール分の鮮明化で全体の約40%の魔力を消費するらしい。

「一番の問題はオッセラでは未成年だけでの魔法の行使は認められていないことだ」

「私の心配よりも規則の方が一番の問題なの!? 私か枕状態になる方が大問題だと思っ
けどー!」

本日2度目の口喧嘩。カノンは自分のことを第一に考えてほしかったようでも規則を
重要視したことが不満のようである。ここでも若干早口になっている。

「ほら……、法律とか規則は守らなければいけないだろ。破ったりでもしたら皆に迷惑
が掛かる。そうだろ」

「まあそうだね」

ここオツセラでは許可なしでの魔法の行使は緊急時以外禁止となっている。未成年
の場合は少々異なり大人の同伴のもとでのみ周りに害を及ぼさないと条件下のもとで
のみ可能となる。

ただ、『害を及ぼさない』という一文が示す範囲は非常に曖昧だ。いわばグレーゾーン
である。裏路地の空き地とかで火属性の練習をする不謹慎もいるものだ。

「この場合一番大切なことは魔法の行使を止めることだ。違うか?」

「そうだけど……。でもだからって! 兄ちゃんは私の心配をする方が優先でしょ!」

「……お、おう」

思ってもみなかったカノンの攻勢にクルウドは目を背けてたじろいだ。目を合わせ
づらい。

「兄ちゃん、何か言うことは？」

そう言うとかノンは口を少し尖らせ、俺の顔を両手で挟むと半ば強引に正面に向けさせる。見つめてられているってよりも睨まれている。

ここまで強攻的になるのも珍しい。そんなに俺の対応が悪かったのだろうか。

「はい、カノンが枕状態になる方が問題でした。申し訳ございませんです」

あまり感情を込めずに謝ってみたら棒読みになる。火に油を注ぎそうになり、おたおたと慌てふためきつつ言ったせいで後半部分は大分変な表現になってしまった。

「棒読みだし、それに語尾がおかしくなってる。ふふ、兄ちゃんがふざけたせいで怒りも冷めちゃったよ。ふふっ」

カノンは左手を自分の首に回して肘で顔を隠そうとするが、笑い声までは隠せはしなかった。そして、徐々にツボにはまったようでもくすくすと笑いを漏らす。このやり取りがそんなに面白かったのか？

「ごめん。ふざける気は毛頭なかったんだけど」

「もういいって。それよりお昼にしよ。あー面白かった」

（俺はまだまだカノンのことを全然知らないようだ。それにしても最近のカノンにはどこか惹かれる部分があるんだよな。何が変わったんだらうか？）

「兄ちゃん、まだ」

カノンに呼ばれてリビングに向かう。そして、今日もカノンが料理する姿を眺めるのである。

大切な2人の天使

カノンと昼飯を食べた後、俺はカノンたちに起こしてもらうまで呑気に昼寝をしていた。食後の皿洗いの時間からして1時間強。寝落ちの時でもない椅子の上でこうも長いこと寝ていなかっただろう。

「クルウド。おはよう」

「兄ちゃん起きた?」

うとうととしながらも眠気を落とそうと目をこする。ただでさえカノンもマヤカも可愛さ抜群。その上でボーっとして寝ぼけているからか俺の目には2人ともが可愛さ極限に見えた。マジなところ誰が見てもこの2人を青髪と銀髪の天使だと思うに違いない。

「うん……マヤカか。いつから居たんだ?」

「10分ぐらい前からかな。ねえカノン、クルウドの寝顔かわいかったよね」

「そっかあ、マヤカはクルウドの寝姿は見えないんだ。私はいつも見ているからね」
「自慢っぽく言われると少しむかつく。わざとそう聞こえるように言っているでしょう」

「え？ そんなことない。私だけが知っていただけだよ」

互いにマウントを取ろうとする姿勢は知り合ってから3年も経つ今でも変わらない。まあ俺を巡る対決であることは俺にも少なからず原因がある？のだろう。だから初めのうちから俺は黙認していたさ。

俺の家やマヤカの部屋の中にて散々マウント取りや口喧嘩をしてくれる分にはまだ許容できる。それなら家族以外には誰も見られることもなく、気苦労もしたものだ。しかし、それを外で平気な顔をしてやられると色々と面倒くさい。

まず、俺たちに注目が集まってしまふ。それが俺としては普通に恥ずかしい。どちらかと言えば注目を浴びるのは苦手な方だ。出来る事なら目立つことなく細々と暮らしたい。

そしてその注目的になっている当事者がカノンとマヤカの美少女2人ときた。マヤカもここ西地区で一番のヤンセン食堂の看板娘であり、ホールや接客の手伝いをしてるのでよく知られている。ならば余計に人の注目が俺たちに飛んでくるのは避けられない。

この騒動の中に俺が関わっているのを知ると、野次馬の中にいる大抵の男どもが俺に向ける視線の多くは俺に対する嫉妬等の好ましくないものばかり……。睨みつけてく

る奴もいる。正直疲れる。

それでも親しくしている近所のおばちゃんたちが自分の子供を見ているような優しい視線を向けてくれるのがせめてもの救い？なのかもしれない。

この近所のおばちゃん方。母さんみたいに専業主婦の人もいれば八百屋や肉屋といった自分の店でばりばり働いている人も多い。皆顔の広い母さんとは知り合いだし、カノンは愛嬌がありおばちゃんたちの人気者だ。また、俺が外に出る際にはカノンが行していることも多く仲良し兄妹と思われるようである。

だから俺もカノンも日頃から自分の子供のよう随分かわいがってもらっている。もし俺一人だったらこのおばちゃんたちとはそこまで仲良くなつてはいなかっただろう。

しかも2人とも言い争っている時は脇目も振らず言い合うことも少なくないので誰かが止めなければならぬ。この時誰が止めるかというとその役割は当然俺に押し寄せられる。

そうして嫌々ながらに言い合いを中断させると2人ともそこで俺の心情を察してくれて言い合いをやめてくれるが、それなら初めから自重してほしいところ。

これだけでは終わらない。オッセラの街を歩くだけでその一連の言動を見ていた近

所のおばちゃんや親父たちに色男だの、可愛い奥さんで羨ましいとか言われるのだ。それもまた疲れるもので……。

ちなみに羨ましがっていたおっちゃんたちが女房であるおばちゃんに私は可愛くなくて悪かったね!と怒られる光景を何度見る事になったか。

しかしながら、色男とかもてはやされる俺だが、そもそもカノンとマヤカに好意を持たれているだけであって他の女子からアプローチを受けたことも全然無い。ましては俺にはカノンとマヤカ以外に女子の友達もない。……思い返してみると数回ほど近所に住む女子と仲良くなりかけたことがあった。だけどその度にいつの間にか俺の前に姿を見せなくなっただけ。

「クルウド? もしかして寝ている?」

「起きているよ。考え事をしていただけ。ん、言い争いは終わったのか」

「なんか疲れたからやめた」

マウント争いから派生してカノンやマヤカのことを考えているうちに2人はいつも通り仲良くしていた。ずっと仲良くしていればいいのに。

「ところで、く、クルウドはさ、今のところ私とカノン、どちらの方が好きなの?」

「ど、どうした藪から棒に？」

「さつきカノンと言い合いをしていた時にクルウドはもうどちらかに決めたのかなあと
いう話になって。それならいい機会だし直接聞いてみようかなと」

突然そのような質問をされて少し動揺した。だってマヤカが質問する時に顔をすこ
く赤らめて言ってきたのだ。可愛すぎるでしょ。反則級です。

「埒が明かないから言い合いをやめたっていうのは兄ちゃんには内緒だからね」

ん？ 俺に内緒にしたい話を俺の前で言うのはポカなのかあるいはわざとなのか？

と思っていたらカノンが目くばせをしてきた。これはカノンの計画的犯行だな。

マヤカはカノンをあざとく見ていそう。あつ、ちよつと機嫌を悪くしたようだ。

「ん……。クルウドが転生してきてからもう3年でしょ。中間発表するにも今はいい時
期だと思うの」

「恋のライバル争いの中間発表か？」

「そうよ。カノンとの婚約が解消されるのは成人になる時で10歳の時。だから結婚に
至るまでもう中間地点を通り越したぐらいね」

おつ、推測が当たったようだ。前の内容から考えれば大体想像は付く。

俺がこの世界に転生してクルウドとして過ごすようになったのは4歳の冬からだ。

そして、結婚が認められるのはマヤカが言うように10歳の時だ。誕生日まで俺は2ヶ月、4月生まれのマヤカだと来月になる。カノンも6月生まれなので3人とももうすぐだ。今は7歳なのであと2年半後ぐらいである。

「6年に渡る争いももう後半戦なのか。何だか感慨深いな」

カノンやマヤカと出会ってからの3年を思い起こす。振り回されることも多いが楽しい日々だ。これからも続いていくのだろう。

「それでクルウドはどっちが良いの？」

俺はカノンとマヤカをそれぞれ見た。今の俺には答えは1つしかない。

「……2人ともではダメかな？」

この場における一番無難な回答である。カノンのこともマヤカのことでも大事に思っているので自分の気持ちに嘘偽りもない。

「何となくそうなるとは思っていたけど」

「うーん……、優柔不断だね」

「今日の前にはカノンとマヤカの2人の美少女が居るのに1人に絞れって言われてもねえ……」。選べないだろ」

互いに選ばれたかった女子2人にとっては不本意な結果である。反応がいまいち悪い。

「カノンだつてある程度予想していたんでしょ。突然どちらか一人を選べつて言われて迷いなく決心できるほどのクルウドではないし」

「優柔不断なのが兄ちゃんだもんね」

「カノンを選べばマヤカが怒るし、マヤカを選べば今度はカノンが拗ねるだろ」

何か小心者扱いをされつつあるがスルーする。

「それもそうね。クルウドがこのタイミングでカノンを選んでいたら……、私は一生顔を合わそうとしないかな。……でも私が告白されたことで親友が泣きじゃくっている姿はね……見たくない」

「マヤカは私や兄ちゃんには結構甘いよね。それがマヤカの良いところだけどあまり情を移さない方がいいよ」

「それは親友だから言ってくれている？ それとも恋のライバルとしてかしら？」

「もちろん親友だからだよ。マヤカが友達でも何でも無かつたら何振り構わず蹴落としただらうけど」

マヤカは気配り上手で優しく一步引くことのできるお姉さん気質。一方でカノンの方は言うなれば一直線に突つ走る性格である。よつて張り合っている時は別だが、2人と一緒に居る時にはどうしてもカノンがぐいぐいと積極的に来るのに対しマヤカは少し控える構図になりやすい。それをカノンは甘いと言っているのだろう。

「ねえ兄ちゃん、でも好きの重さなら私の方が上だよ」

「そんなことないはず。カノンよりも私」

「それに2人とも同じぐらいに好きだ。決して生半可な気持ちで言うてはいない」

まだこの話題を引きずるまでに熱意を持っているのだと感じて、間髪入れることなく答える。時間を置いて期待させてからこの回答をするのは酷であるし、2人それぞれに魅力があるのだ。

「……複雑だよ。マヤカの良さが私にも分かるから尚更」

「クルウドが私たちだけを見ていてというのが分かっただけでも」

「うん、下手に変な虫が付くよりかはマヤカの方がずっとましだけど」

「ライバルはカノンで十分だわ。カノン一人だけでも手強いのに」

カノンとマヤカは互いの顔を見ると笑い合う。それはまるで直前まで激しい試合を行っていたスポーツ選手が互いを称えるようだった。

「そうだ、3人で住めばいいんだ。気心の知れた親友同士なら仲良くやっていけるだろ」
「駄目よ。一夫多妻には国の特別な許可が必要だわ。私たちには当然王国関係者とのコネもないし、申請したところで門前払いされるはずよ。前にも言わなかったっけ」

俺としては事実婚みたいな感じで考え合わせていたのに直ちに否定されてしまった。事実には勝る満足感はないものだろうが……。

それでも彼女たちにとって法的に認められた上での結婚が理想なのだ。それ故、恋のライバル争いはまだまだ続く。

「必然的にカノンとは争わなくてはならないの」

「これからも勝負だね、マヤカ！」

「ええ！」

春の導き

どの世界においても春は一番多く出会いが訪れる季節である。この異世界でも雪解けを迎えてより勢いが盛んとなった人々の往来が、自然の生命力が、神の恵みもが春の息吹をもたらす。そして、土へ、海へ、空へと羽ばたきだしたその息吹の一つ一つが糧となつてまた一つまた一つと新たな出会いを生み出すのだ。

出会いもまた春の息吹なり。

ここジベック王国第2の都市であるオツセラにおいても季節は廻つて春の息吹が到来していた。

オツセラの街の西から北側にかけては季節の度に色とりどりの景色を見せてくれる壮大で堂々たるガレオス山脈がオツセラと王国の中心部を隔てる壁のようにそびえたつ。その山脈から吹き付けられた冷たいおろし風が積もるには至らないほどの淡雪をオツセラの街に降り注いだ3月を過ぎ、代わつて陽気で心地よい春の風が街中を包み込むように通り抜ける。

オツセラの街の東側にある冬の間は湖面のほぼ大半が凍る湖も春となり暖かい光が

水面に照らす。街の高台に立って見下ろしても反対側は存在しないかのように思えるほどに果たしなく水平線が続く湖の表面を覆っていた氷も薄くなりやがて完全に解氷した後の湖には漁船や人の影がちらほらと見える。

学校初日。カノンに起こしてもらった。といつても日の出前から起きてしまつてやる事が無くなったカノンの話し相手として。まあ起こしてもらえないと昼まで起きないこともあるから助かるんだけど、今日は……、うん起こすのが早すぎる。眠い……。「こんな早くに家を出る必要なんてあつた？ 山を越えて徒歩1時間とかじゃないんだからさ、もう少し寝かせてくれても……」

「もう……、早寝早起きが基本なんだからね。兄ちゃんが寝すぎ」

カノンはそう言うが、昨日は21時には床に入ったので9時間しか寝ていない。いつもならあと1、2時間は寝ているし寝ていたい。しかし、現代日本に居た時には6時間睡眠とか平気だったのにいつの間にか変わってしまった。この世界に適応したのという事だろう。

「……弁当つてカノンが作つたんだよね？」

「無理に話題を作らなくていいのに……。兄ちゃんと一緒に居るっていうこと、私にとつてそれが重要なんだから」

俺がカノンと違って口下手な分、カノンから話してくれないと無口になってしまう。それが寂しくて話題を作ろうと話し掛けたのだがこちらの気持ちは見事なまでに見透かされる。

「ちゃんと弁当は作ったよ。今日は一人で作った」

「俺の弁当はいかほどに？ あ、作ってもらって当然とか微塵も思っつてはいないけど……」

聞いてすぐに発言を訂正する。厚意に甘える分にはいいと思うが、当たり前だと勘違いするのは良くない。何気ない些細なことですれ違いは生まれてしまう。

「兄ちゃんの弁当？ 私の弁当と一緒に包んじやつた。ほどくのも手間だし私が昼まで持つてるよ。お昼一緒に食べるでしょ」

歩けば10分のヤンセン食堂までなら話さなくてもあつという間に着く。大通りの方を見てみたが、案の定行列ができていた。

「おはようございます！ マヤカいます？」

「んー？ 声小さかったかなあ？」

通用口からヤンセン食堂に入ってカノンが大声で挨拶をしたのだが返事がない。カノンの声量は小さくないはずだが聞こえていないだけだろう。奥に行くとアルギンさ

んが調理していたので声を掛ける。

「アルギンさん、おはようございます」

「おつ、カノンとクルウドか。いつもより早いな。……そうか今日から学校だったか。学校生活を楽しむんだぞ」

「マヤカはどこにいます?」

「ホールにいるんじゃないのか。ここを通ってホールまで呼びに行ったらどうだ」

クルウドたちにとつてマヤカの家だけではなくヤンセン食堂も自分の家の庭みたいなものである。その上、マヤカの家遊びに行つた時には昼休憩時の3時のおやつとしてのお茶会にも度々お邪魔させてもらっている。ヤンセン食堂の従業員たちとは道端で会つたら話すほどに仲が良かったりする。だから従業員たちは厨房2人の姿を見つけても不審者扱いはしないし、いて当たり前のように接してくれる。

「マヤカを呼ばなくても学校が始まるまでまだ一時間半もあるんで十分に間に合うんですよ。マヤカが裏に戻ってくるまで待ちます。手伝いの邪魔をするのも気が引けるし」

時計の針は7時を少し回つたぐらい。この世界での学校は9時から1限目がスタートするので時間にはまだ大分余裕がある。そもそも早く来た自分たちが悪いんだし、急かすような真似をする理由もない。

「多分呼びにいかないと言やカの奴しばらく戻つてこないと思うぞ。今週一杯は猫の手

も借りたいぐらいに大忙しだから」

「何か催しごとでも？ それとも単に4月は忙しくなるとか」

「いいやそういうことじゃなくてな。実はトンブさんが昨日から風邪でさ。ホールや帳場の表の方の人数が足りないからアビジャがホールと厨房の掛け持ちをしているんだ」

「道理で人数が少ないと」

「ああ、すっかり春だつていうのに最近巷では風邪が流行っているから。季節の変わり目の風邪は怖いね」

「ここしばらくは暖かい日が続いていたのに先週からずっと寒かった。季節の変わり目では体調を崩す人はこの世界でも一定数いるらしい。そういえばサンクルさんはどこに居るのだろうか。朝の時間帯だけの勤務ならもういないとおかしい。」

「ねえ、サンクルさんも風邪？ この時間ならいつもあそこで腕を振っているのに」

「ああ、サンクルさんの場合は先週から腰痛で休みなんだ。ぎっくり腰をやっちゃつてようで、しばらくは来られないようだね。医者にも安静にするようにだよ」

「腰ですか……。それは辛いでしょうね」

「つていうわけで、厨房もホールも大忙しつていうわけなんだわ。いつもより全体的にペースが落ちているから結構時間が掛かるぞ。もちろんマヤカは学校に行かせるけどな」

「あらいらっしやい、声が聞こえたから見に来たら2人とも来ていたのね。少し待っていて、マヤカを呼んでくるわ」

どうやら従業員が2人もいない状況でとても忙しいらしい。いつもだったらアルギンさんよりアビジャさんの方がおしゃべり好きで構ってくるのに今日はあつきりとしている。アビジャさんがあんな感じでは、マヤカはホールの手伝いから手が離せないだろう。

「まだ時間はたっぷりあるので待っていますよ」

「駄目よ。待たせる訳にもいかないでしょ。すぐ呼んでくるから」

マヤカの家の方で待っていかとも考えていたがその必要はないらしい。キリが良かったのかすぐにマヤカが来る。

「クルウド、カノン、おはよう」

「おはよう」

「早くない？ まだ7時過ぎじゃん。まだ手伝いがあるからしばらく待たせることになるのだけど……」

「お店の方はどうなの？ 忙しい？」

「俺たちのことは気にしないでいいから手伝いに戻りなよ」

「もう兄ちゃんったら。女性が大変そうにしている時はさりげなく手を貸すものなんだよ。分かってないなあ」

「俺だってマヤカが困っているのならすぐ手助けする気はあるさ。だけど、マヤカ個人の問題ならともかくヤンセン食堂全体の問題なんだよなあ。それに俺たち足手まといだろ」

いつもの欠員がない上で手伝う分にはある程度余裕があるが、今は欠員が出ている状態だ。そんな中で俺たちではサンクルさんやトンプさんの働きには及ばないだろう。決して商売はお遊び感覚では務まらない。

「そうやってすぐ尻込みする！ ためらうことなく何事にもいけいけどんどんだよ」

「今まで何十回も手伝ってきているのに足手まといだと思っっているの？ クルウドもカノンも戦力だよ」

「クルウドって時々妙なところで弱気になるよね」

「昔からの癖みたいなものだな。気になる？」

「ううん、それが兄ちゃん。深生としてのクルウドでしょ」

「無理に克服する必要はないよ。似たようなのは誰にでもあるものだから」

直さねばならないネガティブ要素を受け入れるところか最後は2人に励まされてしまった。かれこれ15年弱も続いた小さな頃からの癖は直したくても直らない。

「マヤカには会えたか。あれ、カノンは？」

「お店の手伝いをするんだってアビジャさんに許可取りに」

「もちろん手伝ってくれるのは嬉しいのだが……なんだか申し訳ないね」

「いえいえ。この食堂も自分の家みたいなものですから」

「おうそうかい。将来はマヤカと結婚するのか」

「マヤカとも結婚できれば幸せ者ですよ。でも俺にはカノンもいますし……」

「そうだよ。いやー、2人と結婚できればクルウドも悩むことないのにな」

「ほんとそうなんです。だけど、出来ないから悩むんですよ」

「親としてはマヤカを選んでほしいとは思っているさ。あの子、クルウド以外には眼中にないから」

「兄ちゃん何やってるの。兄ちゃんは帳場に回ってアビジャさんと交代。さぼっちゃダメだからね」

中々ホールに現れない俺にしびれを切らしたのかカノンが厨房に覗きに来たのでそろそろ帳場に行かねば。日頃からお世話になっているのに俺だけ何もしないっていうのは何か違う。困った時はお互い様だ。

「じゃあ俺も頑張ってきますね」

「よろしく頼むよ。店もマヤカも」

「え？ ……本気でした？」

アルギンさんが先程からほとんど料理の方に付きつきりだった目をクルウドに向ける。口調はそれっぽかったので一瞬ビクツとしたけど、顔はにんまりしていた。

「冗談だよ、冗談。適度に付き合ってくれ。でもな、マヤカもなんだかんだでモテるんだよ。まあその度に断っているらしいが。……クルウド、きちんとうちの娘のことも考えておけよ。2人は仲良しでそう大事にはならないだろうけど……。ふっ、女の本気の修羅場は怖いからな」

「ええ、肝に銘じておきます」

こうして手伝い始めて1時間は経ち、8時を過ぎてもなお盛況のままのヤンセン食堂。現代日本で義務教育を受けていて計算はお手の物のクルウドは帳場に。カノンはマヤカと共にホールにて受け渡しや提供など諸々。クルウドとカノンが加わったことで今日一日のピークはいつもよりは時間が掛かったものの乗り切れそうだ。あとしばらくしたらクルウドたちが学校に行くために抜けても問題ないだろう。

「もうそろそろ俺たちは切り上げて向かおうか」

荷物は厨房にある通用口付近に置きっぱなしなので取りに行こうとするとマヤカと

目が合った。

「待ってクルウド！ 今私たち3人が抜けると店が回らなくなっちゃう。あと5分……いや10分だけ手伝わせて」

「もう行きなさいマヤカ。あとは私たちだけで大丈夫だから」

サンクルさんやトンブさんの欠員を抱えたヤンセン食堂。まだ予想以上に混んでいる。今抜けてもアビジャさんの言う通り多少の影響は残っても恐らく上手く回るはずだ。しかし、手を抜くことが嫌いなマヤカとしては見過ごせないのだろう。

「どうする兄ちゃん？」

「……走れば遅れることはないはず。マヤカあと10分弱だけだぞ」

既に時刻は8時半をとつくに超えている。距離的には学校までは15分ぐらいで着くほどだからギリギリ。手伝いを区切り良く終わらせた3人は遅刻しまいと走るのだった。

眩しい程のポジティブ野郎

今日は良い1日になると思っていた。学校生活に胸躍らせていたからかいつもより早く起きてしまった。レイラさんより早かったのだから超が付くほどの早起きだ。元々弁当を作る予定でいたので日の出前から作りかかろうとして我ながらひらめく。普通の弁当箱じゃなくて重箱なら 1人1つの重箱だと多くて食べきれないので2人で1つ。絶対目立つだろう。同時にマヤカが不機嫌にもなりそう。重箱だなんてと兄ちゃんは反対しそうだから起きる前に完成させた。兄ちゃんは朝に弱いから基本的に私が起こす係だし余程手間取らない限り十分に間に合うし間に合った。ヤンセン食堂で手伝いをギリギリまでこなして、その後は初日から遅刻という失態を招かないようにと学校まで3人で全力疾走。兄ちゃんが一番息を切らしていたかな。

ここまでは良かった。あいつに絡まれる前のここまでは……。

一目惚れか知らないけど、馬鹿な男が口説いてくる上にあるうことにいきなりお茶に誘ってきた。……いやあんたとは初対面だし、兄ちゃんという婚約者がいるから無理。それよりも問題なのはあの馬鹿が無神経にぐいぐい来るから、兄ちゃんが不安がつちやっつてるんだよね。やきもちを焼いてくれるのは嬉しいけど、心配もさせたくない。

私は昔から兄ちゃん一筋なんだもん。他の男にどうぞよそ見する気はないから兄ちゃんとの時間を邪魔してほしくないのに……。

「おはようマヤカ。いつも変わらず綺麗だねっ。おやつ、マヤカの隣にいるお嬢さんもとてもかわいらしい。特にその青い眼は実にチャーミングだ。今度僕と一緒にお茶でもどうだい？」

女子2人が学校がどんどころかが気になり時々きよろきよろとしつつも和気あいあいと雑談をしながら教室に向かう。既に3人とも同じクラスだというのは確認済みだ。今日は1年生のみ学校登校日らしく愉快的声はあまり聞こえない。

1年生の教室は奥にあるので長い廊下を歩いていると赤髪の男子に元気よく声を掛けられる。マヤカの名前を知っていて挨拶をするあたり赤髪の奴はマヤカの知り合いのようらしい。この少年は髪と眼が赤くそれがトレードマークのようである。あとパツと見た感じは良い服を着ているなど感想を抱くぐらいだ。

「はい？ 何かおっしゃられましたか？」

「うんっ、そうだと！ 僕は多くの女子と知り合いなのだが、君はその中でも抜きん出

て可愛すぎるんだ。是非とも次の休みにでも2人きりでお出掛けはいかかい？」

「確かに周囲の目を見張るぐらいにだと自覚していますが……。いきなり口説くのはいかなものでしょうね」

いきなり大胆な行動に打って出た赤髪の野郎。あまりにもいきなりだったのでカノンでさえも困惑を隠せていない。しかし、話し返すカノンの声には黒い感情が確かにこもっていた。それはつまりクルウド以外とはデートする気がないカノンにとってこの話自体うざったいものである。

「うっ、お嬢さんが気分を悪くされたのならそれは申し訳ない。ただ君を決して怒らせるつもりは全くないんだ。マヤカ、僕は悪い奴ではないだろうっ！」

「……で私に振ってくる!？」

「マヤカは彼女とは仲が良いのだろうか？ おや、見た感じ君が一番仲が良さそうに見えたのだが……。僕に振り向いてくれるように手伝ってもらえないか」

「十中八九断られると思うわ……。それでも私は手伝わなければならぬのかしら?」

「もちろんだともっ！ わずかながらにでも可能性があるのなら僕は決して諦めたりなどしないっ」

その赤髪の野郎はこれから自分の独壇場だと言わんばかりに希望に満ち溢れた様子でカノンの表情はシーハに対して向けるものと同じく関わりたくない。この様子なら

間違いなく赤髪の野郎が好かれる訳がない。父さんだって未だに警戒されまくっているのだから。

「ねえ、十中八九という表現は言葉の綾なのだけど……」

「言葉の綾だったのなら何も問題はないのではないのでは。さあマヤカ、頼む」

「ああ……私が馬鹿だったのね……。エルネ、あなたがカノンの対象に入る余地なんて

1ミリもないわ！ 私の親友かつライバルを甘く見るべきではないのよ」

「ほおう、僕を退けたマヤカがそこまで言うとは……。しかし、マヤカはこの僕がそう簡単に引き下がるとでも思っているのかい？ あの時のように二度も同じミスは犯さないのがこの僕なのさっ！」

「うわあ……何よその自信……。まるで何事にも屈することのない主人公キャラみたいじゃないの」

「真正正銘僕も主人公さっ！ 皆一人一人が主人公なのは当たり前のことだろう。第一この僕がキャラクター的立ち位置で終わるわけなからう」

知り合いです。マヤカにも呆れられ注意されても赤髪の野郎はめげることはない。これまでの言動的にはいかにもポジティブ要素を全て詰め込みましたみたいなキャラである。

「あーそうですか。とりあえず私のいないところでやってくれませんか……。ホント朝か

ら疲れるわ」

「長い時間家の手伝いをしていても疲れたと口に出さないマヤカが……。もう面倒くさいからちやっちゃんと紹介だけ済ませて教室に行こ。私もこんなことに時間を割きたくないもん」

「はあく……。仕方ない。こいつはエルネ。今やり取りしたようにこっちの気持ちを考えない上にどこまでも我を貫くタイプ。つまりは我が儘っていったところね」

「顔は……。まあ悪くはないけど、振り向くほどでもないよね。いかにも毎日女とつるんでいますっていう顔じゃん。私興味ないよ」

「うん、予想通りの反応。私も対象ではないよ。そもそもエルネの登場でカノンの気持ち揺らぐとは思わないし、紹介する必要もないとも思ってたけど」

「こんな奴が顔見知りだなんてマヤカも運がないね」

息びつたりの軽快なトークを繰り広げる2人。散々な言われようなエルネがシヨックを受けていそうだと視線を向けてみたら案外平然としている。距離的に聞こえてくるはずだから、エルネ自身に自覚があるのか、あるいは図太いだけか。

「そうなのよ。知り合いの数自体が多い分必然的に変人も多いの。たくさんの人と接するのは実家が料理店で？盛しているっていう証なんだけど」

同じ割合でも分母が多くなるにつれて分子も大きくなるっていう意味だろう。マヤ

カが変人って言うほどだからエルネは変人なのだろう。俺としてもカノンが嫌がる相手とは関わりたくはないかな。

「君たち僕のことを忘れていないかい？ それに僕は変人ではない！」

「うん忘れてた！ えっと名前は変態だったよね？ じゃあ紹介も終わったしこれいいよね」

「正直すぎて清々しいわね。勝手に格上げしているし」

「さつきより酷くなってる！ 僕はエルネだ。エルネ！ あと変態でもないぞー！」

変人から変態へと格上げされたエルネ。本人は変態扱いされてたことに抗議しているが、カノンが嫌がっているのにこんなにしつこく付きまとっている時点で変態だと言われても仕方ないとも思う。

「マヤカと、……カノンで良かったかい？ 僕のこと——」

「容易く私の名前を呼ばないでもらえる！」

カノンが教室に歩みを進めるのを見て、エルネはここが自分のターンだとばかりに名前の確認をしようとして……させてもらえなかった。

「はいっ！」

「カノンやるね〜」

「……へえ？ え、僕は名前さえも呼ばせてもらえないのかい!?」

カノンの大声につられてエルネの素が出てきた。実にあっけない声である。

「当たり前じゃないの！ 私とあんたは赤の他人！ それに好感度がゼロどころかマイナスでしかも上限突破するほど評価が低い。その状態で——」

カノンも口調が乱雑になり最後の方はよく聞き取れなかったが、誰がどう見てもヤバい状況だっというのは分かる。当事者たちを囲むように周りにたむろっていたギャラリィが1、2歩後退している。野次馬の中には恐怖感から足がガクガクさせている生徒も見受けられる。

「扱いが雑過ぎない？ 僕はオツセラの街の貴族の息子なのに……」

エルネも心が折れかけ始めてきたのか嘆こうもカノンは勢いそのまま追撃する。周囲のことなんてお構いなしだ。

「あんたの親が貴族だからってなんであんたが偉く気取っているのよ！ 肩書なんてどうでもいいわ」

「うう……」

「カノン、ちよつと言いきすぎ。顔の良さと貴族の子息のアドバンテージを除いたらエルネは単に自信過剰で人の話に耳を貸さない女たらしの救いようもない奴よ。だけど、そこまでいったら自分の尊厳を失うわ。一度深呼吸してみなさい」

暴走気味のカノンも親友に止められては少し冷静になるしかない。流石マヤカ、カノ

ンの扱いは馴れていると褒めたいのだが……。如何せん話の内容が悪すぎた。あの赤髪の野郎も大分ダメージを受けたようで顔に覇気がない。しかも、マヤカ本人には自覚が無いってところが恐ろしい

ギヤラリー「あそこまで罵詈雑言言われると……」や「とうとう皆が思っていることを言ってしまったな。代弁してくれたつとこか」とか「あの優しいマヤカにまでそう思われていたのね」などとはつきりと物申したことを称賛している生徒もちらほら居る。相手が貴族で口に出せない部分があるのだろうか。

周りの生徒の反応からマヤカも時間差で自分が何を言ったか

「エルネゴめんなさい！ 正直に言えば本心が漏れてしまったの。この通り悪気はないからさ。気にしないで！」

結局本心なんかいい。これは更に傷付くだろう。まあマヤカの場合は謝った分マシなのかもしれないが。ちよつと

「カノンだけではなくマヤカからも罵られるとは……。まったく想定外のダメージだ。だけど僕は寛大だから許してあげよう。それにここで諦めなければならぬ理由もないし挽回する機会はたくさんあるんだ。僕たちはまだ1年目。つまりつ、学校に通う期間はあと3年もある。出来るだけ早く君と仲良くなりたいから僕は頑張ることにするよつ。まずはお話からだねつ」

カノンが黙った僅かな時間の間にすっかりと元通りになったエルネ。どこからそのような気力が復活するのか……。俺とは違って何度ぶちのめされてもへこたれないポジティブな姿勢にはつい感動を覚えてしまった。

ギャラリーからも「負け犬の遠吠えだな」と揶揄するものもあつたが、「悔しいけど何かかつこいいぜ」「絵になるな」「あいつの辞書には諦めの文字が無いのかよ」といった俺と同じように称えてしまう声も多かつた。

「はあ……、こういうのは慣れっこなので気にしません、やはり礼儀はわきまえるべきです。しかしただ、これはきつちりと断言しておきます。ごめんさい、あなたと付き合うことは絶対ないです。私には愛しの婚約者がいますから。絡むだけ無駄ですよ」

呆れて先に匙を投げたのはカノンだった。エルネの粘り勝ち？ とは見えなくても結果的にはエルネの勝ちなのだろう。絡むだけ無駄と言われても絶対絡むに決まっている。

一部の男子からは案の定「ざまあみろ」とか「婚約者ってマジかよ」といった驚きを持ったものや、「俺実は狙おうと思ってたのに畜生！」などとカノンに対しての淡い恋が早々に実らなかつたものもいたようだ。

「おいお前たち、教室に入らず廊下で何をやっているんだ？ 既に予鈴はなっているんだぞ、早く自分たちの教室に戻れよーおー。そして、きちんと学生であるという自覚を

持てよーおく」

虎に目を付けられた草食動物ごとく蜘蛛の子を散らすように生徒たちは自身の教室に戻り始めるが、野次馬と化していた群衆が多く廊下からは人混みの中々消えない。

俺らはどうと自分たちの教室の前に居たのですんなり教室に入れた。教室に入る直前にエルネに絡まれたのだから当然ではある。

「俺はこの2組の担当のサンメだ。とつとと席に座れよーおく。お前ら初日から遅刻なんて嫌だろ」

この先生は俺のクラスの担当教員らしい。サンメ先生の語尾は独特だが、その発する言葉の威圧感が凄い。正確には語尾だけが異様なほどに気合が乗っているとでも言うか。

「兄ちゃん。私はいつまでも兄ちゃん一筋なんだから」

お調子者と真面目なコンビ

俺には友達がいらない。正確にはこの世界に来てから友達がいなくなったというところか。転生前の現代日本に居た頃は親友の柴田をはじめとしてそれなりに友人はいたのだが、この世界に転生してからは友達と呼べる人物が一人もいない。

そのカノンやマヤカの場合は特殊で、カノンは契約精霊で義妹で婚約者であり元より家族の一員だし、マヤカはマヤカで幼馴染であり日常的に一緒にいる間柄であるから少なくとも友達や親友以上の関係だ。

このように友のいない悲しい俺だけどこの学校生活で友達ぐらいつつてやる。前世の経験があるし、あつという間に友達を増やしてみせる。

「お前さんは朝の茶番劇は見たか？　ありや中々滑稽だったよな」

「滑稽っていう言い方で合っているのかは分からないけど、あんなエルネを見たのは初めてだったね。うん、面白かった」

「それを滑稽っていうんだろ」

短く整われた茶髪で見た目や喋りから豪快な奴と、太いフレームの黒メガネと緑の髪がよく似合う童顔の男子のコンビが向こうから話し掛けてきた。チャンス！

「茶番劇？ 教室には予鈴ぎりぎりに入ったから知らないな。……そんなに滑稽なものだったのか？」

「おいおいお前さんは見逃してしまったのかよ……。勿体無いことをしたな」

「そんなにか？」

「ああ、あのエルネがデートに誘ったんだけどな、完膚なきまでに言いくるめられた上に見事に断られたんだぜ」

「つてあれよ……。お前さん知らないのか？ ほらあの赤髪の野郎だ。今でも見た感じは外面としては気丈に振舞っているようだが、内心かなりシヨックを受けているだろうよ」

茶髪で豪快な男子が指さす先にはエルネとその他の男子の集団。女子だけでなく男子一同とも仲がいいようで、彼の周りには自然と人が集まっている感がある。ところで茶番劇とはカノンのことだろうか？

「貴族様っていうのはそう簡単に顔に出さないもんじゃねえの。なあメルト」
「ウォルフ家はオツセラでも格式の高い貴族で、この街の運営にも深く関わっている名家だよ。その一人息子がエルネ」

エルネ・ウォルフ

このオツセラの街は元は戦国時代における堺のように有力な商人や町人が治めてお

りどこの国にも属さなかった自由都市であつた故に、今はジベツク王国の中でも独自の自治権を有する商業都市オツセラにおける運営組織の代表を3代にわたつて務めているウォルフ家の現当主ハンブツカ・ウォルフの子息であり、赤髪が特徴的な男子。ついさつきまでカノンに猛アタックするも振られた人物が彼である。

「しかも堂々とよ。理由は婚約者がいるからだ。俺から見ても可愛い女子だったから婚約者がいても不可思議ではないが……。婚約者なんてエルネみたいな貴族でもないのに」

「やっぱり婚約つて滅多にないんだよな？」

「婚約者ねえ……。婚約すること自体あまりないはずだ」

「そうだね、一般庶民が婚約者を持つているのは珍しいよ。……もしかして僕たちが知らないだけで彼女は貴族令嬢なのかもしれないけど」

「あれが貴族令嬢か。大胆な行動には疑問を覚えるが、確かにエルネを伏せさせるほどに威厳はあつた」

婚約↓珍しい↓貴族の発想がこの世界における常識のようだ。俺もカノンと婚約している身であるから、婚約者がいるつて伝えたらこんな俺でさえも貴族だつて思われるかもしれない。

「あいつ(カノン)最近デートを断られたことが無かつたようで啞然としていたよな」

「成功99%超えのエルネにとって失敗することがもはやレアだからね。誘いに失敗した時だけ噂になるから」

「もはやエルネの特性は恋愛マスターとかなのかよ」

「そんな特性なんてあるのかな？ それに恋愛マスターよりも実用性の高い特性の方が嬉しいかな」

エルネは成功して当たり前のように見られているらしい。だからこそエルネの誘いを断ったカノンが既に話題にあがっているのだろう。

しかし、99%を超えているとはある意味凄い。でも99%ということは過去に失敗したことがあるのだろうか。

「エルネは今までで断られたことってあるのか？」

「ああ、前にもエルネの奴が一度断られたことを見たことがある。確か相手は……マヤカだったか？」

「僕に尋ねられても……。見てはいないけど噂としてなら僕も聞いたことがあるよ。あれ事実だったんだ」

「そうだぞ。たまたまエルネが告白する場面に俺も居合わせたんだよ。その後たんまりとマヤカから直接愚痴を聞かされたんだよな。……昼から夕方まで」

「それは災難だったね」

「私にだって好きな人はいるのだから、たぶらかしている女子なんてわんさかいるのだから無視してくれればいいのになど同じ話のくだりを長々と……10周ほどは止まらなかつたぜ」

「……はは。大変だ」

「乗り替えてでもエルネを選ぶ女子もいるのにね。マヤカも一途な女子ということだね」

乗り替えられた男子にとってはたまったものではないが、エルネが人気物件というのは分かる気がする。エルネの家は貴族であるから女子にとっては憧れでかつ玉の輿なのだろう。

「なあ、マヤカってうちのクラスにいるマヤカか？」

「おう、お前さんもやつぱり知っていたか」

「彼女は人気店ヤンセン食堂の看板娘だからエルネと同じぐらいに有名なんだよね。僕ももちろん交流があるよ」

「で、マヤカの前に座っていたのが例の貴族令嬢だな。ちようどお前さんの左隣りの席だ」

「これで確定だ。朝の茶番劇はカノンがエルネにデートに誘われて断った件で俺とカノンは隣同士で座っていたし、マヤカはカノンの後ろの席だった。2人ともカノンが貴族

令嬢と誤解しているようだ)

ここで勘違いしているってことを教えることもできたが、あえて黙っておく。カノンやマヤカが俺以外からどう思われているのかも知りたいし、今カノンはエルネからの誘いを断つたことで印象が悪くなっているし、ここで打ち明けるのも……。どうせ数日以内にはカノンとの関係は明るみになるのだから。

「さつき全員がいた時に教室を見渡してみたけどマヤカは他の女子よりも大人っぽいんだよな。良い奴だっつてんのは分かってはいるんだが、その大人っぽさに苦手意識があるんだ」

「そう？ マヤカのその落ち着きのある行動が皆に安心感を与えてくれるんでしょ。だから大人っぽいとも思われるんだし、人気者として頼られているんだよ」

「メルトく。お前マヤカが好きなのかよ」

「そ、そんなことないって。年上の女性はクールでかっこいいと思うけど」

「そうかそうか、メルトは年上がタイプなんだな。よしよし分かった分かった」

「ち、違うし、あと頭を撫でないでよ！」

「メルトはな、凶星を突かれると言葉がつつかえるんだよ。で、怒った時は頭を撫でると許してくれる」

「許しているんじゃないかって恥ずかしいんだよ！ まず、いつまで撫でるのさ！」

「おう、わりいわりい。その代わりとしては何だが俺のタイプを教えてやるよ。俺はあの青髪の貴族令嬢みたいな年下派だな。見事に分かれた」

「スタッテの好みなんて聞いていないんだけど。それにあの子同級生だよ」

「分かっているって。そういえばよお。なあメルト、まだ聞いていない奴が一人いたぜ。お前さんはどっちが好みなんだ？」

「俺か。うーん、こういうことは言いたくないんだが」

「早く言えよ。一人だけ言わないとかせこいぞ」

「僕だって言わされたんだから……」

自滅した人が一人、聞かれてもいないのに答えた人が一人。この二人、俺に関係なく勝手に喋っただけなのに流れるに言わざるを得ない雰囲気になる。この質問、毎回困るし実にいやらしい。だって質問自体がカノンかマヤカかどっちが好みか答える内容なのだから。こういう質問を乗り切る唯一の方法は、どちらも否定しないことに限る。

「あーあ、俺はどっちも好みだ。どちらにも魅力があるからな」

「お前さんはエルネスタイルか。多少かつこいいけどエルネみたいにはなれないだろうよ」

「答えを濁されたようにも思えるけど、まあいいかな」

「ところで聞きそびれていたがお前さん、名前は？俺はスタッテでこっちはメルトだ」

「クルウドだ。これからよろしく」

無事互いに名前を教え合ったところで今後は食事のお誘い。この流れ、乗るしかない。

「身体検査の後はお昼ご飯になるだろ。お一人さんなら俺らと一緒にどうぞだ」

初日ということもあり今日は一日中、各生徒個人の能力を測る身体測定が行われる。午前中に運動能力を、午後に魔法適正の検査をすることになっている。担任であるサンメ先生の話によると運動能力の方は体力や筋力といった基礎的な能力を測るらしい。現代日本におけるスポーツテストみたいなものだ。

午後の魔法適正は外部からその道に通じた専門家を招待して普段測ることのできない能力を調べる。運動能力の測定とは違って目に見えない能力や適性を知ることができるといって貴重な機会で有益だとか。

「いいのか？」

「何言ってるんだ？俺らはもう友達だろ」

「実のところ、友達はいないし一人で食べることも覚悟していた」

「一人で食ったって美味くないだろ」

「どうしたクルウド？急に難しい顔になってよ」

（そうだカノン！数分でも久しぶりに男子の密集した部屋にいたせいですっかりカノ

ンの存在を忘れてた……。お昼ご飯はカノンたちとも一緒に食べることになるし両者に断りを入れておくか)

一人で食べることは最近あったかと振り返るクルウド。初めは友達がいなかったからあるものだと思っていた。

しかし、友達はいなくてもそれ以上の関係の知り合いならいる。それがカノンでありマヤカだ。恐らくカノンに誘われてマヤカも来るだろう。もちろんお昼も一緒なはずだ。そもそもカノンが弁当を持っている時点でカノンは来るしマヤカも来る。

「スタツテ、メルト。多分昼食時には俺以外にも他の奴が来るかもしれないんだがそれでもいいか？」

「別に人が増える分には俺は構わねえよ。メルトはどうだ」

「僕も大丈夫だよ。それじゃあ午前中の身体検査が終わったら一旦教室に集合してそれから3人で食堂に行く？」

「それでいいこう。いいよなクルウド」

まずはスタツテとメルトの二人と友達になった。スタツテは細かいことを気にしなさそうだけど情に厚そう。メルトはきちんと目配りができそうで計算高そうといったところか。

この出会いは息吹が運んできたものかもしれないな。

関係

午前中の身体検査は終わってお昼休み。他の学生と同じようにクルウド一行も食堂に向かう中で一人うなだれていたのはクルウド。理由は運動能力が壊滅的だったことを思い知らされたから。持久走は体力の無さが響いて最下位争いレベルで、水泳もまた然り。転生前の現代日本の方が普通に運動能力が高かった……。

食堂棟は授業用に作られた校舎や鍛錬場とは離れている。その上校舎とは違って、改修も程々に済まされており所々年季の入っているものも、窓が大きくとられていて、太陽の光をうまく取り込める造りとなっている。

「早いところ着替えたから全然混んでいないな。予め掴んだ情報によると昼飯を注文する人で並ぶらしいぜ」

「へえー。それにしても広いな。教室何個分だ」

「元々休みの日だからかな。今日は特別に登校日である新入生と学校に自習しにきた人しかいないと思うよ」

今日は学校に居る学生の数自体が少ないためとても空いている。学食を受け取る列も数人が並んでいるだけ。

この学校は家からの弁当でも学食でも食堂の席は自由に使えるらしく、弁当組でも食堂で食べるのが普通である。教室は勉学の間、食堂は食事の場と明確に区別なされており、教室で昼食を食べることはない。全学年が登校していたら席の取り合いにでもなりそうだ。

「俺は弁当だから。先に席に座ってるわ」

「待てクルウド、お前さんのどこに弁当があるんだよ？ 荷物すらなく、手ぶらじゃないかい」

「今はな。時間が経てば弁当の方から近づいてくる」

「なんだそれ？ 弁当を作ってもらえなかった組じゃないのかよ」

「という訳で2人とも並んできなよ。席の確保はしておくからさ」

「じゃあ早いこと買ってこようかな。スタツテも早く並ぼう」

女子の方が身体検査の始まりが遅かったのでまだ男子のグループしかない。

4人席か、はたまた5〜6人席か、……マヤカも一緒だろうから広いところがいいよな、どうせ今日は混むはずないし、とか考えながら適当に広いところを選ぶ。

隣の芝生は青いとか言うように席選びの最中に他の生徒が食べていた学食も美味しそうに見えるものばかりで……。

でも昼食はカノンが作ってくれた弁当以外を食べる気はない。拗ねるし作ってくれ

たのに申し訳ないし、大体好みのものが多いし。それに多分学食よりもカノンやマヤカが作ったものの方が味も見た目もいいものだろうし。

結論、俺の弁当はカノンの手の内なので食堂でカノンが合流するまでは待たねば。

スタツテたちが学食を手に席に戻ってきてきてもなお、カノンが来る気配がない。仕方ないのでスタツテたちには先に食べてもらっている。

女の子の着替えは時間が掛かるともいうし気長に待つのも男の役目かもしれない。このことで午前中の運動能力検査の結果に一喜一憂したり、家庭や女子の話をしたりで時間をつぶす。

そうして十数分経った頃だろうか、クルウドの目が光る。色的には蛍光ペンの緑色に近い色か。

幸いにも食堂は解放感がある造りで明るいために近くにいたスタツテとメルト以外の生徒らにはバレずに済んでいる。これが闇夜の中だったらきつと心霊現象扱いされただろう。

「おいクルウド、目が緑に光っているぞ！ お前さん大丈夫かよ!？」

「うわぁ本当だ！ 保健室行かなきゃ!」

「ああ、これか。すぐに治まるから心配しなくていいよ。もうそろそろ来るかな」

「何が来るって？　って、？　気なこと言っている場合か！　重症だったらどうするんだ」

どこに居るかを調べるためならせいぜい数秒あれば確認できる。

ということとはこう話している間にもこの目の発光は終わっていないはず。

「まだ光っていたりする？　もう光っていないと思うんだけど……」

「光が消えてる。何だったんだ今の？」

「クルウドは慣れていたようだけど何ともない病気なの？」

突然の目の発光。

事情の知らない者からすると怪奇極まりないが、この発光自体は体に害はない。これは契約の機能の一つである視界共有の行使に伴って起こる現象だ。視界共有の機能を使うと視界を見られた側の目が緑に光る仕組みである。視界共有の機能は精霊限定だ。だから俺のようにカノンの目が光ることはない。

そして、その視界共有が終われば心配と疑念を与えてしまうことを除いて何もなかったかのように元通り。いつものように目は光ることもなければ、眼球はブラウン色のまま。

目が光ってから入り口の方をずっと注視しているとカノンの姿が見えた。やっぱり

カノンの隣にはマヤカもいる。

「あの青髪が例のエルネとのデートを断った奴だと思うぞ。髪が青い女子はそうそういやしないからな」

「ねえスタツテ、口に入れたまま話さないでよ。横にいる僕にまで飛んできたじゃないか」

スタツテがカノンを見て大げさに朝の茶番劇の本人だと教えてくるが、カノンがいることは既に知っている。なんなら素性すら知っている。

「なあ俺たち目を付けられたのか!? 青髪が、近づいてきてる!」

カノンとマヤカがきよろきよろとしながらこちらに向かってくる。やはり話題に上がっただけあって周りの生徒も2人の姿を見つめるや噂し始めた。そんなことを気にすることなく俺が座っている席の前まで近づく。

「兄ちゃん! 待った?」

「つて待て待て。クルウド、お前さんあの青髪の譲さんと知り合いなんかよ! 聞いてねーぜ」

「知り合いつていうよりも……妹だ。言つてはいないからな」

「クルウドは妹がいたのかよ! それを初めから言え」

妹だとカミングアウトをするとツツコミが綺麗に飛んでくる。まさかカノンが俺の妹だとは考えてもみなかったようである。まあ午前中はカノンの話が出てても他人っぽく振る舞って評判を探っていたからだな。

「スタツテとメルトもいたの」

「マヤカとは久しぶりだね」

「お、マヤカもいたのか。そういやあ茶番劇の時も一緒に居たっけな」

「あれのどこが茶番劇よ……」

カノンが俺の右に、マヤカが左にそれぞれ座る。スタツテが男子と女子が隣り合わないようにするかと気を利かせるもカノンは律儀に断る。俺の家でもマヤカの家でもこの並びだし、横の方がいいのは昔のままだ。

「でさ、その二人は誰なの？」

「ああカノンにも紹介しないと、左からスタツテとメルトだ」

「僕はメルネ。クルウドの友達だよ」

「俺はスタツテだ。メルネは昔からの親友で、クルウドとはさつきから友達だぜ。同じクラスだしこれからよろしくな！」

「この感じ、今までノリと勢いだけでしか生きていないよね」

「平和な時代に勢い無くして何ができるってんだ。勢いでゴリ押しだぜ！」

「それじゃあんだ朝の時のエルネと同じよ。煙たがれない？」

「そうか？ 好意的に見られているとも思ってたが、あのエルネと同じにはされたくないからやめるか」

「あの馬鹿はそんなに有名人な訳？ いきなり口説く奴が」

「妹ちゃんだつて知っているはずだ。朝の着替えの時に女子の方でも話題になっていたんだろ」

「ああ……あれね。私には誰も話し掛けてこないのになぜと見られていたんだよね」

「エルネの奴は良くも悪くも人気だつてこつた。だからエルネと対等に……、いやあれは妹ちゃんがエルネよりも二、三枚上か……。ともかく、この学年で一番目立つ奴と騒動を起こしたんだ。女子だけでなく……ああ男子にもだな、しばらくは様子見されるのが普通つてところだ」

初日に喧嘩じみた大事を起こした人物の元へホイホイと近づいてくる人はほぼ皆無だし、いても何かしらの事情を抱えてる人ぐらい。

現に今こうして楽しそうにカノンたちとテーブルを囲んでいても話し掛けて来ない。来るとしたら能天気な奴か、あの赤髪のようにポジティブな野郎だけだろう。

「男子にも？ 私、男子の知り合いは兄ちゃんしかいないけど」

「周り見てみろよ。結構注目されているだろ」

「そうね。警戒までとは言えなくても動向が伺われている感じかしら。学年全体の話題にもなっているらしいし」

「他人事みたいない口調だが、こうなっている原因はマヤカにだってあるだろ。いやあー、まさかマヤカもたいそれたことを言うとはな」

「あれは忘れなさいよ！ きちんと謝ったんだから」

「エルネに告られた後に愚痴を言われた時ぐらいの衝撃だったぜ！ エルネが絡むとマヤカも面白いよな」

「あれは口外しないって約束したよね！ なんで、なんで堂々と言っちゃうのかな！」

「痛い、痛い！」

思いもよらぬカウンターにマヤカが声を荒げて顔を赤らめる。

わざわざ席を立ててスタツテの方に詰め寄るとペシペシと叩く。と思ったら頭頂部後部への連続チョップになっている。一撃一撃がそれほどでもなくても連続だと痛かろうつらかろうといったところか。椅子の上では攻撃を防ごうにも方法は少なく頭を抱え込んでいる。

「しかもその妹ちゃんがああ貴族令嬢ときた」

「カノンが貴族令嬢なわけじゃないじゃない。普通の親友よ」

「本当か、クルウド？」

「ああ。まず俺が貴族のように見えるかよ？ あの女たらしと一緒にするな」

「エルネと同じで好青年で顔はかっこいいが……貴族っぽくはないな」

「貴族には憧れてはいる現状庶民の平民ってことだ」

「貴族なんて身分に縛られて辛いだけよ。エルネだって世間体を気にしなくてはならな
い」

「でもまあ、妹ちゃんはよくエルネと張り合う気になったな。貴族に対してビシバシと物申せる奴はそうそういたもんじゃないぜ」

「知り合いでもないのにデートに誘うからね。知り合いでも拒絶するけど」

「妹ちゃんは手厳しいようで、芯はしっかりとしているんだな。結構親しみやすいぜ」

「ところでさ、妹ちゃんって何？ 物凄く気になるんだけど」

「そう言うところね。名前で呼べばいいじゃない」

皆も妹ちゃんとの呼び名に引っかけかかっていたようだ。カノンは俺の妹だから妹ちゃんなのだろうが、なにせマヤカも近所のおばちゃんたちもクルウドの妹というよりはカノンという一人の可愛い少女として認識しており日常的に名前で呼ぶから違和感満載である。

俺の視点からだと、妹であり、婚約者であり……、やっぱり可愛い少女でもある。

「え？ 妹ちゃん、名前呼んだら怒るだろ。ほら朝の」

「あー……、あれは無性に腹が立ったからそう言っちゃった。もう話し掛けてほしくなかったし」

「そうだったんかい。じゃあカノン、名前でも構わないよな。名前でも呼ぶ関係になつたんだから俺らはもう友達だぜ」

「何その理論？ まあいいけど」

「あら珍しい。初対面はNGなんじゃなかったっけ？ その割には乗り気ね」

確かに普段から優しいカノンも初対面の相手に対しては猫を被るといふか、奥まった感じで接している。

カノンとしてもスタッテが同学年かつ多少話した後だからか気楽なのだろうか。あの素っ気ない態度を取っていたエルネの時に比べるとかなり落差が大きい。

「うーん……兄ちゃんの友達なら精査しないと。もし要注意人物だしたら兄ちゃんが危険だよな。それに実際に関わってみないと分からないことも多いから」

「おいおい、要注意だとか物騒だぜ。友達に手を出す奴なんて友達じゃねーよ」

「カノン。悪い奴なんてほんの一握りしかいないのにいきなり疑うのはどうなんだ。あとで謝りなよ」

カノンが俺のことを心配してくれているのは承知しているが、あの言い方といい、友達をいきなり窺うのはよろしくない。スタッテが言うように手を出すとも思えないの

で注意する。豪快なスタッテなら多少の非礼を気にはしないだろうが。

「なーんてね。試す真似してごめん。兄ちゃんが友達と認めている相手なら一つも心配する要素はないじゃん。兄ちゃんには全幅の信頼を寄せているんだし」

「びつくりしたじゃない。あのカノンの演技、ブラックっていうか重すぎよ。重い女は嫌われるわ」

「兄ちゃんに嫌われることはないもん。ね、兄ちゃん」

「そうだな。今さらカノンが嫌いになることなんてあり得ない」

「ほーらね」

「スタッテ、カノンがあんなこと言ってごめんな」

「いやいいぜ。それにしてもカノンは演技上手だな。挑発されている気分だったぜ」

「そう？　色々な人と交流していたから知らず知らずのうちに自然と身についたのかも」

演技だったと分かりひとまずは安心した。いきなりくつてかかることはないと思っ
ていても何かあつたらとヒヤリとはする。でもしばらくすれば、父さんやエルネの時と
違つて気を許しそう。

ただ、嫌うまでにはいかないけどきつきの発言は重いよね。これだとヤンデレの域に
かかっていると言われても否定しがたい。今まで俺以外の男子と会うことが少なつた

のも、いきなりエルネに絡まれたのも、影響しているのかもしれない。

「おいメルト、何で喋らないんだよ。友達の友達はずなわち友達だぞ」

「エルネの時とは打って変わって、クルウドやマヤカと話している時のカノンが違いすぎたというか……、拍子抜けしたというか」

「兄ちゃんやマヤカとは昔からの付き合いだからね。これが普通だよ」

「……、やっぱり朝の印象が強いよね。エルネさえいなければカノンにも女友達ができたのね……、エルネとのシーンが無ければ——」

「……俺やマヤカは知り合いが多いから休み時間にも言ってくれば紹介するぜ」

「——エルネのせいでカノンが惨めな目に遭うなんて、ほんとエルネの馬鹿！ 女たらし」

「そこまで言わなくても……」

そこはライバルであっても親友。マヤカはカノンが他の学生に避けられていることをエルネのせいだと徐々にヒートアップしていく中で、俺とメルトの考えが見事にハマった時あやつがやって来た。

「やあ僕の名前を連呼してどうしたんだいっ。おや、マヤカにカノン、……うむ。あとは省略して諸君たちっ！」

マヤカの声に反応したかのように颯爽と現れたエルネ。来るならこいつだとは予想

していたが案の定来た。しかし、変なタイミングなこと。この状況で呼びになるものか、普通？

そして、エルネに対しての反応というと……。

「おいエルネ！ 俺は友達なのに省略するなよ」

「どうしたの、エルネ」

「もしかして今の聞いていた!? ……………うん、こちらに非があるけど、お昼の邪魔はしないでもらえる」

「うわあ……、何か用ですか。何もなければなら回れ右してどこかに行ってください」

（これが、エルネ流か……）

といったように他者多様な返しを見せている。カノンもマヤカも関わりたくないようで退散するように促すも全く気に留めない様子。スタツテに至っては男子陣が「諸君たち」と省略されたことに反発している。人数が多いんだからしょうがないのだが。

「ふふ、女子陣がいつもに増して辛辣だねっ！ 僕はもしかしたらお邪魔のようだったかな」

「分かってているのなら帰ってくれないかしら。お昼も食べたいし」

「ちようどいいタイミング！ 僕も実はまだ食べ終えていないのさっ。立ち話もなんだ

し僕も入れてもらおうことにするよっ！」

「エルネ以外全員座っているんだがな」

とのことでエルネも話の輪に加わるのであった。